

「君の名は？！ ジャギ！！」 R15

日夏孝朗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

以前に書いた二次作品をR15で投稿できるように焼き直したもの。

もちろんタイトル通り、北斗の拳とのクロスオーバーです。

第1話  
第2話  
第3話  
第4話  
第5話

目

次

167 135 69 39 1

# 第1話

「君の名は?! ジャギ!!」

西暦2020年、高校2年生の宮水四葉は89才になる祖母に振り起こされて目を開けた。

「そろそろ起きんしゃい」

「……うう……」

四葉の鈴が鳴るように軽やかで可愛らしい声が、殺伐とした世界に生きる野卑な男のような可愛くない呻き方をして、ほつそりとして柔らかそうな女の子らしい可愛い手が、乱暴な可愛らしくない仕草で、頭痛がする頭を押さえた。ティアマト彗星の一部が落下してから7年、吹き飛んだ自宅と神社を建て直すまでの仮住まいとして、糸守高校にほど近い空き家を借りて住んでいる。日本建築の和室で和布団に包まれていた四葉の顔は17才という年齢相応に成長して、可愛らしさと美しさの盛りを迎えているのに、まつたく可愛い下品な顰めつ面へと歪み、再び可愛い声が可愛くなく呻く。

「痛え……いつもの痛さと違うぜ……これは……」

「あんた……四葉やないね」

宮水一葉は7年前にも上の孫娘に起こつた現象を覚えていて、すぐに悟つた。

「ああん? なんだ、この婆ア?」

四葉の身体は上半身を起こすと、愛らしい黒い瞳に不似合いな邪気を浮かべ、きめ細やかなシルクのような額と、あざやかなカーブを描くはずの眉が、眉間にミキミキと皺をよせ、一葉を睨みつけてくる。もう明らかに、いつもの四葉ではないと誰の目にもわかる。

「婆ア、てめえ、死にたいか?」

「……」

一葉は少し考え、部屋にある鏡を指した。

「まずは鏡で、ご自分の顔を見てみいや」

「つ! 貴様ア!! このオレの顔をつ!!」

四葉の身体は布団から立ち上がりつて一葉を見下ろそうとしたけれ

ど、あまり身長差がないので、やや戸惑う。

「おつ？ …婆アのくせに、デカい婆アだな」

「それは、きっと、あんたが縮んだるんよ」

「なんだとお?!」

四葉の町一番と評判の可愛らしい顔が憎らしく歪み、片手で一葉の胸倉をつかんで全身を持ち上げようとしたけれど、腕力が足りずにつぶしに手を払われた。

「…、このオレ様の手を…?! な、なんだ、この手は…」

四葉の瞳が、四葉の手を見て愕然としている。

「…この、ひ弱そうな手が…オレの…」

四葉の瞳が手のひらを見つめ、握つたり開いたりしている。動搖している相手に一葉は穏やかに告げる。

「まあ、落ち着いて聞きいや。あんたは入れ替わったんよ」

「ああん?! やはり貴様、死にたいようだな。婆ア、オレの名を言つてみろ」

「……それを教えてもらえるとありがたいんよ。うちには宮水一葉といいます」

「そうか、お前、死にたいのか」

「案外と長生きでの。来年90になるんよ、あんたは、いくつのお人やつたの?」

「もう一度だけチャンスをやろう! オレの名をいつてみろ!」

「…」

一葉は日本語を話しているのに、どうにも話が通じないので困つた。四葉の両手がパジャマの前を大きくはだけさせ、バーンと胸を張る。

「お前、オレの胸の傷をみて誰だかわからねえのか?」

「…四葉…可哀想に…それ、絶対、外でせんといったつてや」

一葉は少し涙ぐみ、ブルンと可愛らしく芯のある成長した孫娘の乳房と、その頂きに色づき始めたサクランボのように勃つている乳首から、目をそらした。それから、手鏡を取ると、四葉の顔に向かた。「まずは、お顔を見て、状況を知つたてや」

「なつ?!」

鏡に映る自分の顔を見て、ひどく驚いている。

パシッ…ペタペタ…

手で自分の顔を触り、確かめて、より驚く。

「な、なんだ、この女みてえな顔は?!?」

「それが、今の人たやよ」

「この手……この声……つ、胸の傷もねえ！　どうなつてやがるんだ

?！」

「せやから、あんたは、うちの孫、宮水四葉と入れ替わったんよ」「黙れ婆ア!!」

威嚇するように四葉の右拳が壁を叩きつけた。

ドンっ!! グキっ!!

「ぐつ…うう…痛えええ…こんな薄い壁に…」

叩きつけたときの自己イメージでは壁を粉碎するつもりだつたのに、ほつそりとした四葉の手首は捻挫して、かなり痛そうだった。木造住宅の壁は少し凹んでいるものの、四葉の手首も腫れてきている。

「痛ええ…くうう…」

「四葉の身体を大事にしたつてな」

「このオレ様の腕が……筋肉が……こんな、ひ弱な……」

捻挫していない四葉の左手がパパッと動き、腕や胸、お腹を触つてから、プルプルと震えている。

「…オレ様が……このオレ様が……女だと……」

「戻れる方法はあるさかい。まずは落ち着いて、顔を洗つたつてや」「……」

「こつちよ」

もう威嚇するのはやめてくれたようなので、一葉は洗面所へと案内した。

「ほな、これが四葉の歯ブラシやけど……まあ、本人のもんやし、使こたつて」

「……水道？」　おい、婆ア、ここは水道が使えるのか？」

「こんなド田舎でも、水道は使えるさかい。ほれ」

一葉が水道をひねると、蛇口から豊かで美しい水が流れ、四葉の顔が感動している。

「おおつ……水だあ……、水道の水だ……」

もともと可愛らしい四葉の顔が感動すると、クラスの男子たちなら見惚れるような表情になるけれど、どことなく可愛くない微笑みになつてもいる。四葉の口が直接に水道の流れへ唇をつけて、男らしくゴクゴクと水を飲んだ。

「ああ、美味ええ！……水だ……こんなに透き通つた水が……蛇口から簡単に……」

「あんた、どこから来たんよ？」

「ここは、どこだ？」

「岐阜県やよ」

「岐阜だあ？……オレ様は関東あたりにいたはずだぞ」「せやから、うちの孫と入れ替わつとるんよ。身体と心が」「わ……わけのわからねえことを……」

「まあ、顔を洗いいよ。寝癖も、ちゃんと直したつてな」「ちつ……」

四葉の小さな舌が口内で舌打ちしたけれど、透き通つた水へ両手を伸ばすと顔を洗い始めた。

「……はあああ……気持ちいいぜ。何年ぶりだ……最高だぜ」

「……。タオル、ここにあるよ」

「おう」

顔を洗つた後、寝癖のついた髪を手櫛で搔き上げると、オールバツクに撫でつけた。いつものツインテールではない大胆なオールバツクになつた孫娘の姿を見て、一葉はタメ息をついた。

「はああ……まあ、今は、そんでもええわ。朝ご飯を食べながら、細かいことを話すさかい。落ち着いて聴いてやつてな」

「……」

四葉の両手がお腹を撫でた。それから、天井を見上げる。

「電灯がついてやがる……、ここには電気もあるのか？」

去年、節電のためにLED球に替えた電灯が洗面所を明るく照らしていた。一葉はド田舎に住んでいるという自覚はあるものの、いくら何でもバカにされている気はしたけれど、相手の性格が乱暴そういうのは、もう十分にわかつたので年長者らしく無難に答える。

「ええ、昔はダム建設に反対した地区も近隣にあつたよって、電化は遅れたけれど、今は普通に電気もあるよ」

「電気が……」

四葉の指がスイッチを押して電灯をつけたり消したりしている。

「……。朝ご飯にしましょ。こつち来てや」

「おう。……畳かあ……久しぶりだなあ……」

居間へ案内されて畳に座ると、懐かしそうに撫でている。

「いい感触だ……」

「……。ともかく、ご飯を食べんしゃい」

「あ、ああ。……おお？ 米か？ 米も作つてゐるのか？ この地区は

「わざかな平地しかないけど、田んぼも少しあるんよ。衝撃波と降り積もつた灰のせいで、何年も満足に収穫できんかったけど、三年ほど前から、ようやくね」

「そうか……、美味い……、美味しいなあ……」

箸を使って白米を噛みしめると、しみじみと味わつてゐる。不意に町営放送が始まり、壁掛け式の放送機器が音声を流してくる。名取家の長女の声だつた。

(「ちらは糸守町選挙管理委員会です。現在、告示されております町議会議員選挙立候補者の政見放送をお送りします。今朝は勅使河原三葉さんから）

「…………」

(おはようございます！ 勅使河原三葉です！ 糸守を危機から救うため！ 私は頑張ります！)

宮水家の長女の声が響いてくると、一葉は苦虫を噛み潰したような顔になつた。

「あのバカ娘が……、バカ婿の血を引きおつて……」

そつと一葉は放送機器の音量を最小にした。四葉の口が白米を噛みしめながら言つてくる。

「選挙だア？ ここでは選挙なんかで支配者を決めてるのか？」

「くだらんことや。気にせんでもええよ」

「ああ、くだらねえな」

そう言いつつ四葉の唇は美味しそうに鰯の塩焼きを頬張つた。一葉は静かな声で語りかける。

「選挙なんかより、落ち着いて聴いてな。あなたは、うちの四葉と身体が入れ替わった。けど、そう長いことやない。そのうち、自然と戻るさかい、それまでは宮水四葉として生活してやつてほしいのよ。学校にも行つて、ごく普通に」

「学校まであるのか……」

「まず、あんたのお名前を教えてくれはる？」

「オレの名を聞きたいか？」

「……一応」

「オレ様は一子相伝の北斗神拳唯一の伝承者ケンシロ……いや、ジャギだ」

「ジャギさんやね。名字は？」

「北斗ジャギだ」

「北斗ジャギさん……一子相伝とな。あんたも、大変な家のお人なんかもしれんね。うちの神社も三葉が、ああなつたからには、四葉に継承してもらうしか……血は争えんのかねえ……」

「ふつ、血で血を洗う戦いこそ、望むところよ。ようは勝てばいいのよ、勝てば」

四葉の唇が不敵に微笑み、味噌汁を啜つた。

「う……美味しいな……こんなに美味しい飯は、本当に、いつから喰つてないか……」

「お口に合つて幸いやわ。ほな、ちゃんと四葉として生活してくれたら、お夕飯も提供するよつて、頼むね」

「…………ちつ……婆アが……」

舌打ちしたけれど食べ終えると、教えられた糸守高校の制服に着替えて外に出た。

「まぶしい……空が澄んでやがる……植物も、こんなに……」

しゃがみ込むと道ばたに生えている草花を見つめた。

「緑ってな、こんなにあざやかだつたか……。おつと、しゃがんだら小便したくなつた」

さつと四葉の脚は立ち上がりると、肩幅に開いて、その手がスカートをまくつた。

「ん？ ……無い……ああ、そうか。この身体、女だつたな。……ちやんと飛ぶのか……」

あるべきものが無いけれど、下着もよつて飛ばしてみる。

シャー…

前に飛ぶように四葉の背中が大きく反つていて。おかげで、だいたい前に飛んだ。そんな四葉の背中に二人の級友が近づいてきた。

「おはよう、四葉。……」

「おはよう、四葉ちゃん。何して……」

幼馴染みの勅使河原司と名取沙耶香は、いつも通りの挨拶をしたけれど、四葉の足元に生えているタンポポが朝日を反射してキラキラと濡れて輝いていること、ほんの数瞬前までの四葉の姿勢から、まさか、という思いで黙り込む。なのに、四葉の表情には一欠片の恥じらいもない。もしも立つて道端で用を足していたなら、女子高生にして人生最大の悔いになりそうなものなのに、人生に一片の悔いもないような堂々とした顔をしているので、むしろ司と沙耶香の方が見てはいけないものを見てしまつたように目をそらしてしまう。

「お前たち、オレの名を知つてているのか？」

振り向くと、まくつていた四葉のスカートは重力のおかげで戻つてくれたけれど、ブラウスの前にあるボタンを一つも留めずに胸を全開していたので、司は男子として赤面して困惑する。沙耶香が驚いて指摘する。

「よ、四葉ちゃん！ ボタン！」

「あん？」

「ブライジャーもしてないの?!」

「……ああ、この身体は女だから、そういう物も……」

全開にしている胸元が風になびいて、心地よく涼しいけれど、ブライジャーも着けていないので大変なことになっている。

「四葉ちゃん！ 前を！ 留めようよ！」

沙耶香が急いでボタンを留めようとしてくるけれど、その手を四葉の手が払つた。

「うつとおしいぞ！ このアマ！」

「つ……ひどい……、……もしかして？ 四葉ちゃんは、いつもの四葉ちゃんじやない。別の人なの？」

「貴様、このオレを見て誰だかわからねえのか？」

「わかんないよ。また東京の人？」

「そうか、お前、死にたいのか」

「何言つてるか、わかんないから。それ東京のジョークなの？」

「もう一度だけチャンスをやろう。オレの名を言つてみろ」

「……タチ：なんとか、さん？ 7年前に来てたつて話は、お姉ちゃんから聞いたことがあるけど…」

沙耶香は7歳年上の姉、名取早耶香から、おぼろげに聞いていた話を思い出そうとしているけれど、四葉の顔は邪気に満ちて言つてくれる。

「オレはウソが大嫌いなんだ」

四葉の左手が沙耶香の胸倉をつかんだ。か細い女子高生の腕なのに、グイッと力を込められると沙耶香の爪先が浮く。まるで筋肉の潜在能力を100%使つているかのような力強さで沙耶香は息が苦ししくてもがいた。

「うう…うう…」

「やめてやれよ！ 四葉じゃないな?!」

さすがに司が止めに入る。もう司も、いつも四葉ではないと、ほぼ確信していた。

「兄貴から聞いてた入れ替わりってことなのか？ 君の名は？ 誰だよ、君は？」

「お前、オレの名を言つてみろ」

邪氣に満ちた命令口調で言われると、やたら迫力があるので司も戸惑う。

「…………、…………宮水、…………四葉だつたと思うけど…………今は入れ替わつて……誰かになつてるんじや?」

「そうか、お前も死にたいのか」

「だ、だから、何が言いたいんだよ?!」

「お前、オレの胸の傷をみても誰だかわからねえのか?」

四葉の両手がブラウスの前を全開にグイっと広げると、形のいい乳房があらわになつてプルンと揺れ、さらに乳首まで丸出しになつたので司の脳裏に焼き付いて離れなくなる。思考停止しそうな司だつたけれど、それでも答えた。

「…………傷なんて…………無いよ。…………」

「あん?」

言われて四葉の瞳も自分の胸を見る。

「…………ない…………なんだ、この胸は…………、あ、ああ。 そうか。 今は女の身体になつて いるんだつたな。 つい忘れちまう」

四葉の手が、愛らしい形の顎を撫でつつ悩む。

「うむむ…………。 とりあえず、今は様子を見るしかねえか。 おい、お前、ここのオレの身体についてる名前は、宮水なんだつて?」

「四葉だよ」

「そうか。 お前の名は?」

「ボクは勅使河原司、四葉はテツツーつて呼ぶけど」「よーし。 貴様は?」

四葉の瞳が横柄に沙耶香を見る。

「私は名取沙耶香、呼び名は……」

あまり言いたく無さそうにして いると、司が笑いながら言う。

「サヤボボだよ」

「その名で呼ばないでよ!」

「お前らは、この四葉の何だ? 手下か?」

「手下つて……」

司と沙耶香が異口同音し、司が気を取り直して答える。

「同じ学年の友達だよ。ちょうど、ボクらの兄や姉が同じだけ歳が離れていて、よく行事ごとなんかで、いつしょに行動したからさ」

「兄弟か……ちつ…」

なぜか兄弟と聴いて舌打ちした四葉の胸元が開いたままなので、沙耶香がブラウスのボタンを留めてやる。

「四葉ちゃんの中身が別の人に入れ替わったのは、わかつたから。せめてボタンくらい留めさせて。女の子なんだから」

「ちつ…」

今度は二つほどボタンを留められてから、沙耶香の手を払つた。ギリギリ乳首は見えなくなつたので沙耶香も諦める。

「四葉ちゃん……えつと、四葉ちゃんって呼んでいい？」

「…………うむ……まあ、いいだろう」

少し迷つて頷いた。また気持ちのいい風が吹いて、オールバツクになつている四葉の髪が揺れると、それを見た司がつぶやく。

「ツインテール……似合つてたのに…」

「あん？」

「な、なんでもないです！」

「そろそろ学校に行こうよ。遅刻しちゃうから」

沙耶香に促されて三人で歩き出した。しばらく歩いて四葉の唇がつぶやいた。

「ここは、ずいぶん復興しているんだな」

「そうだね。直撃だつた、あっち側は、あのままだけど」

沙耶香の視線の先にはティアマト彗星の一部が直撃した地区がある。大きなクレーターが爆撃痕のように残つていて、道路も寸断されたままだつた。ちょうど、そのタイミングで選挙カーが通りかかり、三葉がマイクで叫んでいた。

「いまだ復興は道半ばなのです!! なのに国と県は糸守町の人口が少ないといつて補助金を削ろうとしてくる!! さらには市町村合併で糸守の名まで奪おうと! 私は糸守を守りたい!! 父とともに! そして勅使河原建設とともに! どうか清き一票を! 勅使河原三

葉です!! 勅使河原三葉!! 勅使河原三葉!! 勅使河原三葉に、どうか清き一票をお願いします!! 糸守を守る! その名は三葉! 私の名は三葉です! よろしくお願ひします!」

他の候補者よりも大きな拡声器から響いてくる勅使河原三葉の声を聴いて、沙耶香は吐き捨てるようになってしまった。

「何が清きよ…………不倫女が!」

「なんだア? 殺気立つて。あいつを殺したいのか?」

「そうよ! 殺せるものならね!!」

「サヤボボ、そんなことを四葉の前で言うなよ……」

司がたしなめるけれど、沙耶香は腹に据えかねている。

「いいじやない! 今の四葉ちゃんは四葉ちゃんじやないんだから!」

「あん? 貴様、わけのわからねえこと抜かしてると、お前を殺すぞ」

「う、ごめんなさい…………これには、わけがあつて……」

「ボクから説明するよ。我が家の恥でもあるからさ。もともとボクの兄、勅使河原克彦とサヤボボの姉、名取早耶香は、この町にいた頃から付き合いで東京で結婚したんだ。四葉の姉、今通った旧姓宮水三葉と、東京の男性も同じ日に同じホテルで合同挙式をね」

「運命の出会いとか言いよつて! 付き合つて三ヶ月もないのに結婚しよつてんよ! そんなん、うまくいくはずあらへんやん! 入れ替わつてたときでも、しょっちゅうケンカしてバカだの、アホだの顔に描いてあつたつて話やのに! そこで結婚して、たつた三ヶ月で離婚しよつて! 合計半年も保たんと破綻して! あの女は寿退職しどつたから東京で行くあてもうて! うちの姉ちゃんらのマンションに転がり込んだかと思つたら、あの泥棒猫!!!」

あまりに悔しいのか、沙耶香は電柱に拳を叩きつけた。さきほどの四葉の手首と同じく捻挫して腫れてしまい、手の甲に血も滲むけれど、かまつていない。さらに、近くにあつた掲示板に貼つてある三葉のポスターも殴りつけている。怒りきつている沙耶香に代わつて司が説明を続ける。

「ようするに不倫だよ。で、結局、うちの兄は、あの三葉を選んで離婚して再婚。そういうことだよ」

「両方の親の力に頼つて!! 札束で人の顔を叩くような慰謝料を積んで、うちの姉ちゃんの気持ちをズタズタにしよつてん!!」

「…………」

「おかげで、姉ちゃんは声が出せんようになつてしまつて！ そのくせ、自分らも離婚するときのゴタゴタで仕事も辞めてしまつて。東京で再就職もできんと、田舎に逃げて帰つてしまつたんよ！ どのツラさげて選挙にまで出よるんよつ！ 恥知らずが！」

さらに沙耶香がポスターを殴ると、凹んだ。

「選挙はタイミングの問題もあるけど、ボクの家は土建屋、宮水のお父さんは多選の町長。そして今、この糸守町には市町村合併の話がきてる。東京の霞ヶ関は、お金のかかる山間部の復興より、麓の市街地へ町民を移住させて、この地区の復興は中止したいんだ。それで町は合併賛成派と反対派に分かれての選挙になつて。ちょうど25歳で被選挙権もえた娘までかり出して争つてるわけさ。幸か不幸か、うちの兄とサヤボボの姉さんは東京で挙式して日を置いてから、この町でも披露宴をするつもりだつたけど、その前に離婚したから町民たちは不倫のような、恋愛のもつれのような、そんな曖昧な感じに受け止める。もつとも、そんなタイミングで選挙に出るのを決断したのは血筋なのかもね。お父さんとしても子育てを放棄して出馬されたらしいし。お姉さんも、ずいぶんと前向きに出馬したそうだよ。糸守を守るといえば、聞こえはいいけど、結局は地方の利権を守りたいのさ」

「…………」

黙つて聴いていたけれど、難しい話は苦手なのか、四葉の首は二三度、グルグルと回ると、オールバックの髪を搔き上げ、問う。

「ようするに女がらみの惚れた盗つたの話だな。まあ、今は悪魔がほほえむ時代だからな」

「ホントそう！ 悪魔みたいな女!! 邪神の巫女だよ！ 反吐が出る

！ あの反吐女！ ……あ、四葉ちゃんのことじやないよ。四葉ちゃんのことは、そんな風に思つたこと一度も無いから！ ホント！」

言い過ぎたかと思い沙耶香はフオローを入れたけれど、四葉の手は拳を握つて固めた。

「どどのつまり、殺したいほどムカつくつてことだな。いいだろう。オレ様が殺してやる。ちょうど、この身体で、どれほど戦えるか、試してみたいところだつたんだ」

三葉の名を連呼していた選挙カーは再び、三人の前に戻つてきていた。小さな町の選挙なので集落を一回りすると、同じ道に戻つてくるパターンが多い。そして、通り過ぎようとする選挙カーの前に、四葉の身体が飛び出して、立ち塞がつた。

キーッ！

選挙カーは急ブレーキをかけ、低速だつたおかげで四葉の身体を撥ねずに鼻先寸前で停車した。四葉の目は、そのブレーキングを見切つていたように微動だにしない。そして、四葉の唇が不敵に囁く。

「気に入らねえヤツは、みんな殺してやる。それがオレのポリシーよ」

「危ないでしょ!! 四葉、何考へてるの?! バカっ!!」

助手席でマイクを握つていた三葉が、車窓から顔を出して妹を怒鳴つた。四葉の顔は邪気に満ちた微笑みを浮かべる。

「フフ…これから貴様に生き地獄を味わわせてやろう」

「何を言つて……まさか、四葉、あなた、入れ替わりがおきて…」

入れ替わりの記憶は曖昧になついていても、あまりに様子が違う妹を見て、すぐに経験がある三葉は悟つたし、四葉の目は本物の殺氣で光つている。とても危険な匂いがした。その危険さは司も感じたので、あらかじめ告げておく。

「殺すつて本気じやないから! 殺したいほどつて意味でさ! つて  
いうか、トラブルは、うちの家も困るんだ!」

「あん? ジやあ、手足の二三本、引きちぎつてやろう

「そ、それもダメだつて!」

「けつ…じやあ、手足の一一本、へし折つてやろう」

「骨折も、ちよつと、マジで困るから!」

「ちつ…まあ、いい。それなら、いい秘孔がある」

「四葉！　いい加減にしなさい！　選挙は、子供の遊びじゃないんだ！」

選挙カーの後部に乗つっていた宮水俊樹が降りてきて、道を塞いでいる次女を叱る。

「四葉、邪魔をするんじゃない！」

「邪魔は貴様だ」

四葉の膝は近づいてきた父親の顎へ、飛び膝蹴りを入れた。

バコツ！

「あぐっ！」

鋭い蹴りで父親を失神させた四葉のスカートは舞い上がり下着を司たちに見せつけたけれど、まつたく気にしていない。

「四葉っ？！　なんてことするの？！」

驚いた三葉も選挙カーから降りてくると、妹の顔を睨んだ。

「いいえ！　あなたは四葉じゃない！！」

「そうよオ、オレ様は四葉ではない。オレの名を言つてみろ」

「えつ……」

「さあ、このオレ様の名を言つてみろ」

「……そんなの知るわけ……ない……」

「お前、オレの胸の傷を見ても誰だかわからねえのか？」

四葉の両手がブラウスをはだけさせて、胸をバーンと丸出しにすると、三葉は妹のために怒鳴る。

「やめなさい！　わかっただわ！！　また、タキッ！！　あなたが入つてるのはね！　妹の身体でリベンジ・ポルノなんて、どこまで最低なの？！　離婚して正解だつた！！　あなたは父親と同じよ！　結婚生活の継続なんて、できない！！　もう血筋ね！！　何が胸の傷よ？！　どっちが傷ついたと思つてるの？！」

「もう一度だけチャンスをやろう。オレの名を言つてみろ」

「チャンスっ？！　笑わせないで！　あなたと暮らすなんて二度とごめんよ！！」

「ほ〜〜オ、それではオレの名を言つてみろ」

「バカタキ！！　二度と私の前に現れないと！！」

「オレはウソが大嫌いだ」

「あいかわらず人の話を聞かないのね!!」

「くらえ！」

四葉の右手が鋭く伸びてきて、人指し指で三葉の胸のあたりを突いた。

「きやつ?!」

「フフフ…」

「この変態！ また、私の胸を!!」

「胸椎の秘孔、龍頷を突いた。貴様の身体は、むき出しの神経で包まれている」

「はあ?!」

「指で触れただけで全身に激痛が走る」

四葉の右手が軽く、三葉の肩に触れる。

「触らないで！ 変態…い、いぎややあ?!」

三葉が苦しみ悶える。軽く触れられただけなのに、肩に激痛が走り、身悶えしていた。

「ぐうううう！ 痛いいい！ あぎややああ！」

「フフ…痛いか。痛いだろう。じつくりと痛みを味わうがいい」

「ああああ!! 痛い痛い痛い!!」

三葉は衣服や靴が身体に触れているだけでも痛いようで、無理して履いていたパンプスを脱ぎ捨て、さらに女性立候補者らしいタイトなスースを着るために、補整下着で締めつけていたウエストが焼けるようく痛み、無我夢中で脱ぎ捨てている。

「ハア…ハア…ううううう…」

恥ずかしいという感情はあるけれど、火のついた服を着ていられないうように脱がずにはいられず、どんどんと脱いでいく。

「うううう…痛いいい…」

ポヨンと白米の食べ過ぎで25歳にしては膨らみすぎた腹部を揺らしながら、とうとうショーツまで脱ごうと引き下げ始めた。立候補中の女性が道端で全裸になりかけているという事態に、選挙力ーや後続車に乗っていた運動員たちが慌てて出てきて、三葉を車に押し込む

けれど、担ぎ上げられると、また身体に激痛が走り、叫ぶ。

「いやあああああ！　触らないで！　触らないで!!　痛いいいい！」

「いぎぎいい！」

「勅使河原先生、しつかりしてください！　しつかり！」

「ちよ、町長さんも運ぶんや！」

氣絶している俊樹も車に担ぎ込まれ、選挙カーと後続車は急いで走り去つて行つた。

「フ…フフフ…ファッハツハツハハハ!!　ハア…ツハツハツハハ!!」

勝ち誇つたように四葉の胸は張られ、可愛らしい声で下品に高笑いしている。つられて沙耶香も嗤つた。

「きやははははは！　あの女の悲鳴！　最高！　んくく、いい声ね…胸がスーーツとする…」

「サヤボボ…けど、こんなことして大丈夫なのか？　かりにも町長と町議の立候補者に…」

司が不安そうに問うと、沙耶香は少し考えて答える。

「大丈夫よ。四葉ちゃんからみて、父親と姉だし。家族のケンカみたいなものやん。何より、今の醜態、噂になる方が選挙に悪影響あるもん。絶対、黙つてるよ」

「そ…そういうものか…」

「この町の選挙、田舎のローカルルールで、本当やつたら拡声器をつての選挙活動は朝8時から夜8時つて決まつてのを、町長選挙のときでも登校時間にやつてたり、逆に日暮れ後の自肃は早かつたりするし。だいたい、さつき町長が、いくら娘とはいっても立候補者の選挙カーに乗つてたのは、どう考へても問題やもん。絶対、黙つてるつて

「な…なるほど…」

「さあ、もう学校に急ごうよ」

三人で登校して、授業中も机の上に四葉の足をのせて、ふんぞり返るのを教師が注意しようとするのを司と沙耶香で必死にフォローして、昼食はおとなしく食べててくれたものの、体育の柔道では男子全員を投げ飛ばして手下宣言するので、クラスメートとの関係修復にクタ

クタに疲れて、それでも目が離せないので帰り道も、家まで送ることにして三人で歩いているときだった。

「あ、お姉ちゃん」

沙耶香は姉の名取早耶香が、トボトボと静かに白い子犬の散歩をしているのに出会った。

「……」

妹に気づいて、早耶香は力なく微笑み、手を振ってくれる。ふつくらとしていた頬は痩せ、微笑みをつくつてはいるけれど、元気が無いのは誰の目にも明らかだつた。

「なんだ、あの陰気なアマは」

「今朝、話したサヤボボのお姉さんだよ。ショックで声が出せなくなつたんだ。けど、耳は聞こえているから、変なことは言わないであげてほしい。これ、ホントマジで頼むよ」

「ふーん……声がねえ…」

興味なさそうに四葉の両腕はあげられると、後頭部で両手を組む。おかげで、ブラウスのボタンが二つしか留まつていなかったために、司は目のやり場に困つた。体育で大暴れしたこと也有つて、四葉の身体から汗の匂いもする。その匂いが甘酒のように、いい香りだつたので司は誘惑されそうになり、首を振つて話を戻す。

「無理もないよ。彼女は親兄弟より長く、いつしょにいた人間2人に目の前で裏切られたんだ……生まれてこない方がよかつた、なんて考えられると危ないから、発言には注意してあげて。……以前は放送部で活躍するくらい、いい声の家系だつたのに……」

「そうか…」

フライリと四葉の足が早耶香に近づくと、連れていた子犬が吠えだけれど、四葉の瞳が一睨みすると怯えて小さくなつた。早耶香も恐れを感じてビクツとした。

「大丈夫だ」

「……」

「動くんじやねえぞ」

そう言つて四葉の両手をゆっくりと伸ばして、早耶香の後頭部へ回

すと、かすかに指先で押した。見ていて心配になつた司が問う。

「お…おい、何のマネだよ？」

「しゃべれるように、おまじないをしたんだ」

「おまじない……」

「あとは、この女の心しだいだ。心の叫びが言葉を誘う。まあ、もつと強く押せば即効性があるかもしれないが、オレはこの手の手加減が苦手でよ。兄者なら、一発かもしれないが、オレが強く突くと肉体を内部から破壊しちまうからな」

「内部から……」

「さて、腹が減つた。さつさと飯が食いたいぜ」

四葉の足が宮水家に土足で上がり込むと、一葉に問う。

「おい、婆ア！ 飯は何だ?!」

「飛騨牛コロッケと葉包み寿司にしたよ。四葉の好物じやけん、あんたの口にも合うでしょう」

「コロッケかア」

四葉の顔が嬉しそうに微笑んだ。その微笑み方が男っぽいので、顔の可愛らしさと相殺されて、愛らしいのか不気味なのかわからない黄昏時のような表情になつてている。

「この町ではコロッケみたいな油を大量に使う料理ができるんだなア」

「……ええ…まあ…」

一葉は、よほど貧しい食生活をしているのかと悟つたけれど、あえて口にも顔にも出さないで、そつと足元を指した。

「せめて、靴は脱いでやつてな」

「おう」

その場に四葉の靴を脱ぎ捨てると、ガツガツと夕食を平らげる。満腹になると眠そうに畳へ寝転がつた。あえて一葉は風呂は勧めずに就寝を促す。

「今日は疲れはつたやろう。もう、おやすみなされ」

「おう。そうする」

二階の四葉の部屋へ入ると、着替えもせずに制服のまま布団に潜り

込む。

「布団がああ……いい感触だア……」

柔らかい和布団に包まれて、四葉の目は幸せそうに閉じられ、すぐに眠りに落ちたし、その寝顔は無邪氣で可愛かつた。

翌朝、四葉は悪夢から目覚めたようにガバッと起き上がった。

「ハア…ハア…なんて悪夢なの…」

その顔に冷や汗が浮き、青ざめている。

「最悪の事態…ハア…最悪の世界…ハア…隕石どころじゃない…核戦争なんて…」

汗が流れ、涙が滲んだ。

「…ハア…うう…お母さん…私は、……どうしたら……こんな使命…重すぎる…いつたい、どうしたら…うう、ぐすつ…違う！泣いてる場合じゃない！」

制服のまま寝ていた四葉は自分の頬を叩くと、布団から飛び出して机に向かつた。ノートとボールペンを出して、自分が体験した出来事を書き出している。

「忘れないうちに…曖昧にならないうちに…魂の記憶を…脳の記憶に…」

四葉が起きた気配を感じた一葉が部屋に入ってきて声をかけてくる。

「四葉、起きたのかい？」

「…うん…」

いつもより優しい祖母の気遣うような声に、四葉は必要最低限の返事をして、目はノートへ向けたまま、手は素早く動かし続けている。

「四葉、まずは、落ち着いて。お風呂にでも入りなさいな。まだ、時間が早いよって」

「…」

時計は、まだ午前6時過ぎだった。

「沸かしておいたでの」

「ありがとう。でも、今はいい。時間がないの、しばらく話しかけないで」

四葉はノートに書き記す作業を続け、それが終わると、待つてくれた祖母に声をかける。

「昨日の私は、どんなだつたの？ どんなことをして、どんなことをしなかつたの？ 些細なことも漏らさないように、彼の口調や態度も教えて」

四葉は、ほぼ無意識的に全開になつてingブラウスのボタンを留めながら問い、一葉は要望に応えて昨日の言動を包み隠さず話した。

「…………そんなどをしていたの…………」

「あんまり気に病まんときの」

一葉は孫が絶望的なまでに思い詰めた暗い顔をしているので、心配で胸が痛くなつた。そして入れ替わりが一度で終わらないことも、わかつてing。一葉は励ますように四葉へ言う。

「あの男が今度、勝手をしよつたら、懲らしめちやるきな」

「お婆ちゃん、それは絶対にやめて」

四葉が真剣な顔で祖母に言う。

「たぶん、私が入れ替わつていた男は山賊の頭目みたいな男よ。手下が何人もいたから。だから、下手に逆らうと、本当に人を殺しかねない。ううん、平氣で普通に殺すわ。日常的に人殺しをしてるようなやツら。私が捕虜の処刑を止めたら、え？ 今日は、そんな甘い処置でいいのか、むしろ殺すのが楽しみなのに、つて顔で手下たちが不思議に思つていたくらい。幸いマスクをかぶつていたから、私の表情を見られることがなくて、なんとか乗り切れたけど、あまり甘い対応をしていると疑われそだつたから」

四葉は痛みの記憶が残つてingかのように、左の前頭部を手で押さえた。

「四葉……」

「とにかく、もう一度、あの男、ジャギの言葉遣いや考え方、仕草を私に教えて。あと、お婆ちゃんが美味しい食べ物で、あいつを誘導したのは正解だとと思うから、図に乗らせない範囲で、美味しいものを与え

ておいて。あいつだって、この身体にいるときは少しは不安なはず、あんな筋肉隆々の身体から、この身体じやあね」

四葉は少し痛い手首を撫でた。手首の痛みの次には全身の筋肉痛を自覚する。おそらく学校で何かしたのだと思い、そのあたりは沙耶香たちに訊くことにして立ち上がった。

「ちょっと早いうちに行くね。サヤボボとテツツーからも話を聞きたいから」

「四葉、朝ご飯は？」

「ごめん、食欲がないの」

あんな流血シーンを見た後じゃ、という気持ちは祖母を心配させるので口にせず、四葉はオールバックで寝たためにグチャグチャになつた髪を巫女として神事に臨むときのような一纏めにすると、首の後ろで組紐で結んだ。玄関を出て、すぐに沙耶香と司に出会つた。

「…おはよう、四葉ちゃん?」

「四葉、だよな?」

「ええ」

「よかつたあ…」

ホツとしている二人に問う。

「昨日、私が何をしたのか、どんなだつたのか、細かく話してほしいの」

「四葉ちゃん!!」

急に感情的な大声で叫んだ沙耶香が迫つてきたので、四葉は叩かれるとかと少し覚悟したけれど、抱きしめられて戸惑つた。

「な、なな？　なに、サヤボボ？　なんなの？」

「ありがとう！　四葉ちゃん！　お姉ちゃんが話せるようになつたの!!　声が出るようになつたの!!」

「サヤチンさんの声が？　どうして？」

「四葉ちゃんのおかげだよ!!」

「ぜ、ぜんぜん、わかんない。ちょっと落ち着いて！　ジャギは乱暴したりしなかつたの？」

「ら…乱暴もしよつたけど…」

「効いたんだよ！　あのおまじないがさ！　そんでサヤチンさん、以前みたいにキレイな声が出るようになつたんだって！　あの五百人を救つた声がさ！　すごいぜ！　あのおまじない！」

「ごめん、二人とも落ち着いて。大事なことだから、順序立てて、朝一番の昨日の私、つまりジャギのことから話して。お願ひ、とても大切な」

「朝一番……」

司が赤面して何かを思い出している。それを沙耶香が睨む。

「テツツー、エロいこと思い出しとるやろ。最低やよ」

「な、なにも！　何も無かつたつて！」

「話してみて」

「け…けどよ…」

「いいの。話して。どうせ、男みたいにオシッコしたとか、そんな話でしょ。そういうのも、細かく話して。癖とか、態度とか、全部。私がジャギと入れ替わってるとき、マネしないといけないから」「じゃ…じゃあ…」

司は話そうとして、つい四葉の胸元を見てしまい、今日もノーブラなことに気づいた。ボタンはすべて留められているけれど、つんと乳首が勃っているので、よくわかる。沙耶香も気づいたので小声で教える。

「四葉ちゃん、ブラ」

「あ……ちよつと待つて」

とくに赤面することもなく、四葉は家に戻つてブラジャーを着けて出てきた。ブラジャーのことよりも時間を気にして、話を進めさせてくる。学校に行くまでに昨日のことを一人から聞いて、やはり四葉は思い詰めた顔になつた。

「四葉ちゃん、……」

沙耶香が慰めようと、声をかける。

「あ…あのね、お姉ちゃんから聞いた話やけど、案外、入れ替わりも、楽しんでる様子もあつたみたいよ。東京観光できたりとか。男友達ができたりとか」

「…………うん、…………ありがとう、サヤボボ」

荒涼とした砂漠と化した東京や、邪氣と元気に溢れている手下たちを思い出した四葉が棒読みで返答したので、ますます沙耶香は心配になる。

「な……なにより！　お姉ちゃんのこと、ありがとう！　ジャギさんにも伝えておいてよ！　ホンマありがとう！」

「うん…………けど、もともと、サヤチンさんのこと、…………うちの家の責任でもあるし」

「…………四葉ちゃん…………四葉ちゃんは何も悪くないんやから…………そんな顔、せんといてよ」

「四葉、気にするなつて。学校で何か言われても、守るから」

「…………うん…………ありがとう…」

思い詰めて考え込んだ顔のままの四葉と沙耶香、司の三人が校門まで着いたときだつた。

「おい、宮水！」

クラスメートの男子が呼びつけてきた。明らかに敵対的な声色だつたので、司と沙耶香が守るように前に出る。呼びつけてきた男子は朝練だつたのか、柔道着を着ていた。

「昨日は油断しただけなんだ！　もう一度、勝負しろ！」

「え……？　なに？」

意味がわからぬという風の四葉に沙耶香が耳打ちする。

「昨日、体育のとき、全員投げ飛ばしたこと、話したやん。それやと思うわ。彼、柔道部で全国大会にも出てるもん」

「ああ…………その話…………くだらない…」

四葉がタメ息混じりに言つたので、ますます男子が怒つた。

「き……きさまあ！　オレを誰だと思つてるんだあ～～～～！」

グワツと男子が迫つてくると、四葉は据わつた瞳で見つめ、右手の人差し指を相手の眉間にビタアツと向けた。

「うつ……くつ……」

あまりにも四葉の目が据わつていて静かな殺気さえ感じるので、男子は動けなくなる。

「死ぬよ」

ズンと据わった目で四葉に告げられると、男子は腰を抜かして座り込んだ。

「はつ…はぐつ…」

「昨日の私が手加減しなかつた、とでも思うの？」

もう戦意を失つた相手に背中を向けて四葉は昇降口へ向かつた。  
沙耶香と司が追いかけてくる。

「四葉ちゃん、四葉ちゃんよね？」

「四葉なんだよな？ 四葉！ ジャギさんじやなくて！」

「ええ、そう言つてるでしょ」

「「だつて、今の…」」

沙耶香と司が顔を見合わせると、四葉は再びタメ息をついた。  
「あんな世界に一日いれば、こうもなるわよ。ちょっと殺氣を込めて睨んだだけなのに、大袈裟よ。無意味な戦闘をさけた私に感謝してほしいくらいなのに」

「…………」

一昨日までは、存在感が違つてきた四葉に戸惑いつつも、三人で教室に入り授業を受ける。その授業中も、ずっと四葉は思い詰めた顔をしていた。中休みになつて沙耶香が声をかける。

「四葉ちゃん、大丈夫？」

「…………」

そう声をかけられても返事もしない。

「ねえ、四葉ちゃん」

「…………え？ ……なに？」

「大丈夫なの？」

「…………さあ」

「授業、ぜんぜん聴いとらんよね。仕方ないとと思うけど、テツツーと学年の1位2位を争う四葉ちゃんが、そんなやと先生らも心配しよるよ」

「そうだぜ。この分じゃ、次の1位はもらひだな」

あえて励ますために司が笑いながらいうと、沙耶香もその意図にの

る。

「そうやね。よくできた弟さんがいて勅使河原建設も安泰やね」  
「おうよ。兄貴には負けねえぜ。四葉にもな」

「……」

何を言われても四葉は反応が鈍い。沙耶香が心配になつて軽く抱きついた。

「気にせんときよ」

「そうだよ、気にするなよ」

沙耶香も司も、昨日ブラウスの前を全開にして胸を見せていたりしたことを四葉が思い詰めているのだと考えて慰めようとする。

「気にせんとき。四葉ちゃんほどの美人やもん。お嫁のもらいてなんか、いくらでもあるよ」

「そうだ、そうだ。何なら、ボクがもらつてやつてもいいぞ」

「テツツーには、もつたいないわ」

「どういう意味だよ？」

「その通りの意味よ」

気持ちが軽くなるように盛り上げてみたけれど、四葉は反応しない。

「……」

沙耶香と司は、ますます心配になつたけれど、もうチャイムが鳴ってしまう。数学の授業が始まつたのに、四葉は歴史の教科書を出したまま、表紙を見つめている。何十分も、ずっと動かなかつた四葉が目に涙を浮かべた。

「……………」

か細い声を漏らしている。

「……………どうしたら……いいの…………お母さん……」

耐えられない悲痛に泣き出してしまい、額にあてていた両手が、顔を覆うと、声を漏らさないように涙を流している。その様子をチラチラと見ていた女子たちは昨日のことと差恥心が限界に達したのだと思つたし、男子も同じことを考えた。沙耶香が拳手して保健室に連れ出そうと決意した瞬間、チャイムが鳴つて昼休みになる。クラスメー

トたちは、あえて四葉には近づかず、そのフォローを沙耶香と司に任せてくれる空気になり、二人も心得て四葉に声をかける。

「四葉ちゃん……」

「四葉」

「……」

四葉は沙耶香にもらつたハンカチで涙を拭くと、微笑みをつくつて言う。

「ごめん、何でもない」

「な……何でもないだろう?!」

思わず、司が大きな声を出すと、教室がシーンと静かになつてしまふ。

「……わ……悪い……け、けどよ……四葉が……ボクは……心配で……」

「そ……う……ありがとう、でも、大丈夫」

「だ……大丈夫じゃないだろ……なんだよ、その……他人行儀な感じ

……」

「大丈夫だよ、だから、テツツーもサヤボボも心配しなくていいよ」

「四葉ちゃん……」

「四葉……ボクらは頼りないか?」

「……」

「つ……、四葉!　だ……大事な話があるんだ!　来て、くれ!」

司が手を握つて立たせようとすると、意外にも四葉は力強く手を

払つて、そして迷惑そうな顔になつた。

「話つて何?」

「そ……それは……」では…」

「そう。ここで、言えないような話なら、永遠に言わなくていいよ」

「つ……四葉……」

「四葉ちゃん……」

教室にいる誰にでも、司が四葉へ告白しようとしたのは伝わったし、司が四葉を好きなどとも、沙耶香が司を好きなどとも、だいたい全員が知つてている事実だったので、昼休みの教室が図書室のように静かになつていて。それでも、司は決意を固めた。

「……す……好きなんだ！ 四葉のことが！」

「…………」

四葉と沙耶香が同時に顔を伏せた。知っていたけれど、言つて欲しくなかつたことを言われ、もう以前の三人の関係には戻れないことを、よくわかっている女の顔になる。けれど、司の決意は固い。すでに同じパターンで兄は大きな失敗をしている。歴史は繰り返させない、そう決意して告白を続ける。

「好きだ！ 四葉が好きだ！」

「……そう……ありがとう……でも…」

「だから、頼つてくれ!! あてにしてくれ!! 四葉が悩んではることなら、何でも協力する!! いつしょに努力する!! だから、絶望した顔で大丈夫なんて、言わないでくれ!! 微笑み忘れた顔なんて見たくはないさアア!!」

「……テツツー……」

断る気だつた四葉が戸惑うほど熱い告白で、沙耶香が羨ましくて笑つた。

「あはは……ほんとうに、ほんとうに、よくできた弟なのね。四葉ちゃん、よかつたじやない。お嫁のもらいて、悩まなくて済むよ」

「サヤボボ……」

思い詰めていた四葉の顔に少し明るさが戻つた。

「四葉、明日を見失うことがあつたら、ボクに頼つてくれ。明日、君が君じゃなくとも、ボクは君が好きだ」

「…………本当に、頼つていい？」

「もちろん！」

「もし、私がめちゃくちゃなことを求めて頼んで、その意味が理解できなくとも協力してくれる？ うまくいかないかもしれない。うまくいつても、うまくいったことがわからないかも知れない。説明を求められても、それを拒んで、ただ実行だけを求めて、それでも、いい？」

「四葉の役に立つなら、何でもいい！ やる！」

「ええよ！ 私もあてにしてよ！」

「サヤボボまで……ありがとう」

感謝の涙を零した四葉は二人に頼む。

「1962年のキューバ危機から1982年のフォークランド紛争までの主要各国の核戦力および通常兵器の動向と配置、それらの指揮命令権をもっていた人物の推移、そして継続して以後の1992年頃、そうね、前後5年、この時期は主要国だけじゃなくて、まとまつた軍隊のある国はすべて調べて。政治と経済の流れ、政府の高官、大企業家たち、現実に国家を動かしている連中、軍人を支配し命令するやら、その実体が知りたいの。インターネットが普及したのは1999年頃だから、それ以前の情報は紙媒体で調べないとあがつてこないけど、時間がかかりそうなの、この作業をしてくれると、とても助かるから、お願ひ」

「わかつた」

「え？ キュー……フォーク？」

学年1、2の成績だつた司は頷いたけれど、平均的な成績の沙耶香は戸惑っている。

「じゃあ、私は一人で考え事をしたいから、よほど大切じゃないこと以外は話しかけないで、お願ひ」

そう言うと、四葉は再び机に向かって座り、両肘をついて手で顎を支え、考え事を始める。ただ、さつきまでの思い詰めた絶望的な顔から、少しだけ未来が見えた表情になっていた。

「ボクは古川図書館に行くよ。サヤボボは四葉を見守っていて。この様子だと、お昼ご飯抜きそうだから、ちゃんと食べさせて。あと、ボクは早退したつて先生に伝えておいて」「え？ ちよ、ちよつと、テツツー！」

「じゃ」

司は教室を出て行き、沙耶香は困惑しつつも、言われたとおり四葉に昼食をすすめ、放課後まで見守った。

「テツツー、戻つてこんね」

「……」

「ごめん、静かにしとるわ」

クラスメートが帰った静かな教室で、ずっと座っていた四葉は下校時刻を知らせるチャイムが鳴ったので立ち上がった。

「帰ろう」

「え、でも、テツツーは？」

「図書館に閉館まで居て、あとは帰るでしょ。私が頼んだこと、一日で終わるような作業じゃないし」

「そ…そうやね…」

一人で昇降口を抜け、校門まで来たときだつた。

「兄貴、コイツです！」

「ずいぶんと待たせてくれたな」

今朝、四葉に因縁をつけてきた柔道部員と、さらに大きな体格をした3年生の男子が待ちかまえていた。

「昨日今日と、オレの弟分が、ずいぶんと世話になつたそうじやねえか」

「き、気をつけて！ 四葉ちゃん！ この人、三年生の空手部の主将よ！」

「ウワサじや、おっぱい丸出しにするんだつてな。オレにも見せてく  
れよ」

三年生の男子はヒゲも生やしていて、腕自慢らしくボキボキと拳を鳴らすと、生温かい息を吐きながら四葉に顔を近づけてくる。

「四葉ちゃんは先に帰つて！ ここは私が！」

「おつと！ お前は、こつちで静かにしていてもらおうか！」

柔道部員の男子が沙耶香の腕をつかみ、組み伏せてくる。

「四葉ちゃん、逃げて！」

「……。あなた、うちの学校、最強だつたわよね？」

四葉が問うと、大柄な男子は下品に笑つた。

「がはははつ、おうよ。中学までは柔道、高校からは空手で鍛えてる。  
この町でオレに勝てるヤツなんざいねえ」

「まあ、そうでしようね。人口、少ないし」

「どういう意味だ、そりや？」

「私の、おっぱい、見たい？ 見せて、あげようか？」

四葉は質問に質問で返して、につこりと微笑んだ。少しだけブラウスのボタンを外して、胸元を見せながら、相手に近づく。

「おおく、話がわかるじゃねえか…」

完全に油断して、そして充血しつつある男根に四葉は全力で飛び膝蹴りを入れた。

ドヅつ！

「はうっ?!」

急所を強打されてビクンと前屈みになつた相手の喉元へ、さらに手刀を撃ち込む。

ベグツ！

正確に喉仏を撃つた。四葉の小さな手と膝でも、急所を容赦なく撃つたことで相手は気絶して倒れる。

ドサア…

「ア…兄貴…」

沙耶香を捕らえていた柔道部員が一瞬の出来事にたじろいでいる。

「サヤボボを離しなさい」

「くつ…、う、動くな！　こつちには人質がいるんだぞ！　不意打ちしやがつて卑怯者が！」

「人質とつてる人が言うこと？」

「う、うるさい！　お前の方が卑怯だ！」

「そう、なら、卑怯比べね」

「何だと?!」

「私のパパ、町長なの。知つてるよね」

「うつ…、うぐ…」

「婦女暴行か、痴漢、立派な前科がつきそうね。岐阜県警つて保守的だから、政治家とは癒着してゐるよ」

「くつ…くくつ…」

「いいよね、110番で警察が来てくれる世界つて、最高に素敵」

四葉は携帯電話を取り出して相手に見せた。

「ま、待つてくれ！」

「土下座」

四葉が命じると、すぐに沙耶香を放りだし、地面に這い蹲つた。

「わ、悪かった！　もう一度と逆らつたりしない！　だ、だから！」

「うん」

につこりと微笑んだまま四葉は近づくと、土下座している頭を全体重をかけて踏みつけた。

ドグチャツ！

「んぐううう？！」

「わかる？　今の私の時間が、どれだけ貴重か？！　ええ、わからぬいでしようね？！」

四葉が豹変して、何度も男子の頭を踏みつける。さらにサツカーボールのように蹴り、転がった相手の腹も蹴る。

「くだらないことで手間とらせないで！！　うざい！！　うざ過ぎる！」

ガツ！　ドカつ！　ガスガス！

もう悶絶しているのに蹴り続ける。

「あなたに、この重圧がわかる？！　何億！　何十億って人の命が私の行動にかかるの！！　それを、邪魔してるの！！　ああもう！　あなたは死ねば？！　あなただけ死んでおきなさい！！」

「……四葉ちや……や、やめて！！　四葉ちゃん、やめて！！　ホントに死んじゃう！！」

沙耶香が後ろから羽交い締めにして、ようやく四葉は落ち着いた。

「ハア…ハア…サヤボボ…」

「…ハア…ハア…四葉ちゃん、本当に四葉ちゃんなの？　一日単位

じゃなくて、短時間でも入れ替わるの？」

「ごめん、サヤボボ、つい、あんまり腹が立つたから……」

そう言つて謝る四葉の背後に黒塗りのクラウンが停まつた。糸守町が所有する町長専用車だつた。降りてきた宮水俊樹が苦々しげにつぶやく。

「こんな娘に育てた覚えはないのに……」

「育てられた覚えはないから」

「ごく幼い頃に母を亡くし、なのに家を出て行つた上で、町長選挙に出馬するという理解に苦しむ行動を取つた男に対して、四葉は地面上に転がっている男子へ向けるよりも冷たい視線で見据えた。

「つ……そんな日をするようになつたのか……」

三葉が思春期だつた頃よりも、はるかに空恐ろしい四葉の目に、俊樹は動搖したけれど、大切な用件があるので語る。

「お前に用事がある」

「そう。ちょうどいいわ。私も頼みたいことがあつたから」

四葉は右手を出した。

「お金と自由に使えるクレジットカードを、ちょうどだい。現金は10万くらいでいいわ」

「なつ?! ふざけるな!!」

「……」

「うう……」

一喝したのに恐ろしい視線で睨まれ、俊樹は後退つた。すでに長期に町長を務めてきた男の経験と胆力で、地元のヤクザ程度なら逆に気圧するほどの政治家ではあるのに、四葉がもつている雰囲気は神がかつた恐ろしさがある。その迫力に俊樹は二葉の面影を見た。そして、三葉が無茶な要求をしてきた日のこと、そのおりに男のような雰囲気になつたことも思い出した。

「もしや、また、なにか起くるのか?」

「ええ」

「それに、必要なのか?」

「ええ」

「何が起くるんだ?!」

「説明はしない。あなたは私に命令されたことを実行すればいいの。まずはお金とカード、出しなさい」

「つ……説明しろ!」

「時間とらせないでよ。うざいなあ」

四葉は思春期の少女が大嫌いな父親に取るような態度で髪の毛を

いじった。

「説明してくれれば、ワシも協力しないでもない！」

「しないでもない？　二重の否定ね。まあ、あなたは父親でないわけでもないからね」

「……四葉……」

「とりあえず、今は私がやろうとしていることを、あなたたちが知るとパニックになるかも知れないから、言えないの」

「パニックに……、また、何か、落ちてくるのか」

「空が落ちてくるといえば、そういう比喩も外れではないわ」

「だが、ティアマト彗星の落下から、宇宙防衛も本格的に進み、弾道弾の開発も配備もされている。しかも、ここ数年先、接近する彗星もデブリも無いはずだ。カミオカンデ観測所だって完成している」

「……そつか……そつちの線もあるのね……無駄に配備したミサイル……その暴発が、きつかけになる可能性だつて……、あつちの世界だけじやない、こつちだつて、いつ起ころか……テツツーに現代の情報も……ううん、オーバーワークに……まだ、聞こえない……糸の声が……まだ……」

「何をブツブツ言つてるんだ?!」

「あなたこそ、ブツブツ言わずに、さつさとカードと現金!!」

「何に使うんだ?!」

「まだ決まってないわ！　使う必要があるとき迅速にいるかも知れないから確保しておくのよ!!」

「くつ……ワシの用件が先だ!!」

老練な政治家らしい話のそらしで方向を変える。

「お前は三葉に何をしたんだ?!」

「……。どうかしたの？　まあ、なにかしたとは、聞いたけど、どうなつてるの？　言つておくけど、昨日の私は、私じやないから、知らないよ。で、どんな様子？」

「ずっと苦しんでいるんだ!!　立つこともできないほどにな!!」

「……」

「このままでは死んでしまうかもしれん!!　選挙活動もできないんだ

!! この大切な時期に!!

「娘の命と選挙活動、どつちが大切なんだか」

「この選挙には糸守町の運命がかかっているんだ!!」

「ずいぶん小さな運命ね。どうでも、いいんじゃない。人が死ぬわけじやなし」

「なんだと?! 高校生にはわからんのだ!! この重大事が!!」

「重大事というより些事の典型的な…」

「四葉ちゃん!」

沙耶香が叫んだ。

「……なによ?」

「時間が無いんよね? お父さんとの口喧嘩に話が長うなつとるよ！」

「……」「

他人に言われて、ようやく自覚した二人は、気持ちを落ち着けるために左手で左耳に触れる。その仕草が、まったく同時に、まったく同じだったので、沙耶香は、やっぱり同じ血筋の親子なのだと感じて、失笑しそうになつたけれど、今は我慢する。

「それで、勅使河原三葉さんは、どうしているの?」

四葉は姉のことを他人を呼ぶように言い、俊樹も静かに答える。  
「様子を見に来てもらえないか。話は、それからだ」

「わかつたわ。ごめん、サヤボボ、付き合つてくれる。私が冷静でいられるように。さつきは、ありがとう」

「ううん、ええんよ」

「二人とも車に」

促されて、クラウンに乗り、小さな町なので、すぐに目的地だつた病院に着いた。病院内で一番高価な個室に入ると、三葉が全裸で横になつていた。

「……ハア……ハア……」

三葉は、ごく浅い呼吸をして、大の字に寝ていた。寝ているのは低反発のマットレスを三重に重ねたベッドで、全裸の三葉はシーツさえかけられていない。俊樹は娘の裸体から目をそらしながら説明する。

「何に触れても、猛烈に痛がつて、こんな姿なんだ。こうやつて寝ていっても、マットレスに触れている背中が痛いらしい。下着も着せると泣き喚くし、掛け布団など発狂しそうなほど痛がる。ようやく今の姿勢で、この状態が、もっとも痛みが少ないことがわかつたんだ」

全裸でいる三葉のために室温は少し高めに空調されていて、俊樹はハンカチで汗を拭った。

「こうなつたのは、昨日、四葉に何かされたことが原因らしい。どうにか、ならないか？ 治してやつてくれ、頼む」

「これは……」

あまりにも憐れな姉の姿を見て、さすがに四葉が鼻白む。  
「食事はおろか、水さえ飲めない。医者は、このままだと脱水で死んでしまうというほどに」

「…………」

四葉が言葉を失い、黙り込んで深刻な顔をしていると、医師が入室してきた。医師は三葉に触れないように診察して、俊樹に告げる。  
「もう今すぐにでも水分を補給しないと危険です」

「わかった。では、点滴を」

「はい」

医師の指示で看護婦たちが点滴を用意すると、三葉が気づいて喚いた。

「ちよつ……ちよつと待つて。まさか、その針を?!」

唇を動かして話すだけでも痛いのに、三葉は慌てて逃げようとしている。

「や……やめて!! タ……頼むから!! そ……そんなもの刺されたら死んじゃう!! やつ!! や!!」

三葉が拒否することを予め知っていた看護婦たちは手足を押さえつけると、すばやく点滴の針を刺した。

「ブスつ！」

「うぎやあ〜、ひひ〜!! はああ!! ひええ、ううわああ!! げうつ!!  
う〜ぎやあ、はあ、あぎやあ〜!! あ〜おごつ、ばわ!!」

ものすごい悲鳴をあげて三葉は点滴の針を刺されただけで苦しんだ挙げ句に気絶してしまった。死んだのかと思うほどの苦しみ方だつたけれど、点滴された以外に傷はない。三葉は白目を剥いてガタガタと痙攣し、水を飲むこともできずに脱水していた者らしく濃くて匂いの強烈な尿を少しだけ垂れ流しているのが、全裸なのでマットレスの上に噴きこぼれている。

「わかつてくれたか。四葉、これほど、ひどい状態の姉を見て、どう思う？」

「……助けてあげたいけれど……、早ければ明日、この原因をつくった男に入れ替わるかもしれない。一応、なんとか助けてほしいと伝言は残してみる。ただ、聞いている彼の性格だと、半々というところよ」

「半々……」

「サヤチンさんの声が出るようにしてくれたという話もあるから望みはある。けど、そもそも理由はサヤチンさんを苦しめたことで懲らしめようと思ったかららしいから、どう考えるかは彼したい。気まぐれそうな性格だから無理かもしれない」

「それでは困る。この状態では、あまりに……」

「わかってる。だから、あなたは北斗神拳のことを調べて。政治力を使って」

「北斗神拳？」

「民俗学者なんだから、聞いたこと無い？」

「……いや、知らない」

「あなたが民俗学者だつたことで、役に立つたこと、一回もないわね」

「……」

「四葉ちゃん」

「あ、うん、ありがとう。サヤボボ」

沙耶香に注意されて、父親への厭味で時間を浪費するのをやめた四葉は話を進める。

「とにかく、北斗神拳のことを調べて。それが、この状態を治療するこ

とにもつながるし、私に入れ替わりがおきたことから至る結果にとつても、とても大切なことなの。裏社会の暗殺にも関わることらしいから、政治家として、そういう筋のパイプでお願い

「……わかった。調べよう」

「……」

四葉は無言で右手を出した。

「……」

「……」

俊樹も諦めて娘に現金とカードを渡して、クラウンで家まで送らせた。家に戻った四葉を心配で待っていた一葉が出迎える。

「おかげり。大丈夫やつたか？」

「ええ」

「お夕飯、できどるよ。それとも、お風呂がええ？」

「……」

四葉は時計を見る。もう9時を過ぎている。眠気も覚えている。

「ごめん、もう時間がないの。メッセージを残さなきやいけない。私が紙に書いたこと、何枚もコピーして家中に貼つておいて。ごめんなさい。もう、歳なのに雑用に使つて」

「ええんよ、四葉、頑張りや」

三葉の時に体験したことなので、四葉にも何かやるべきことがあると感じている祖母は疲れた様子の孫娘が部屋に入つていくのを心配そうに見上げた。四葉は部屋に入ると、カードと現金を引き出しの下へ入れて、一万円だけはポケットに残しておく。

「彼にもお小遣いがあつた方がおとなしいでしようし」

そして机に向かい、ジャギへ残すメッセージを書き始めた。

「…………殺人は、もちろん…………暴力も…………あと盗みも…………」

四葉は暴力についてや警察と銃の存在について、生活の注意事項と盗まなくても一万円もあれば美味しい物が買えること、そして逆に自分がジャギになつているときに注意すべきことがあるなら、身近に書き残しておいてほしいこと等を書いていく。ジャギの性格を考えて、

聞き入れてくれるようへりくだつた文章で、あまり賢く無さそうな人なので難しい漢字はさけて、かりにジヤギの肉体なら警察に対抗することはできるかもしない、とおだてつつ、こちらでは四葉の肉体なのだから機動隊に勝つことは難しいし、かりに勝ても自衛隊も存在し、機関銃などもあることを書き暴走しないよう伝える。忘れずに早耶香の声が出るようになつたことの礼と、三葉を治してほしいことも書く。何度も書き直して、気を遣つた文章を仕上げるのに、かなりの時間をしてしまつた。

「はあああ……できたあ……」

書き終えると疲れ果てて、そのまま眠つた。

「四葉……大変なんやね……」

一葉は心配そうに孫娘を布団に寝かせると、残されていたメツセーディをコンビニへコピーに行く。すでに9時で閉店していたのを頼み込んで開けてもらい、何枚もコピーして家中に貼りつけた。

「……ふ一つ……」

齢89にして、いつもは四葉に手伝つてもらつてゐる家事と、コンビニへの往復で疲れた身体で、つまずかないように注意しながら寝間まで行くと、目を閉じた。

## 第2話

翌朝、四葉は目を覚まして、顔にシーツがかかっているのに気づいた。

「……。うう……痛い…」

意識がハツキリすると、左前頭部に痛みを覚える。

「この頭痛、この感じは……」

起き上ると、パラつとシーツが落ちる。四葉は革製のリクライニングシートに寝ていたようだつた。

「ジャギさんになつてゐるのね」

すぐに四葉は自分の状況を把握した。逞しい腕、分厚い胸板、立ち上がると視点が高い。

「……くつ……それにしても、この痛さ……うう…」

殺風景な部屋に鏡は無いけれど、手で触ると左前頭部が金属パーツで圧迫されているのもジャギの特徴なので鏡を見なくともわかる。その左前頭部がズキズキと疼いて痛い。すぐ近くに金属製のマスクが置いてあつた。

「この顔じゃあ、隠すのは当然……」

四葉はマスクをかぶり、それからメッセージなどが残つていなか、注意深く室内を探した。一度目にジャギとなつた日に、また入れ替わりが起こつた場合、四葉がジャギとして行動することにおいて、何か注意することがあつたら教えてほしい、というメッセージを残しておいたので、その返答を期待して探した。

「あつた」

顔にかかっていたシーツに処刑されたと思われる人間の血でメッセージが書かれていた。

「…………」

余計なことしやがつたら、ぶつ殺す、と大きく書いてある。

「だから、その余計なことが何なのか、具体的に書いてよ……あ…」

大きな字に続いて、小さな字でもメッセージがあった。

「……」

ケンシロウという男に出会つても絶対に戦うな、お前では勝てない、と書いてある。

「……ケンシロウ……たしか、おびき寄せるために、自分で名乗つていった感じだつたけど……わざわざ、そんな作戦を取るあたり、相當に強いのね」

四葉は手下たちの言動から、初日で大まかなことはつかんでいた。手下たちは村人などの外部の人間がいるところではケンシロウ様と呼び、仲間内だけのときはジャギ様と呼んでくるので初めは混乱したけれど、もう慣れている。戦い方も身体が覚えている感じもあって、これといって拳法らしい技もない手下たちには負けない気はする。なにか、奥義のようなものも出せそうな気はするけれど、あと少しの感覚がつかめず、身体にもどかしさを覚えたりもしていた。この状態では、それなりの使い手と戦えば、圧倒されて負けるのは四葉にもわかつた。

「まだ、続きがあるみたい、意外とマメね」

さらに小さな字で続きを書こうとして、やはり血では書きにくいからか、椅子の下にあるメモも見ろ、という指示があつて四葉はメモを見た。

「……なるほど……」

メモには、もしもケンシロウに出会つてしまつたら、屋上にあるヘリポートへ誘導して、そこにある燃料タンクのパイプを腕力で破壊して、タンクの上に飛びのつてから着火して丸焼きにしてやれ、と書いてあつた。

「タンクの上つて……、そんなことしたら、自分も丸焼けに……、あ、なるほど」

メモは裏まで続いていて、燃料タンクの上にはケーブルが用意してあるので、それで脱出しき、と書いてあつた。

「ちゃんと逃走経路も確保してあるわけね。さすが、暗殺拳を名乗るだけあつて、ただの拳法バカというわけじやないみたい。意外と話も

通じるかも。こんな世界で手下を統率していくだけの人物なんだし」

少し四葉はジャギを見直した。さらに、メモが続き、腰にもつていい銃は不発が多く、主に威嚇として使い、発射しても弾が飛ぶ可能性は、それほど無いことなども書いてあつた。

「ありがとう、ジャギさん。さてと、言葉遣いに気をつけなきや。ハアア～……すーっ…」

四葉は深呼吸して気持ちを集中する。男らしい歩き方、乱暴な言葉遣い、そして、朝起きたジャギは何をするだろう、そう考えていると部屋の外から声をかけられる。

「ジャギ様、食事の用意が…」

「おう」

男らしく返事した四葉は手下に案内されて隣の部屋に入った。テーブルがあつて、そこに缶詰が並んでいる。開けられた缶が5つと、あとは山積みになっている。

「ごゆっくり、どうぞ」

そう言つて手下は退室してしまつた。

「…………おう」

食事も睡眠も、いつも一人、仕方ないかな、マスクを外さないと食べられないから、それにしても食事の用意つて缶詰を開けただけなの、一昨日いた掠つてきた女性は殺してしまつたのかな、そうなると男ばっかりのグループみたいだし、こんな食生活になるわけね、と四葉は重い気持ちでテーブルに着いてマスクを外したけれど、食欲が湧かない。

「…………」

開けられている缶詰の蓋を見ると、賞味期限が1994年となつている。

「…………」

たぶん核戦争があつたのが1992年だとしたら、それ以前に製造された缶詰よね、缶詰の賞味期限つて2年か、3年だから……つていふか、今は正確には何年なのかな、97年から99年くらいだと思う

んだけど、と四葉は悩む。悩むと左前頭部がズキズキと痛み、余計に食欲が無くなつた。

「…………」

食べないと食欲がないつて手下に不審がられるかもしれないしつつ、けど不味そう、見た目は普通だけど、どうしよう、口噛み酒よリはマシかな、製造過程は衛生的なはずだし、と四葉はフォークで中身をいじつて匂いを嗅いでみる。

「…………」

ううう……、やつぱり、無理、そうだ、外で食べるつてことにしよう、それなら不審がられないかも、と四葉は開いていない缶詰いくつか持つと、マスクを着けて部屋を出た。

「ジャギ様、もう、よろしいのですか？」

「おう、今日は外で喰いたい気分だぜ。お前、開いている分は喰つてくれ

「よ、よろしいのですか？！　あ、ありがとうございます！」

「…………」

賞味期限切れの缶詰が、そんなに嬉しいわけね、と四葉は憐れみの表情を浮かべてしまつたけれど、マスクのおかげで氣づかれずに済む。建物の外に出ると、手下たちが手斧をもつて、たむろしていた。

「「「おはようござります！　ジャギ様」」

「おう」

「「「…………」」

明らかに手下たちはジャギからの指示を待つてゐる空気が漂い、四葉は考える。けれど、考えてもジャギとしての命令など思いつかない。不審がられないよう、いつそ間を開けずに訊いてみるとした。

「ちつ……、すっかり今日の予定を忘れちまつたぜ。おい！　今日は、何をする予定だつた？！」

「はいっ！　…………とくに予定は決まっておりません。昨日、東の村を襲つて缶詰と飲料水を確保しておりますので、いつも通りケンシロ

ウをおびき寄せるため、ヤツの悪名を触れ回るか、西の村を襲つてガソリンでも手に入れておきますか？」

「……う～む…」

予定が無いんだつたら私にはしたいことが山ほどあるのよ、と四葉は口を開く。

「お前ら、このあたりで図書館か、資料館が残っているのを知らないか？」

「…と？ 図書館ですか？」

「おうよ。本がいっぱいあるところだ。図書館でなくとも、前の戦争のことが知れる場所があるなら、そこへ行く」

「は…はあ…。シリヨウ館つて、なんだ？、おい？ 知ってるか、お前…」

手下が他の手下に訊いている。

「…そりや…死靈が出る館なんじゃ…ねえのか…」

「…な、なぜ、そのような、ところへ行かれるのですか？ ジャギ様」

手下たちが顔を見合わせて不思議がっている。四葉は、余計なことをしたら、ぶつ殺す、というジャギからのメッセージを忘れないで、彼らしくない振る舞いにフォローを入れておく。

「なぜ、そんなところへ行くか、訊きたいか？」

四葉は腰にさげている銃を抜いた。それだけで手下たちに緊張が走り、ざわついていた空気が静まりかかる。本物のジャギなら銃口を手下に向けて詰問したかもしれないけれど、不発が多いということは暴発もありうると考えた四葉は信頼度の低い銃を天に向けて質問を繰り返す。

「もう一度だけチャンスをやろう。なぜ、そんなところへ行くか、訊きたいか？」

「「…」」

余計な返答をして銃口を向けられたくない手下たちは直立不動で立っている。

「そうか。そんなに訊きたいか。いいだろう、教えてやる」

四葉は銃を腰に戻すと、話を続ける。

「オレは拳法がすべてだとは思つていねえんだ。ようは強ければいいんだ。どんな手を使おうが勝てばいい！ それがすべてだ！！ だから、オレは戦い方を研究するんだ。前の戦争を知り、次の戦いにそなえる。これこそが、兵法というものよ」「おおつ、さすがはジャギ様！」

「やはりジャギ様はすばらしいお方だ！」

「真の北斗神拳伝承者だ！」

手下たちが口々に賞賛し、そして一人が半壊した図書館が残つている場所を知つていると言い出してくれる。

「よーし、これから、そこへ…」

「ジャギ様～ア！ ジャギ様～！」

うまく理屈をつけて図書館に行こうとしたのに、別の手下が遠くから駆け寄つてくる。

「ご報告します!!」

「どうした？ 急ぎの用事か？」

「はっ！ どうとう像が完成したそうです！ じきに、こちらへ！」

「……そうか。…よくやつた…」

像つて何？ 何の像なの？ なにか造らせてたのかな、と四葉は意味がわからぬけれど、とりあえず頷いておく。しばらくして手下が四人、重そうな銅像を御輿に載せてもつてきた。それはマスクをかぶつたジャギの銅像だつた。胸像で胸に七つの傷痕も再現されていて、肩の刺々しい防具やマスクの形も見事な銅像だつた。

「…ほオオ、これは…見事だな…うむ、よくやつた…」

とりあえず誉めておく。

「…」

こんなのは何に使うのかしら、そのへんに飾つておけばいいのかな、

と四葉は銅像の行く先を思案するけれど、良案がない。仕方がないのでド忘れ作戦を再び使う。

「うむむ…そういうえば、なにかアイデアがあつたはずなんだが、この銅像、どう使う予定だった？ すつかり忘れてしまつた。おい、覚えて

るヤツいるか?!

「はつ! このジャギ様の像をケンシロウに見立て、悪名を触れ回る作戦をジャギ様本人以外でも遂行するためです」

「ああ、そうだった、そうだった。で、具体的に、どうする感じだった?」

「はい、まずは人通りの多い街道に、この像を設置して、そのあたりにいる住民を捕まえ、首だけを出して地面に埋め、他の捕まえた住民に首をノコギリで切断させる作戦です。そのとき、像を指して、あのの方の名をいつてみろオー! と問い合わせ、答えられないヤツを処刑していくのです」

「……たしかに、……それなら、ケンシロウの悪名は広まるだろう…」

もしかして、それだけ? タツタ、それだけのために、この物資欠乏の時代に、こんな立派な像を造らせたわけ? いくらなんでも無駄すぎじやないの、こんなもの造るくらいならボウガンの矢でも量産するとかあるじやないの、と四葉は軽い目まいを覚えたけれど、ふらつかずには踏みどどまり頷いた。

「そうだつた、そうだつた。よーし……うむ! その作戦も実行するぞ! お前たちを二手に分ける! さつきの図書館を知つてると言つたヤツ! お前はオレと来い! あとは、その像をもつて……そうだな、西の村へ行け!」

ジャギとして命令すると手下たちは動き出す。すぐに四葉の前には、よく磨かれた大型バイクが用意された。

「整備しておきました」

「うむ…」

ドツ…ドツ…ドツ…

エンジン音も大きい。四葉は暖機運転も終わっているバイクを前に、少し緊張したけれど、当然という態度で跨った。

「……」

きっと身体が覚えてくれてるはず、そう祈つて、先導に立つ手下と同じ操作をしてみる。

ドルウウン！

バイクが動き出し、一瞬、バランスを崩しそうになつたけれど、反射的に身体が動いてくれて、あとは自転車と変わらないバランス感覚だつた。ただ、道路のアスファルトが破損していたり、場合によつては道などない荒野を走りながら、目的地の図書館に着いた。

「ここです、ジャギ様」

「うむ」

半壊した図書館を見上げ、それから手下に命じる。

「お前は、ここで待て」

「はつ！」

ほつとした感じの手下を置いて、四葉は図書館に入ると、早歩きで館内を巡る。なぜ、核戦争が勃発したのか、その寸前の状況や理由、とにかく多くの情報がほしかつた。持ってきた缶詰を食べるのも忘れて、資料に見入り、本を開き、古い新聞を精査する。だんだんと、四葉を中心にして円陣のように古い紙々が並んでいつた。そんな作業に何時間も没頭していた後だつた。

「ジャギ様あゝ！！ ジャギ様ああああ！」

急に、待たせておいたはずの手下が図書館に走り込んでくると、怯えきつた顔でジャギに助けを求めてくる。

「助けえおぼおうあが！」

バシユウウウ!!

悲鳴が途中で奇声に変わり、その手下の頭部が膨張すると、弾け飛んで上半身は肉片に変わり、下半身だけが3歩ほど進み、そして倒れた。

「……これは……まさか…」

カツ…カツ…カツ…

足音だけが図書館の玄関から響いてくる。そして、四葉は一人の男を見た。

「つ……」

「場所を選べ！ そこが、貴様の死に場所だ！」

深い怒りに、太い眉をしかめた精悍な美男子といつていい顔立ちの

筋肉隆々の男が、こちらを睨んでいる。

「……ケンシロウさんですか？」

思わず、四葉は自分を出して訊いてしまった。

「…………。そうだ。よもや、忘れたとは言うまい」

さん付けで呼ばれたケンシロウは一瞬、闘気を乱されたけれど、すぐには強い闘気を取り戻して、四葉を睨んでくる。ビリビリと空気が凍てついているかのような闘気が伝わってきて、四葉は戦慄する。

「……うう…」

どうしよう…、と四葉は困り、腰の銃に手を伸ばすと、ケンシロウが見下した視線を送つてくる。

「あいかわらず、そんな物に頼つているのか」

「……」

「早く死に場所を選べ!! 貴様は死ぬべき男だ!!」

「……」

すでに四葉も相手の強さを推し量ることが少しはできた。とても戦つて勝てるとは思えないし、逃げることさえできない気がする。この半壊した図書館は背後は出入口がない。ケンシロウが立っている玄関方向しか、逃げ道はないし、ジャギがメッセージで残してくれた作戦を取るには、アジトまで戻る必要がある。

「貴様の命も、ここまでだ!」

「つ……」

殺される、ここで殺されるわけにはいかないのに、と四葉は不本意な結末を避けるために、ジャギを演じることを諦めた。

「まつ、待つてください!」

「……」

「私はジャギさんでは、ありません!」

「…………あいかわらず、騙し討ちが得意のようだな」

あまりにも、かつての兄と雰囲気が違うのでケンシロウは闘気を半減させられたけれど、気を取り直して闘気をまとう。思い直してみれば、騙し討ちこそ兄の真骨頂であつたと考え、この少女のような雰囲気こそが擬態であると、自戒して油断しない。

「どこで、そんな芝居を身につけた」

「信じてもらえるとは思いませんが、私の名は宮水四葉といいます」

「……」

「そして、私には、やるべき使命があるのです」

「言いたいことは、それだけか」

ケンシロウが拳を鳴らしながら近づいてくる。

「いえ、言いたいことは山のようになります」

「それは地獄で語るがいい」

ケンシロウは四葉の言葉を無視して、目に見えないほど速い拳を撃つてくる。

「あたあ！」

「つ……」

その拳は寸止めで止まり、ケンシロウが四葉の目を見てくる。

「…………」

そして、ケンシロウが一步さがつた。

「…………こんなことが……、たしかに、お前はジャギ！　かつて兄と呼んだ男……だが……なぜ、その貴様がユリアのような日をしている!?」

「この身体は一時的に借りているものです」

マスクから覗くジャギの目は血走っているけれど、四葉の心を映して澄んでいる。その目に殺意は無く、かわりに強い使命感と少女の切実さがあつた。

「…………貴様は……ジャギでは……ない……のか……」

「はい。今は。ですから、今は見逃してください」

「お前の、その身体、ジャギという男が、今まで何人の命乞いをする罪のない者を殺したか、知っているか？」

「百とも万とも思います。ですが、今の私は数十億という人の命を救いたいのです。そして、そのために、この身体を借りてしているのです」

「数十……億……」

「どうか、見逃してください」

四葉は頭を下げて礼をした。

「…………」

「…………」

カツ…カツ…カツ…

少し歩いてケンシロウは振り返った。ここでジャギなら、必ず背中を襲うために銃を抜くなり、襲つてくるなりするはずなのに、四葉は頭を下げたまま、何もしてこない。背中を向けたケンシロウに対し、バカめ、と叫びつつ騙し討ちしてくるのが、よくあることなのに本当に何もしてこないのでケンシロウは拍子抜けしつつ、仕方なく立ち去る。

「…………」

ケンシロウは図書館の外に出た。荒野が拡がっている。

「…………ジャギ…………お前は、どこに…」

旅の目標を見失いそうになり、困っている。

「…………」

くすんだ空を見上げ、荒野を見据え、とりあえず歩き出した。ある程度、ジャギのアジトがありそうな位置はつかんでいる。

「…………行つてみるか…………人に聞けば、なにか、わかるかもしれない…………」

しばらく歩き、西の村に着くと、ジャギの銅像が広場に建立され、そばに手下たちがいて住民を虐殺している。

「…………」

これだ、ケンシロウの迷いが晴れる。

フラ…フラ…フラリ…

吸い寄せられるように手下の背後へと歩いていった。

昼休みの糸守高校で、ジャギは四葉の身体を保健室のベッドに寝ころばせて、寛ぎながらコンビニで買ってきたポテチを食べていた。そばには沙耶香が座っている。

「……なら、机の上に足をあげんでもええよね」

どうお願ひしても授業中に四葉の足を机へあげて、ふんぞり返るの  
で教師との折り合いをつけるのが大変で、いつそ気分が悪いというこ  
とで保健室に連れてきたのだつた。

「これ、美味しいなア」

ポテチの次には唐揚げ棒を食べて上機嫌になつてゐる。保健室は  
飲食禁止だつたけれど、もともと生徒数の少ない山間部の高校なので  
保健室専任の教諭はおらず、運良く自由に使えていた。

「あんまり食べると、太つて四葉ちゃんが悲しむよ」

沙耶香は羨ましそうにパクパクと唐揚げ棒を食べる四葉の唇を見  
てゐる。姉がダイエットで苦労していたのを知つてゐるので、沙耶香  
は同じ歴史を繰り返すまいと、思春期に入つてから常に体重への注意  
を怠つていない。おかげで美人の四葉に次いで男子から人気があつ  
たし、もつて生まれた体质なのか、胸の大きさは学年一番だつた。  
「ふくつ…」の身体、すぐ腹いっぱいになつちまうぜ。あと一つ喰つ  
たら胸焼けしそうだ」

自己イメージでは、まだまだ食べられるつもりだつたけれど、四葉  
の胃が満腹を訴えているので、あと一つ残つた唐揚げを沙耶香に向け  
た。

「喰うか？」

「…」

「喰わないなら捨てるぞ」

「もつたいないよ。いただきます」

沙耶香は差し出された棒から唐揚げを口で引き抜いて食べる。  
ずっと食べたいと思つて見ていたので、とても美味しかつた。

「さてと」

四葉の舌が唇を舐めて、食べ終わつた棒を投げ捨てるので、沙耶香  
が拾つて袋に入れる。

「満足してくれたよね。あとは、ここで放課後まで、おとなしく…  
ちよつ!」

沙耶香は四葉の手に、おっぱいをつかまれて驚いた。

「な、なにすんの?! 四葉ちゃん!」

「腹もふくれたし、男と女、やることといつたら決まつてるだろ」

四葉の瞳が沙耶香を見てくる。沙耶香の唇を見て、おっぱいを見て、腰を見て、それから腿を見ながら、四葉の手が沙耶香の内腿を触つてくる。四葉の手がスカートの中にまで入つてくると、さすがに沙耶香は危機を感じた。

「ちよつ?! ま、待つてよ! おちついて!」

「抵抗しなければ、痛い思いはさせねえぜ」

穏やかな口調なのに、もう何度も強姦してきた経験があるような迫力がともなつていて沙耶香は力の差を感じた猫が動けなくなるように逃げることができない。

「て、抵抗とか、そんな話やなくて、女の子同士なんよ…」

沙耶香の言葉は聞かず、四葉の手が沙耶香の胸へ伸びてくる。

「ううむ、いいなあ。やはり、乳は、こうやつて揉むに限る」

四葉の右手は沙耶香のおっぱいを揉み、四葉の左手は四葉のおっぱいを揉んでいる。やはり、自分の身体の一部である四葉の乳房を揉むより、目の前にいる沙耶香の乳房を揉む方が、格段に気持ちが高ぶるようだつた。

「ちよつ…、四葉ちゃん、もう、やめて」

「すぐに、やめてなんて言えなくしてやるぜ。最高に気持ちよくな」

乳房を揉んでいた四葉の手が、指先で沙耶香の胸のあたりと、トントンと音調をとるように打つてきた。

「はうん…」

ほんの少し指先で突かれただけなのに、沙耶香は全身の皮膚に温かい電気が走るような刺激を受けた。

「な…なにを…したの…」

「胸椎の秘孔、龍領を、ほんの軽くな。これで、お前の身体はむかれかけた神経で包まれている。ほんの少し愛撫するだけで、ほれ」

四葉の両手が、沙耶香の左右のおっぱいを揉んでくる。

「あああああ…」

皮膚感覚を鋭敏にされた沙耶香は身体の芯が熱くなつて、喘ぎ声を漏らしてしまつた。

「ククつ、さらに。北斗有情拳。秘孔、牽正への北斗有情破顔拳で天国を感じさせてやるぜ」

四葉の手が、ゆっくりと沙耶香の顔に近づいてくる。祭りのさいに、新米をつかむ四葉の指先が、ゆっくりと沙耶香の額に触れ、そして触れたまま下がっていく。額から鼻、鼻から唇、さらに頬、喉元と触れながら通り過ぎていき、胸の中央、お腹、お臍、下腹部から、その下まで、とうとうお尻の穴まで服の上からとはいっても、触れられて沙耶香は恥ずかしくて顔から火が出そうだったのに抵抗できなかつた。抵抗どころか、優しい炎に焼かれるように身体が熱くなっている。

「ああ…あは～…いい気持ちいい～…ちにや～…」

脳天から脊髄神経の末端まで、熱い快感で満たされて身体が勝手にクネクネと動いてしまう。身を守るようにしていたはずの両腕が沙耶香の意志とは関係なく、大きくあがつて乳房を四葉へ晒すように後頭部まで両手を回して、噴き出すように汗をかいて濡れている両腋をみせて、首もそり返つて無防備に首筋を晒して息を乱している。

「ハア…ハア…はにやあ…」

さらに沙耶香の両脚が関節の限界までM字に開脚してスカートがまくれ、腋と同じように、ぐつしよりと濡らしてしまったショーツを晒している。足首も攣りそうなほど反らして、足の指先までキュウキユウと閉じたり開いたりしているのが靴下のままでわかる。腰がクネクネと物欲しそうにうねつてしまい、もう四葉の手で触つて欲しくてたまらないという身体にされてしまった。

「…ハア…ハア…よ…四葉ちゃ…」

「やめてほしいか？」

四葉の唇が意地悪な問いを放つてくる。

「…うう…」

沙耶香は恥じらつて目をそらした。その目から快感の高ぶりで涙まで零れる。今すぐ、おっぱいを探んでほしいし、キスして欲しい、処女なのに下腹部に何かを突き込まれたくて、四葉の指が何かしてくれなら、早くして欲しくて待ち遠しい。そんな気持ちになつてしまつ

たことが、たまらなく恥ずかしいのに、意地悪に訊いてくる。

「気持ちよくしてほしいか？　ほれ、触つてほしいのか？」

「……うう……うん…」

恥ずかしさで涙を零しながら、沙耶香は衝動に耐えきれず頷いて返事をした。なのに四葉の唇が、ますます意地悪く微笑む。

「ん~？　聞こえんなあ？」

「そ…そんな…」

せつなくて沙耶香が両目から涙を溢れさせ、濡れた腋と股間のシミも大きくすると、四葉の手が沙耶香の乳房を揉んでくれる。

「ああうううううん！」

制服の上から片方の乳房を揉まれただけで沙耶香は絶頂に達して腰が折れそうなほど、背中を反らして喘いだ。

「イキやがつたな」

「ああ…い…言わないで…」

初体験だったけれど、沙耶香は自分が絶頂したことがわかり、恥ずかしくて目が回る。まさか、幼馴染みの四葉の手によつて、こんなことをされてしまうとは思つてもみなかつたし、四葉の瞳は沙耶香の変化を楽しむように、じつと見つめている。

「ハア！　ハア！」

沙耶香は気持ちよすぎて、息をする度に唇から舌が出てしまう。ヨダレが顎に零れて滴つていた。

「フフっ、もう欲しくてしかたないメス犬の顔になつたな」

四葉の唇が得意げに笑い、語る。

「この龍領と牽正をうたれた女は、みんなこうなつちまう。あの不感症みたいな顔したユリアだつて、そうだろうよ。もつとも、兄貴たちも秘孔、龍領と牽正の、この使い方は思いつくまい。あのチエリードも。できの悪い弟もふくめて、あのチエリー三兄弟には一生かかつても到達できない、頂点の一つ、まさに天。女にとつては天国だろう？」

「あはあああああああ…」

沙耶香は両の乳房を揉まれると何度も絶頂が襲つてきて、もう話は

聞いていない。四葉の唇は語り終わると、ペロリと小さな舌を出した。そして、沙耶香のブラウスを開いてブラジャーを押し下げる、ピンと勃った乳首を露呈させた。

「可愛い乳首だな。お前……えへつと、名前、なんだつた？」

「さ……沙耶香……ハア！　ハア！」

忘れられていたことも意識にのぼらず、喘ぎながら沙耶香が答えた。

「そうだつたな。沙耶香」

「つ……ああつ……」

沙耶香は名前を呼ばれて嬉しくて絶頂した。ちゃんと名前を呼ばれた記憶は、ほとんどない。もともと、名取の両親が早耶香にするか、沙耶香にするかで話がまとまらず、両方にするとという無茶な決断をして、まず姉が早耶香になり、それから沙耶香が生まれた。けれど、周囲は呼ぶときに差をつけないと混乱するという理由で、姉をサヤチン、そして沙耶香は郷土の人形にちなんでサヤボボという変な名が定着してしまい、ひどいときは姉は単にチン、沙耶香はボボと呼ばれたり、姉妹を合わせてチンボボと呼ばれたりする。二人とも美人といつていい顔立ちで声も可愛らしいのに、この名のせいで男子からの扱いも軽いのがコンプレックスだつた。

「可愛いぞ、沙耶香。とくに、お前の喘ぎ声はいいな」「ああんっ！　ああああんううう！」

ほめられた犬が喜ぶように沙耶香は腰をふつてしまい、乳房が揺れる。四葉の瞳が沙耶香の乳首を見つめ、舌先で自分の唇を舐めた。その動作で沙耶香は乳首を舐められると予感して恐れる。

「ちよつ……ちよつと待つて……まさか……その舌を……や……やめて……た……頬むから……そ……そんなことされたら……死んじゃう……ね……ね？」

乳房を揉まれるだけでも絶頂してしまったのに、名前を呼ばれるだけでも絶頂しているのに、温かくて柔らかそうな四葉の舌に舐められたら、快感で死んでしまうかもしれないと沙耶香は涙ながらに懇願したけれど、口噛み酒を造る四葉の唇と舌は、ゆっくりと沙耶香の乳首に近づいてくる。

パクつペロペロ…

「うきやあああん!! ひひくんうう!」

沙耶香は身体がバラバラになるような快感を覚えて絶叫したのに、快感の波が止まらない。舐め続けられるので次々と快感の絶頂が襲つてくる。

「はああああんう!!! ひええううわあああんうう!! けうつうくいやあんんつ!! あきやあくん!! あくおおこおお…はわつ!!」

快感すぎて沙耶香はショーツの中に、おしつこを漏らしていく。ショオワアアア!

温かい小水が皮膚を濡らす感覚も気持ちよくて、また絶頂してしまうし、尿道を小水が駆け抜ける排尿感も気持ちよくて何も考えられなくなる。四葉の舌が乳首を舐めるのをやめてくれると、やつと息が静まつてくる。

「ハア！ ハア！ ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…うう…」

沙耶香は高校生にもなつて、おもらしくしてしまつた自分を自覚して恥ずかしくて泣いた。なのに、四葉の唇は笑つていて容赦ない。

「ぐちよ濡れになつたな」

「つ…うう…」

「いい頃合いだ」

四葉の両手が沙耶香のショーツを脱がせてくる。もう抵抗する気力もなくて沙耶香はスカートはそのままにショーツを脱がされてしまつた。さらに四葉の手は自分のショーツも脱ぎ捨てると、あるはずのモノが無いのを思い出した。

「あ、そうか…無いのか…まあ、いい。擦りつければ、なんとかなるだろう」

すつかり忘れていたけれど、こだわらないことにして頷くと、脱ぎ捨てられた四葉のショーツは沙耶香のショーツと重なつておかれた。

「お前、可愛いな。オレ好みだぞ」

「……四葉ちゃん…私…頭が、おかしくなりそう…」

幼馴染みで親友のはずの同性に、可愛いと言われ、キスされる。キ

スされた唇も気持ちよくて、沙耶香からも吸いついてしまうし、四葉の舌と沙耶香の舌が絡み合つてハフハフと息を乱しながらキスを続ける。四葉の唇が離れていくと、名残惜しくて沙耶香は目を潤ませた。

「沙耶香」

「つ…はい…」

「脚を開け」

「…うん…」

開脚すると、少し治まっていた秘孔の効果が再燃して、また股関節の限界まで脚が拡がっていくし、両腕も勝手にあがつて乳房を吸つて欲しそうに晒した。

「いくぜ」

「つ…」

沙耶香も四葉の身体も少女らしく柔らかいので下半身を絡み付け合うと、溶け合うように一つになつた。夢のような時間だつた。秘孔の効果だけではなくて、四葉の身体からは、いい匂いがした。何日か入浴していない感じなのに、とても不思議な甘い香りがして沙耶香は酔つたような気分になつた。おかげで、もう四葉の身体は満足してベッドに寝転がつているのに、沙耶香の方は止まらずにペロペロと四葉の肌を舐め続けている。

「おい、くすぐつたいぞ」

もう性交は終わつた気分でいるのか、コンビニで買つてきたスナック菓子を食べ始めているけれど、沙耶香は興奮が冷めない。四葉の身体を舐め続けている。いつも全開になつてているブラウスの前から顔を埋めて、おっぱいを舐め、汗で濡れた四葉の腋を舐めると、酩酊していく。

「美味しい～ちにや～…」

それつが怪しい声を漏らしている沙耶香の頭を、四葉の手が子犬を撫でるように触れる。

「ちよつと、強く秘孔を刺激しすぎたか……まあ、そのうち冷めるだろ。やっぱり、手加減が難しいなア…」

「美味しいの」

「そうか、そうか」

なつく犬が舐めてくるのを任せておくように、四葉の手は沙耶香の頭をポンポンと叩いた。沙耶香は四葉の腋から味がしなくなるまで舐め尽くすと、次は四葉の首筋や耳を舐める。そこも舐め終えると、またスカートをめくつて内腿を舐める。膝の裏も舐めて、四葉の靴下に手をかけた。

「ハア…ハア…」

四葉の靴下から、いい香りがして沙耶香は脳が痺れた。靴下を脱がせると、もう無我夢中で四葉の足を舐める。親指から順番に吸つていき、指のまたの味を楽しみ、爪の垢を飲み込み、足の裏に頬ずりする。片足を舐め尽くすと、もう片方の足を見つめながら、沙耶香の唾液で濡れた四葉の爪先を股間に押しあてた。ずっと熱く濡れている沙耶香の股間は四葉の爪先に吸いつくと、四葉の親指をくわえ込んだ。

「あううんうう…ハア！　ハア！」

そして、もう片方の靴下を脱がせて、四葉の親指を口で吸う。気を利かせてくれたのか、四葉の親指が軽くピストン運動するように動いてくれると、もう沙耶香は何度も絶頂して、ずっと、このまま四葉の身体を舐め続けていたいと想い始めたときだった。

「四葉？　いる？」

保健室に人が入つてくる気配がして、司の声がした。

「おう。何か用か？」

「だいたい、できたよ！」

司はカーテンの中にいる女子と話すときのエチケットで、カーテンを開けたりせずに会話を続いている。本来なら、すぐにでも沙耶香は今の行為をやめるべきだったのに、やめたくなくて、やめられない。四葉の爪先を股間に受け入れながら、反対の爪先を吸つているのを、もしも見られたら、どう思われるかよりも、やめたくない気持ちが強くて理性が働かない。むしろ、興奮する。恋破れて司は四葉に告白してしまったし、四葉も受け入れている。それなのに今はカーテンの一枚向こうで、四葉の身体と絡まっているのは自分だという状況が倒錯

的すぎて、二人の会話は耳に入らず、ただ腰をくねらせながら、四葉の足の親指を吸っていた。けれど、次の瞬間、四葉の足が乱暴に去り、怒鳴り声が聞こえてくる。

「よくできた弟～～!?」

カーテンが乱暴に開けられ、飛び出していった。そして、さつきまで沙耶香が舐めていた足が司を蹴っている。

「兄よりすぐれた弟など存在しねえ!!」

「痛つ…あ、うわっ?! …、も、もしかしてジャギさんの方?!」

司は朝から学校を欠席して古川図書館に行っていたので入れ替わっている状況を知らず、四葉から頼まれたことを完成させた喜びで報告する中、兄貴には負けない、よくできた弟、という話題に触れたのだった。

「おのれの無力さを思い知らせてやるわ!!」

「痛いつ…うぐ！ ザ、ごめ！ な、なんで?! な、なにが?!」

なぜ蹴られるのか、司はまったくわからないまま、四葉の素足が降つてくる。ガスガスと踏み蹴られる。けれど、見上げると、なぜか、四葉のスカート内はノーパンのようにも見える。見間違いかと思つて見直そうにも、激しい蹴りが降つてくるので、そもそもいかなし、ノーパンでも、そうでなくとも、見上げるのは四葉に悪いと思つて、ただ蹴られるのに耐える。もともと四葉の体重は軽いし、靴も履いていないので、それほど痛くない。蹴つている方も殺す気ではなくて、いたぶる気なので一発一発は強くない。さんざんに蹴つた後、四葉の口が唾を吐いた。

「ペつ！」

四葉の唾が、司の顔に降りかかり、沙耶香は一瞬だけ司が嬉しそうに頬を赤らめたのを見逃さなかつたけれど、羨ましいという気持ちが生まれていたことを打ち消すように頭を振つた。

「私……さつきまで、……何を……危なかつた…」

さつきまでのことが夢のように思える。けれど、あのままだつたら危ないということもわかつた。

「……宮水の巫女つて……酒蔵の天井に、いい酵母菌がいるみたいに、

……身体に、なにか、あるんかな…」

沙耶香は乱れた衣服を直しながらつぶやき、立ち上がる。

「そろそろ放課後やし。学校を出よ」

もう保健室にいて、変なことになるのは懲りたので、三人で学校の外に出た。なのに、一難去つてまた一難で、不良の集団に取り囲まれてしまつた。

「総代、コイツです！」

昨日、四葉が不意打ちで倒した空手部の主将が、さらに自分より大柄な男子と、たくさんの仲間を連れてきていた。

「こんなチッコい女にやられたのか、お前は」

「す、すみません。けど、気をつけてください。不意打ちで金的、狙つてきますから」

「かわいい顔して、怖いのオ〜」

大柄な男子が四葉の顔を見て笑つている。四葉の唇が不快そうに歪んだ。

「なんだ、てめえは死にたいのか？」

「おお、怖い怖い。威勢のいい女の子だのオ」

「宮水！ このお方の名を知つているか一つ！」

「知らねえよ」

「このお方こそは、岐阜県番長連合総代の…」

空手部の主将が言い終わる前に、四葉の回し蹴りが顔面に決まつた。

「ベギつ！」

さきほど司を蹴つたときは違ひ、筋肉の潜在能力を100%出し切つた鋭くて重い蹴りで、一撃で気絶させている。そして、司が驚く。

「岐阜県つて、いまだに番長連合とか、あるんだ……もう合掌造りと同じくらいの文化財じやないのか…」

現役の高校生だったけれど、そんな世界があることは知らず驚いている。とくに県全体で連合しようと思うと、飛騨地方と美濃地方で、かなり集まるのが大変そうだった。もしかしたら、今日も、けつこう

な遠征として、ここに来ているのかもしれない。

「かかれえ!!」

総代が命じると、たくさんの仲間たちが四葉を取り囲み、襲いかかる。

「フフ、降りかかる火の粉だ。あいつも文句はねえだろう」

ジヤギはメツセージを少しは読んだので、暴力行為は控えていたけれど、もう遠慮しない。

「ぶつ飛ばす！」

それでも殺さない程度に次々と蹴りを入れていく。ときには拳で殴りつけるけれど、もともと四葉の腕力なので100%を出し切つても、秘孔を避けると効率が悪い。攻撃の主体が蹴りになるのでスカートの裾が舞い上がり、四葉のお尻が丸見えになっていた。

「つ……なんで、四葉……パンツを…」

「つ……四葉ちゃん……あ…」

沙耶香は保健室から出るときに重ねて脱ぎ捨てられていたショーツを自分だけ着けて、四葉の分は、そのままになつていてることに気づいて青ざめる。しかも、ブラウスも全開なので立ち回りすると、乳首も股間も何もかも露出してしまっている。このままでは、あまりに四葉が四葉に戻つたとき可哀想だった。ただ、ノーパン、ノーブラのおかげで相手の視線が誘導されて倒しやすくなっている。

「ぐわっ?!」

「げふっ!!」

「油断するなつ、……はつ！」

どうしても、女子相手に油断しないで戦おうと思っていても、つい蹴りであがつた脚の付け根に視線が落ちてしまい、一瞬のチラ見のために顔面にクリーンヒットを受けてしまっている。沙耶香が叫ぶ。

「そいつらの記憶が飛ぶくらい！ 思いつきり蹴つてやつて!!」

「おうよ！」

止められても止める気はなかつたけれど、止められると思っていたジヤギは心得たとばかりに立ち回る。もともと、リュウケンの指導を

素直には聞き入れず、秘孔を正確に突くことよりも相手に打撃を与えることを重視していたので、秘孔を避けても楽しく戦える。また実際に、たくさんいた仲間たちをすべて倒した。

「ハアハア！　あとは、てめえだけだ」

「ほオ、少しばらうやるようだのオ」

観戦していた総代が油断なく構える。

「だが、このワシはお前の色香になど惑わされぬぞ。なにしろ、ワシはゲイだからのオ」

「……べつ！」

四葉の唇がアスファルトに唾を吐いた。

「ゲイって…」

司と沙耶香も言われてみると、どことなく総代にゲイの雰囲気を感じた。キレイに剃り上げられたスキンヘッドや学ランの刺繡など、いや身奇麗なところも、それを感じさせるし、すでに四葉の三連キックを受けてアスファルトに転がっている副総代らしき男子は長髪で唇にリップを塗っていたりした。

「ワシは、お前の汚いマンコに目を奪われたりせんからのオ」

「ハア、ハア…」

構え直そうとした四葉の細い足がフラついて膝がガクガクと震えた。

「ちつ…この身体、…持久力もねえのか…」

「脚にきどるのオ」

「貴様ごとき一瞬で倒してくれるわ！」

言い放った四葉が鮮やかな回し蹴りを放つたけれど、総代は蹴り筋を読んでいて、ぶ厚い手のひらで受けとめた。ずっと観戦していく戦い方を見極めていたようだつた。

「おお、痛い痛い」

「ちつ、なら…」

蹴りを受けとめられた姿勢のまま、反対の脚で再び総代の首筋を狙つて蹴つたけれど、これも受けとめられる。

バツ！

総代が四葉の足首をつかんで捕まえようとしてきたより一瞬早く後転して逃げ、体勢を整える。

「ハアハア！」

四葉の唇が荒い息を吐いて、汗が流れた。

「今度は、こっちからいくぞオ」

総代が相撲の突っぱりのような攻撃をしてくる。

ゴワツ：

奇抜ではない、ごく普通の突っぱりだつたけれど、避けたくても脚がついていかない。

「くつ…」

四葉の両腕が顔を守るように交差して突っぱりを受けとめる。

ビシツツ！

か細い四葉の腕が、ぶ厚い掌を受けて折れそうなほど撓った。

「まだ、まだ、いくぞオ！」

次々と突っぱりを放つてくる。奇抜でない突っぱりなだけに隙も生まれず反撃の機会が無く、じわじわと体力を奪われる。うまく力を受け流してみても、勝機が見えない。

「…うぐっ！」

とうとう大きく弾かれてしまい転がつたけれど、追い打ちされるのを避けて距離を取る。

「ハアハアハア！ 畜生が、ハアハア！」

「ぐふふふ。もう、おしまいかのオ」

「ちつ…」

四葉の舌が大きく舌打ちして、汚れたブラウスを脱ぎ捨てる。四葉の身体は上半身裸となつた。

「お色気攻撃は無駄じゃと言つたはず」

そう言つて距離をつめて突っぱりしてくる総代にブラウスが目隠しとして投げつけられる。

「オラっ！」

四葉の爪先が総代の股間を狙つて放たれただれど、予想されていたようで腿でガードされてしまう。それでも、反対の四葉の足が総代の

腹部に蹴りを入れる。

ボゴツ：ブニユツブニユ：

ぶ厚い脂肪の層が四葉の足を受けとめていた。

「効かんのオ」

「くつ…」

再び離れようとしたけれど、四葉の足に腹部の脂肪がからみつき、手間取つてしまつた。その隙に至近距離から突っぱりを放たれる。

バシイン！

「ぐうつ?!」

四葉の左腕が頭部をガードしたけれど、その衝撃は軽い体重を吹っ飛ばすに十分だつた。

ドシャツ：

吹つ飛ばされて、立ち上がろうとした四葉の足がガクガクと崩れ、膝を着いた。

「このオレ様に膝をつかせるとは…、うつ…うえつ…」

脳震盪のためか、腹部にも衝撃を受けたのか、吐きそうになつて四葉の右手が唇を押さえている。

「さて、裸にして二度と町を歩けないよう吊してやろうかのオ」「ううつ…うつ…」

もう四葉の脚は膝を着いたままで立ち上がる力がないように見えた。ここまで圧倒されて見ているだけだつた司と沙耶香が叫ぶ。

「やめろよ！ もう警察を呼ぶからな！」

「四葉ちゃんのお父さんは、この町の町長なんよ！ あんたなんか刑務所行きや!!」

「はあつ?! それがどうした?!」

総代が叫び返してくる。

「ワシは先週シャバに戻つてきただけど、仕事なんか無いんじやあ！ もう、どうなつてもええわい!! また、タダ飯じやア!!」

「つ…」

司と沙耶香が戦慄する。同じ世界に生きていても、生活してきた階

層があまりに違いすぎて、もう価値観が違う。守るものがない相手に、何を言つても無駄だと思い知らされた。

「町長が、なんぼのもんじやい!! うおおおおおオ!!」

突進してくる総代を前に、フラフラと四葉は立っていた。

「四葉ちゃん、危ない!!」

「四葉、逃げてくれ!!」

「……」

四葉の瞳が、脳震盪でも起こしているように、ぼんやりと総代を映している。もう、目の前まで総代が迫っている。逮捕覚悟の破れかぶれの体当たりを受けては、四葉の身体では圧死してしまうかもしない。沙耶香が悲鳴をあげ、司が間に合わないと知りながら駆けつけようとした次の瞬間、四葉の唇が含み針を吹き飛ばす。

ブブブツ!

針は正確に総代の目の回りへ命中した。

「なわつ?!」

「バカめ!!」

さらに四葉の足が針の刺さった総代の顔を蹴りつける。

「あぎゃあああああ!!」

深々と針が刺さり、総代が悲鳴をあげている。

「オラつ!!」

また四葉の足が総代を蹴る。もう戦意を失っている相手の股間を蹴り、そして側頭部に強烈な回し蹴りを入れて気絶させた。

ドサアアア…

総代の巨体が倒れ込むと、さらに股間を蹴る。

ズグつ!!

四葉の靴の爪先が抉り込むように男の股間を蹴ると、何かが潰れたような音がした。

「手こずらせやがつて。ペツ!!」

最後に唾を吐きかけてフイニツシユにする。

「ハア…ハア…終わつたぜ」

「四葉ちゃん……今のは…」

沙耶香は午前中にコンビニへ行つたとき、食べ物以外に裁縫セットを買い込んでいたことの意味が、ブラウスのボタンや糸のほつれを直すような女の子らしいことのためではなかつたと悟り、そして、さきほど吐きそうになつっていたのは演技で、その間に針を口内へ仕込んでいたのだとも、わかつた。

「……なんていうか……宮水の巫女っぽい……技といえば、そうやけど……」

「これはオレ様の得意技よ。けつこう難しいんだぜ。こんなに巧く飛ばせるようになるには、かなりの修行が必要よ。この女の口で、うまくできるか、不安だつたが、意外に鍛えてあるのか、思いの外、うまく飛んでくれて助かつたぜ」

「…………まあ、…………祭りにそなえて…………練習はしてると思うよ…………」

沙耶香はブラウスを拾つて、四葉の肩にかける。

「おい、テツツー！」

「は、はい！」

「肩をかせ。もう、脚がフラフラだ」

「……う……うん……」

司はブラウスを羽織つただけの四葉を支えた。そして家路に着くと、一葉を心配させないように沙耶香が衣服を整えてやり、玄関でも靴を脱がせてあがつた。

「四葉ちゃん、帰りました！」

「お邪魔しまーす！」

やや心配なので沙耶香と司も、いつしょにあがる。一葉は台所で夕食の用意をしていた。孫娘を心配して連れてきた二人に笑顔で頭を下げた。

「今夜は煮物やし、いつしょに食べておいでな」

「ありがとうございます！」

遠慮する関係ではないので二人とも素直に礼を言い、スマートフォンを操作して自宅に夕食は宮水家でいただと連絡している。三人とも居間に座り、寛いだ空気になつた。

「おい、お前らが、ときどきいじつてる、それ、なんだ?」

「え? これ?」

沙耶香がスマートフォンを四葉に向ける。

「おう、それだ」

「スマフォやけど」

「……スマフォって何だ?」

「便利な携帯電話、かな……画面が大きい」

「電話……この地区は電話がつかえるのか? それとも無線機か?  
しかも、それカラー画面じゃねえか!」

四葉の手が沙耶香のスマートフォンを奪い取り、見つめる。

「おお……この写真、この女とお前らか?」

「そうやよ」

「……すごいなア……警察や軍隊も機能してるって話だしな……」

そう言いながら、疲れた脚を自分で揉もうとして、すぐに二人へ命じる。

「おい、お前ら、オレ様の足を揉め!」

「え……」

司が戸惑い、沙耶香が答える。

「わ、私が揉んであげるよ。テツツーは遠慮しどき」

「そ……そだよね……」

「オレ様はお前らに命じた。オレは同じ命令を二度するのが大嫌いだ。左右同時に揉め」

「じゃ……じゃあ……ボクも……」

そつと司も四葉の足に触れる。  
「もつと力を込めろ」

「は、はい」

沙耶香と司が疲れている四葉の足を揉んでいく。

「…………」「

四葉の細くて白い足からは不思議ないい香りがする。

「…………」

「あ……疲れたアア……本来のオレ様の身体なら、あんなヤツら瞬

殺なものを……」

四葉の身体が寝ころぶとスカートの裾があがってしまう。司と沙耶香はノーパンなままなことを思い出した。

「……ゴクツ……」

二人が同時に生睡を飲み込み、赤面する。

「テつ、テレビでもつけよ!」

おかしな空気になりそうだったので沙耶香がテレビをつけた。

「ほオヽ……テレビまで…」

四葉の身体がテレビを見るために寝返りをうつたので、スカートがめくれてお尻が見えてしまう。沙耶香が慌てて裾を直してやつた。

「明日の中部地方のお天気は愛知県で晴れ、岐阜県では…」  
テレビが天気予報を流している。

「天気予報までやるのかあ…………」

四葉の瞳が眠そうにさまよう。その瞳が壁にかかっているカレンダーを見た。

「…………2020…………2020年だと?!」

「キヤ?!」

「うわっ?!」

揉んでいた四葉の足が急に立ち上がった。沙耶香と司が驚くけれど、四葉の手が司の胸倉をつかんだ。

「おい! 今は何年だ?!」

「え? に…、2020年だけど?」

「いやいや、いくら何でも、そんなに進んでないだろ?! えっと…1、2、3……核戦争から冬も夏も、わかりにくいから…それでも…」

四葉の指が年数を数えている。

「せいぜい、よく進んでて98年とか、そんなもんじゃねえか?」

「…………」

司と沙耶香は、どう反応していいか、わからない。そこへ、一葉が

「まずは、お夕飯にしなさいな。カレンダーの話は、置いておきま  
煮物を持ってきた。

しょ」

「そうだな。腹が減つたぜ」

煮物の匂いに四葉の口が唾を飲み込んでから、微笑した。

### 第3話

翌朝、四葉は仮住まいの自宅で目を覚ますと、サッと起きあがり机に向かってペンを持ち、速記のような速さで体験してきたこと、覚えていることを書き記していく。日の出から書き始め、一冊の辞書になるほど書き物をした四葉は7時頃、玄関に司が訪ねてくる予感を覚えて、一階におりた。廊下で祖母が心配そうに声をかけてくる。

「四葉、朝ご飯、てきておるよ。食べておいき」

邪魔にならないよう静かにしていた一葉は食事も風呂も用意していただけれど、四葉は礼を言つて謝る。

「ありがとうございます、お婆ちゃん。でも、ごめんなさい。時間がないの」

四葉は制服のまま寝ていて、起きてそのまま出て行こうとしている。一分一秒を惜しんでいる様子に孫娘の体調が心配でたまらない。

「四葉……そんなに大変なことを……」

「あんまり心配しないで。もう、そう長く続くことはないと思うから。でも、その分、時間がない気がするの。今日は長い一日になりそう」

「四葉……」

「昨日の私がしたこと、ジャギさんの言動を、主なところを手短に教えて」

そう言われて一葉は昨日の動向を伝える。とくに今が2020年であることに気づいたような納得していないような状態になつたことに、四葉は頷いた。

「彼にも協力してもらわないといけないから、そろそろ気づいてもらつた方がいいわ」

「…………。四葉、あんた…………雾岡気が…………、…………本当に、四葉なん？  
つ……変なこと言うて、ごめんよ」

相当な困難に直面しているようなのに、高校2年生の17歳とは思えないほど、しつかりとして静かに落ち着いて見える孫娘へ、思わず問うてしまつたことを一葉は詫びたけれど、四葉は穏やかに凜とした

微笑みを浮かべた。

「今日は四葉だよ。お婆ちゃん。この口が婆アなんて言つてるみたいで本当に、『めんね』

「ええんよ、そんなこと」

「もう行くね。いつてきます」

「いつてらっしゃい」

一葉が祈るように四葉を送り出し、四葉は自分が書いた物をもつて、玄関にいる司へ声をかける。

「おはよう。ありがとう」

四葉は司が手に持つている書き物へ、礼を言つた。

「おはよう、四葉。頼まれたこと、やつたつもりだよ」

「頼りになる人で嬉しいわ。ありがとう」

「つ…、そんな…」

あまりにもストレートに、そして眞面目に礼を言われて誉められ、司は照れくさくて目をそらした。

「じゃあ、それを持つて御石様へついてきて」

「え？　ああ。けど、学校は？」

司は早く完成した物を四葉に届けたくて、登校時間より早めに来たのだったけれど、学校へ行くつもりの無さそうな様子に問い合わせ、四葉は平然と答える。

「欠席の連絡を入れてくれる？」

「わかった」

それだけ大切なことなのだと、司も即座に理解して、二人が欠席することを学校へ連絡し、あとから通学路に出てくるはずの沙耶香へもメールを送りながら、四葉と歩く。行き先は7年前に落ちてきたティアマト彗星の一部、それを御神体として再建しつつある新宮水神社だつた。まだ建築途中で、ようやく本殿だけが完成しつつあるけれど、今朝も宮大工たちが集まり、これから作業に入ろうとしている。そこへ、施主であり、宮司となる四葉が現れると、宮大工と作業員たちは頭を下げて挨拶する。

「おはようございます」

「おはよう。今から急に神事を執り行うことになつたの。申し訳ないけれど、みなさんは撤収してください。この本殿へは誰も立ち入らないよう、お願ひします」

「わかりました」

棟梁が異議一つなく全員を撤収させる。まだ作業が始まつていなかつたので、すぐに誰もいなくなつた。誰もいなくなると、司は独特の雰囲気を感じた。落ちてきた隕石の周りには半径500メートルのクレーターができている。その内には、まだ草一本生えていない。再建工事のために鉄板で仮りの道路が造られている以外は、7年前から、さほど変わつていない。そんなクレーターと隕石がある光景の中に、ぽつんと神社の本殿だけが工事を9割ほど終え、建つている。真新しい桧や杉の香りがした。

「本当なら、身を清めたいけれど、その時間も無さそう」

四葉は靴を脱ぐと、本殿にあがる。

「いつしょに来て」

「……ああ。……い、いいのか？　ここにボクがあがつても」

神聖さにおそれを感じた司が問う。司などの一般人にとつて、神社の本殿はあることのない神域で、その手前から祈るものだという認識があつた。四葉は穏やかに、はつきりと答える。

「今は、いいのよ」

「……。わかつた」

司は頷いて靴を脱ぎ、本殿に入つた。本殿内は50畳ほどの広さで、入つてきた格子状の戸を閉めても、その反対側は隕石に面してオープンな構造になつていた。左右の壁と天井、床によつて視界が区切られると、落ちてきた隕石が目の前いっぱいに拡がつてゐる。地球外から来た岩石は、これまで司が見たどんな岩石にも似ていなかつて、その存在感は御神体と呼ばれるに相応しい重々しさがあつた。四葉は本殿の中央に立つと、自分が書いた物を足元に置き、司が持つてゐる紙束を受け取る。

「よくできてるわ」

少し目を通した四葉は微笑んだ。

「頑張ってくれて、ありがとう。これで世界は救われるかもしねない」

「四葉……」

司は訊きたいことが山ほどあつたけれど、四葉の邪魔をしたくないので我慢する。四葉は静かに受け取った紙束と自分が書いた紙束を畳へ並べて置いていつている。司が書いたものは依頼されたとおり1962年から1990年代にかけての各国の軍事や政治、経済についての資料だつたし、四葉が書いた物も同じような内容なのか、対応させるかのように並べているけれど、四葉が書いた物は記号が多くて司にはわからない。不意に四葉が司に頼む。

「このウクライナの資料、もう少し細かいところを知りたいわ。ここと、ここ、スマフォで調べてわかる範囲でいいから、お願ひ」

「ああ、わかつた。調べてみる」

その後も、ときおり四葉は資料を並べながら追加の情報を要求していく。それを司が調べて四葉に教えると、記号のような文字を書き加えていった。

「それ、なんて書いてあるのさ？」

思わず司が質問してしまうと、少しだけ説明してくれる。ソビエト連邦を単にソと書いていたり、アメリカ合衆国をAとしか書いていないことや、戦闘機をキとしか書いていないことを教えてもらうと、少しへ司にも意味が推し量れてくる。

「……QにソミB、62／10対Aキ54……これつて、キューバにソ連がミサイル基地、62年10月対抗してアメリカが戦闘機54機を派遣、つて意味？」

「……」

四葉が無言でコクツと頷いてくれたけれど、その瞳は一枚一枚の紙片を食い入るように見つめていて、これ以上は話しかけないで欲しいという気持ちが伝わってきたので司は黙る。書くスピードを優先して記号を多く使用した四葉にしか読めないような紙片が円陣に並べられていくと、司には神聖な儀式にさえ見えてきた。二人が書いた物が50畳の本殿に所狭しと並びきると、司は本殿の隅までさがつてい

た。四葉が深呼吸する。

「あとは声を聴くだけ。糸の声を。歴史の糸の声を」

つぶやいた四葉は静かに立つてしたり、歩き回つて紙片を見たり、そんなことを2時間以上も続けていて、そして唐突に唾を吐いた。

「ブツ」

「……」

司には何をしているのか、まったくわからないけれど、四葉が吐いた唾はあざやかな放物線を描いて、飛び散つたりせず一塊になつて紙片へ落ち、そこにあつた人名に染み込んだ。

「ブツ」

また四葉が唾を吐く。同じように人名へ飛び、染み込んでいる。

「……」

そういえば口嗜酒も四葉や三葉さんの唾液を混ぜて造つていたから、四葉たちの唾液には何かあるのかもしない、と司は漠然と考えたけれど、口に出して訊いたりはしなかつた。

「ブツ」

三度目も人名に染み込んでいた。

「この三人のことを調べて」

「え？ あ、ああ。わかつた」

四葉の唾液が染み込んだ三つの人名は、政府の高官と大企業家、口ケット技術者だつた。言われた通りに司が調べると、その情報を四葉は書き記し、それから心に刻みつけるように見つめ続け、完全に諳じたと感じると、大きなタメ息をついた。

「はあああ……終わった……」

とても疲れた様子で四葉は畳へ座り込んでいる。張りつめていた空気がやわらいだので司が訊く。

「四葉、大丈夫？」

「ええ。それより今は何時？」

「えつと、…………11時20分だよ」

「もう、そんな時間なの…………。いえ、間に合つただけ、よかつたのかな…………」

そう言つた四葉は急に甘えるような瞳で司を見ると、ねだるような声でいざなう。

「ねえ、こつちに来て、司」

呼ばれて司は本殿の中央にいる四葉に近づき、問う。

「なんで、テツツージやないのさ？」

急に呼び方を変えられて、ぐく自然に質問していただけれど、四葉は生真面目な顔で司を見つめながら告げる。

「テツツーつていう名前は、テツシ一の2号、2番目つて意味がこもつてるでしょ。姉さんが克彦さんをテツシ一つて名付けたことの二番煎じだけど、もともとテツシ一も、お母さんがお父さんの俊樹をもじつてトツシ一つて呼んでたことの真似、だからテツツーは二番煎じどころか、三番煎じなの」

「そう……だつたのか……そんな歴史が……。でも、なんで急に？」

「私は自分の伴侶を、そういう風に呼びたくないの。ちゃんと本当の名で司つて呼びたい」

「はつ……伴侶……つて……？」

司が驚いて赤面していると、四葉は静かに抱きついた。

「う、うわつ……」

さらに司が驚いて、どうしていいか、わからなくなる。四葉へ告白はしたし、受け入れてもらえたような気もしていただけれど、あまりの展開の速さに思わず司は一步さがる。さがつた分だけ四葉は近づいて男の顔を見上げ願う。

「抱いて」

「えつ……う……うん……」

ここまで言われると、司は動搖しながらも抱きつかれている状態から、抱き返して、抱き合つた。

「…………」

そのまま抱き合い、四葉は男を見つめているけれど、司は照れくされて四葉の瞳を正視できない。大好きだつた女の子と抱き合つて喜びよりも、急すぎる進展についていけず、そして疑問は糸守町を

囲う山々ほどあるのに、四葉は抱き合つたまま、右手でブラウスのボタンを次々と外していき、前を全開にして肌を見せると、スカートのチャツクをおろし、ホックまで外してしまつた。

パサつ：

スカートが畳へ落ちる衣擦れの音がして、四葉の顔が牡丹のように赤く染まつた。

「司……抱いて」

「そつ…そつちの意味で?!」

ますます驚いて司が大声をあげると、さらに四葉の顔が赤くなる。けれど、その意志は固いようで抱きついたまま離れない。そして恥ずかしさで目を潤ませながらも頷く。

「うん。そういう意味で……抱いて」

「ちよつ、ちよつと待つてよ！ 四葉！」

司は四葉の肩をつかんで引き離した。

「どうしたんだよ?! 急に！」

「……」

問われて四葉は困つたように目をそらし、少し考え込むと、また求めれる。

「お願い、抱いて」

「…………四葉…………そんな、急に言われても……」

「…………。つ…………ごめんつ…………今、無し。…………忘れて」

そう言つた四葉が、とても悲しそうに、とても淋しそうに、泣き出しそうな顔になつて、耐えきれず両目からポロポロと涙を零して顔を伏せたので、司は強烈な切なさを覚えて、強く四葉を抱きしめた。まるで今、抱いておかないと何かを失つてしまいそうな気がして、抱きしめる腕に力を入れ、そして問う。

「待つてくれよ、四葉。せめて少しは何か教えてくれ」

「…………」

「どうして急に？ それに、あの調べた三人は、どうする気なんだよ

？」

「…………質問は……しない約束」

「それでもさ！ それでも……四葉は伴侶になる相手に、何も言つてくれないのかよ?!」

「つ……それは……」

四葉の瞳が迷つていてるように宙を彷徨い、また溢れるように涙を零してから、まっすぐに司を見つめた。

「私のお母さんは、お父さんへ何も言わなかつた。私も、目覚めるまで悟れなかつた。……でも、もう、わかつてる……それを、司に黙つているのは……司に悪いよね」

「四葉？」

「……。何から話せばいいのかな……、とにかく、ビックリしないで聴いてほしい。私のお母さんが、私が小さい頃に亡くなつたのは知つてるよね」

「ああ。……」

「私も、あのくらい短い命なの。きつと」

「つ?! どうして?!」

驚かないでほしいと言われたけれど、驚かずにはいられなかつた。今、腕の中にいる四葉は健康そのもので、どこにも死の影などない。なのに、早世するという四葉の言葉は信じがたい。けれど、前例を出されると、半信半疑になり不安になつた。そんな司の視線を受け止めて、四葉は微笑をつくつた。

「それが宮水の巫女の宿命だから」

「……宿命……宮水の巫女……。……もしかして、それは三葉さんが時間を跳躍したかもしれない話と、関係あるのか?」

「ええ」

ひよつとしてと司が考えた可能性は言つていて事実とは考えにくいものだつたけれど、四葉は明瞭に肯定した。

「つ……そんな……でも、やつぱり三葉さんは時間を……彗星落下を予知した……あのウワサは本当だつたのか……」

「そうよ」

「いや……けど、あの話は、そもそもが、おかしくないか?」

当時、司も10歳だつたけれど、町に流れた噂は神秘的かつ奇跡的

だつたので覚えている。あの隕石落下で誰一人死傷しなかつたのは奇跡だつたし、まるで悲惨な未来を知つてゐるかのようになに隕石が落ちてくると騒ぎ立てたのは三葉だつた。それでも流れた噂話に矛盾点は感じてゐるし、その矛盾点ゆえに町民たちも半信半疑でいる。けれど、半分は信じてゐるので宮水の巫女への信仰は事件後、かなり厚くなつてゐる。そこに疑問を投げかけるのは、かなり勇気のいることだつたけれど、それを率直に問う司へ、四葉は問い返した。

「どのあたりが、おかしいと思うの？」

「だつてさ、もしも入れ替わりが時間を跳躍して起こつていたとして、隕石落下を知ることができたから過去へ危険を伝えたとしたら、その未来の方では犠牲者がいたはずなのに、その存在があやふやになるし、何より未来から過去へ危険を伝えようつて動機が生じないことになつてしまふ。かりに、うまくいつたとしても、今度は、うまくいつた未来から過去へ、伝えようつて動機が生じない。どうどう巡りのパラドックスにおちいるはずだろ？」

「うん。それは初步的なタイムパラドックスの概念ね」

「そうだよ。もしや、パラレルワールドつてことなら、それはそうであつて町の人たちが死んでしまつた世界も、すぐ隣に続いているのかもしれないけど。でも、それだと町の人たちが、奇跡が起こつて、みんな助かつたつて噂をすること自体、もう、おかしな話じゃないのか。何より、三葉さんが最初に結婚したつて相手は会うはずのない存在になるはず」

「司、まず自分が認識してゐる世界や世界についての概念が、認識や想定の通りだとは限らないって考え方は、できる？ 根本から世界観を多様に持てる？」

「……」

「司が考え込み、そして問う。

「太陽は地球の周りを回つてゐるとか。地球は丸くない、皿のような大地で、世界の下部で巨大なゾウが大地を支えてゐる説みたいな？」

「そう。さすがに、頭が柔らかいね。話がてきて助かるわ。人は見え

ている世界、観測できる事実のみを、すべてだと考えてしまいがち」

「そう言いながら四葉は髪を一纏めにしていた組紐を解いた。

「パラレルワールドという考え方とは時間軸や世界の道筋を数直線のように想定して語られたもの。だから、どこかで分岐が生じると、そのから先は平行線。向こうは、向こう。こつちは、こつちで関係ない。だから、宮水三葉と立花瀧は出会うはずがない、まして結婚するなんて、ありえない。でも、出会った。結婚までした。なぜ、出会えたのか？」

四葉は組紐を両手で持ち、ピンと張つて司の目の前に呈示した。

「よく見て。紐は、何本もの糸で構成されてるでしょ」

「あ……ああ……」

糸は複雑に絡み合い、見事な模様を造つて紐になつていて。単なる平行な糸の束であるよりも、組まれて紐になつていて、はるかに強靭で安定していく使いやすい。

「時間軸や世界の道筋は、か細い数直線でも、交わることのないパラレルラインでもないの。むしろ、この組紐ようなもの」

「ひも？」

「一つ一つの世界の可能性は、一本一本の糸のようなもの。その細い糸が組み合わさつて、太い紐、世界の総体になつていくの」

「…………」

「紐だから、もしも一本の糸が切れても、紐のままでいられるの」

四葉が組紐の擦れて切れた部分を見せる。糸の纖維が摩擦で切れてしまい、ほつれているけれど、紐全体としての強靭さは保っている。

「途中のどこかで糸が切れていても、他の糸が補完して、支え合つて力は分散、可能性は分岐して埋まり、世界の総体も補完される。けど……」

四葉が組紐の末端を司に見せる。すべての糸が終わり、そこから先に紐は無い。

「すべての糸が切れてしまつたら、紐も終わってしまう。そして、糸と糸は相互に干渉し合うの。良いことがあれば良い影響を。悪いこと

があれば悪い影響を。どちらも隣接している糸へ影響させてしまう。だから、一本の糸が焼き切れれば、その隣りの糸も焼き切れるかもしれない。さらに、それを放置しておけば、また隣りへ。そんな風に悪影響の連鎖が始まると、世界は終わってしまう。私たち宮水の巫女のような存在は、それを防ぐために存在しているの」

「…………そんな…………」

「7年前に奇跡が起こつた。そんな記憶が町の人たちにあるのも、糸と糸が影響を与え合うから、記憶に搖らぎが生じるの」

「…………だ……だとしても…………だとしてもさ！　どうして、四葉が長く生きられないんだよ?!」

切実な問いに、四葉は申し訳なさそうに、そして明白な諦めをもつて答える。

「私たち宮水の巫女は、この奇跡を行う度に、残りの寿命の半分を失うの」

「つ……半分」

「そう、半分」

四葉の目に恐れは無いけれど、悲しみと淋しさは溢れていた。

「そんな…………いや、でも！　お婆さんは?!　一葉さんは、すごい長生きじゃないか！　長生きする方法だって、あるのかもしれない！」

期待を込めた司の言葉へ、四葉は静かに首を横へ振った。

「お婆ちゃんは一度も飛んでないの。ううん、正確には飛べない。そんな夢を見たことがあるくらいで、幸か不幸か、お婆ちゃんには、その力が、ほとんど無かつた。お姉ちゃんも、それに近くて、よく飛べて3年か、5年。それに本人の能力に対しての自覚も薄いから、口噛み酒を造つたとき、寿命の半分を捧げるのかもしれない、って感じてもいなの。二人とも、ただの比喩だと思って口伝してる。けれど、逆に私やお母さん、お婆ちゃんの母だった初葉さんには、きっと強い自覚と使命感があつた」

「自覚と…使命感……」

「お母さんが亡くなる前に、私にだけ話してくれたこと、聞いたときは

意味がわからなかつたけど、今になつて世界が紐であること、自分が飛べること、命が長くないこと、わかってしまうの。まるで、鳥が飛び方を教わらなくても知つてているように。蟬が求愛を来月へ先送りにしないように。蜉蝣が一日の出会いへ、すべてをかけるように「…………そんな…………そんなの…………あんまりだ。…………ウソだと、言ってくれ」

「ウソや私の誤認なら、どんなにいいか。けど、宮水の巫女に特別な力があることは、他のことでも説明できるの。たとえば、司は酒税法つて知つてる?」

「酒税法? いや、知らない。消費税みたいな?」

「知らないのが普通だよね。普通の高校生は知らない。けど、お姉ちゃんは知つていた。なぜなら、予知夢を見ていたから」

「予知夢?」

「宮水の巫女は、ときおり予知夢をみたり、予知、予感したりして危険を避けることもある。私が小学生の頃、お姉ちゃんへ口噛み酒を商品化したら面白いよ、って言つたときに、当時は高校生だつたお姉ちゃんは即答で酒税法違反だつて答えたの」「そんなことがあつたのか……」

「あの後、私も予知夢をみた。予知夢というより、ちゃんと酒税法に違反しないよう商品化したら、どうなるのかなつて考えて寝たら、一時的には事業は成功するんだけど、急に忙しくなつて商品管理や流通が追いつかなくて、消費者の一人が食中毒で亡くなつてしまふの。もともと、身体の弱い人だつたみたいで口噛み酒のせいじゃないはずなのに、これがキツカケで週刊紙やテレビに面白おかしくゴシップにされて、あげくに私もお姉ちゃんも食品衛生法違反で逮捕される。そんな夢をみたの」

「…………それは、ただの……」

「うん、ただの夢、妄想かもしけない。けど、小学生が、そんな夢を見る? 高校生が酒税法を気にする?」

「…………」

「予知夢で危険を回避するのは、まだ簡単に済む方。大変なのは、悪い

歴史を改変すること。時間を遡つて、歴史の糸を組み直すの。これまでも何度も宮水の巫女は歴史へ干渉してる」

「どうして、それがわかるんだよ？」

「歴史の教科書を読んでもる、なんとなく感じるの。たとえば、南北朝の頃、天皇家が割れて大変だつた時期に楠木正成、新田義貞なんかの主立つた武将が、あつさり敗死してしたり、朝鮮への出兵にこだわつた豊臣秀吉が病死してしたり、徳川慶喜が奇妙なほど、あつさりと新政府軍に恭順したりね」

「……戦乱を治める方向に？」

「そうよ。そして、一番大変だつたと感じるのは、ひいお婆ちゃんの初葉さんの時代と、お母さんの時代」

「ひいお婆さんは時期的には……第二次大戦の頃？」

「正解。あの日本の大敗戦で何人が亡くなつたか覚えてる？」

「たしか300万人から500万人くらいじやなかつたかな。軍民を合わせて」

「それは総人口の何%？」

「人口を1億とすれば、3～5%かな」

途方もない数ではあつたけれど、ただの数として司が計算し四葉は小さく頷いた。

「あの破滅的な敗戦、末期の徹底的な無差別空襲と、さらには原爆。なのに、あえて悪い言い方をすると、たつた3%しか殺されずに済んだ。レーダーもない、高射砲も届かない、ろくな迎撃機もない。そして昼夜いつ空襲があるか、わからない。そんな過酷な状況なのに97%の人々は逃げ、生き延びることができた。私は、これ、絶対ひいお婆ちゃんが何度も何度も、たくさんの人と入れ替わつて、危険を知らせたんだと感じてる」

「…………」

司が見つめる四葉の瞳には、誇大妄想にかられた少女の不安定さなど一欠片もなく、曾祖母の偉業への確信的な誇りが光っていた。そして状況と計算から司も納得していく。

「たしかに…………、あれだけの負け方で……意外なほど少ないのか

も……奇跡的なくらい最小限で……戦後には奇跡の復興を……。でもさ、お母さんの時代は？ その頃は平和だつたはずじやないか？」

「冷戦を忘れたの？」

「冷戦……」

「キューバ危機の前後にも、何度も緊張は高まつたよ。それでも、とうとう今私たちの世界では核戦争は起こらなかつた。きっと、お母さんが寿命を削つて世界を守つてくれたから」

言いながら四葉は涙を零した。会つたことのない初葉のことは、ただ純粋に誇らしく想えて、母親のことは誇らしさよりも悲しみと淋しさが、はるかに強いようで唇と喉も少し震えている。

「核兵器つて本当に最悪」

心から憎むように四葉が言つた。

「……他の兵器とは、……違うのか？」

「言つたでしょ。一本の糸が焼き切れると、隣りの糸へも影響を及ぼして、そうなるかもしれない。今の私たちの世界だつて明日、ミサイルが絶対に飛んでこないつて言える？ 1発のミサイルから始まって、応酬、そして破滅」

「……第一次大戦も……一発の銃弾から始まつてる……」

司が自分たちが享受している平和が薄氷の上に成り立つてているのだと、感じ始めた。四葉は組紐を、もう一度、司へ見せる。

「世界は紐のようなもの。糸と糸は、組み合わさるとき、その外周と内周で少しづれがあつて他の糸と接するよね。だから1990年代の破滅が、2020年代に影響してくる可能性だつて、大いにあるの。だから、放置しておけない」

「四葉……まさか…君も……」

「お母さんは頑張つてくれた。だから、私も頑張るの。そして今回が成功しても、あと2回か3回は、また私に入れ替わりが生じて、頑張らないといけない時が来る予感があるの。だから、私の寿命は、…………きっと、長くない」

「…………そんなのつて……」

話を信じてしまうと、信じたくない事実が重くのしかかってくる。

四葉は瞬きして涙を払つた。

「『めん。…………』んな……早く死んじゃう女で」

「…………四葉……」

「イヤだよね。…………お母さんは、お父さんへ説明してなかつたみたい。でも、私は言つておく。言つてしまふと、相手にしてもらえないなりそうで怖いけど、黙つているのは、悪いよね」

「四葉…………そんな冷静に……け、けど！　でもさ！　その運命は変えられないのか？！　そうだ！　さつき揺らぎって言つたろ？！　過去を変えれば、当然に未来も変わる。そして、揺らぎがあるつて！　その揺らぎで、四葉の運命なり宿命なりを変えられないのか？」

「…………司…………」

四葉が儘く微笑んだ。どうにか助けようとしてくれることを少し嬉しそうに、けれど絶対的な諦めと受容をもつて答える。

「そんな代償なしに、成果だけなんて、ご都合主義は無理よ。揺らぎがあるつていつも、ほんの少し。たとえば、早耶香と沙耶香の名前を入れ替わつてしまつたりとか。もつと古い過去の考え方が少し違つていたら、お母さんが二葉じやなくて双葉になつていたりとか。そんな風に、揺らぎでは因果律の糸は大きくは変わらない。大きく因果を変えるのは宮水の巫女が意図して行うこと。揺らぎは意図しなかつた小さなこと。もつとも、人それぞれの決断や、そのタイミングでも未来は変わるよね。たとえば、進学先とか結婚のタイミング。お姉ちゃんも、あんなに慌ててサヤチンさんの結婚式に合わせて挙式しなければ……もつと落ち着いて交際してからの結婚なら、うまくいつたかもしれない。…………ううん、あの二人は根本的に相性が悪いかな……どつちも片親みたいな家庭環境で、あんまり相手のことに気がつくタイプじやないから…………。だいたい、たまたま、お母さんが入れ替わり相手だつたお父さんと結ばれたからつて自分もそうなるはずつて思い込むなんて……なんてバカな姉」

「…………四葉はジャギさんのこと、どう想つてるんだよ？」

ずっと内心で不安に感じていたことを司が問うと四葉はクスクス

を笑った。

「大丈夫だよ、司。私は、そんなロマンチストでも運命論者でもないもの。何よりジャギさんは2020年頃には、もう初老のはず、おじさんとお爺さんの間くらいだよ」

「そうなのか……」

「そもそも跳躍先の器として、たまたま入れ替わつただけの相手と結婚なんて、どこかの面白宗教の合同結婚式じやあるまいし、恋愛に対する眞面目さが欠如してるよ。恋愛は、そんな偶然と勢いでするようなものじゃないよ」

「……じゃあ、四葉は恋愛を、どう考えてるんだ？」

「この人となら、ちゃんと子供を育てていける、ちゃんとした家庭を築けるつて見極めるための通過点」

「……なるほど……ずいぶん現実的というか……実用的というか

…」

「ごく幼い頃に母を亡くし、なのに父が家を出たという生き立ちのためか、それとも東京のイケメンというキーワードを叫ぶ姉の背中を見て育つたからか、四葉の恋愛観は、ひどく現実的で極めて実用的なものようだった。

「とにかく私とジャギさんが結ばれることは無いよ。けど、私が前世紀の筋書きを変えることで、バタフライ効果のように今の世界も認識しているまま、認識している世界とは違っているかもしねれない。いえ、きっと、そうなる」

「それって、もしかしてボクと四葉のことも……変わるかもしれないのか？　だから、抱いてくれなんて、慌てたようなことを急に言い出してるのか？」

「ううん」

四葉が嬉しそうに微笑んだ。

「それは別の理由よ。私と司のことは、きっと変化しない」

「どうして、そう言い切れるんだよ？」

「だつて」

四葉の細い指先が司の胸に触れて、甘えるようにスースッと撫でた。

「あの司の告白があつたから、今の私と司がいて、私の決断があるからよ。あんなに、しっかりと因果律を成立させてくれたら、変わらないよ、絶対」

「……よかつた。…………でも、じゃあ、どうして？　とても焦った風に、さつき抱いてくれって……別の理由つて何だよ？」

「それはね。……」

四葉が愛おしそうに自分のお腹を撫でた。

「それはね、今日、私と司が結ばれれば、赤ちゃんを授かれる予感があるから。そして今日を逃すと、しばらくチャンスは遠のく予感もあるの」

「つ……赤ちゃん……」

「私の寿命は長くない。だから、早く産んで、少しでも長く、この子と過ごしたいの。一ヶ月でも、一週間でも長く。いつしょにいたい。いてあげたい」

そう言つて四葉が双眸から、とめどなく涙を流すので司も胸が痛くなつた。母親に早く去られたことが、どれほど悲しかつたことか、そして同じことを自分も繰り返すとわかっているので、せめて少しでも早くと想う気持ちを恋人から感じて、司の目頭も熱くなる。

「四葉……」

抱きしめて頷いた。

「わかつたよ。そうしよう」

「ありがとう、司」

お礼を言つて四葉はブラウスも脱いだ。真新しい畳へブラウスとスカートが落ちている。初めて伴侶となる相手に下着姿を晒すと、四葉は恥ずかしさで再び頬を真っ赤に染めた。それが可愛らしくて司は男としての衝動を強く覚える。

「四葉……好きだよ」

「ありがとう、司。私も司が好き」

そつと二人がキスをして、そのキスが深まる。キスが終わると、四葉は顔をますます赤くしながらブライジャーを自分で外し、ショーツも

脱いで裸になつた。四葉の身体から汗の匂いがする。

「ごめん……入れ替わりが始まってから、忙しくて、ずっとお風呂に入れてないの。臭かつたら、ごめんなさい」

「……そんなことないよ。四葉の匂い……いい匂いで好きだ」

四葉の身体は何日も入浴していない様子なのに、不思議な甘い香りがした。まるで兄と前兄嫁が東京で挙げた結婚式に食前酒として出てきた貴腐ワインのような甘く熟れた匂いで、司は強く本能を刺激された。けれど、四葉は一人の女の子としては、とても恥ずかしくて涙ぐんでいる。

「司……ごめんね、ムード無くて……時間が無い予感がするの。……失礼な言い方だけど、早く済ませて。お願ひ」

「……わかったよ、四葉」

「……これから、どうすればいいの？」

積極的ではあつても経験がないので裸になつてしまふと、その先がわからない。学校の保健体育では詳しく手順まで教えてくれないので四葉は無知だつたけれど、司は兄が購入したムー以外の雑誌やDVDを見ているので知つていた。

「じゃあ、四つん這いになつて、お尻をこつちに向けて」「う…………うん……」

言われた通りに実行すると、四葉は羞恥心で背中まで真っ赤に染めた。お互い気持ちの高ぶりは頂点に近いので、もう衝動のまま一つに結ばれる。

「……ハア……ハア……四葉、痛くないか？」

「大丈夫、平気。……恥ずかしくて変になりそうだけど……」

「四葉……本当に妊娠させていいんだね？ 中に出す……つてことで、いい？」

むしろ司の方が、まだ躊躇つている。二人とも高校2年生で初体験には適齢期であるけれど、いきなり妊娠という言葉が出てくると、やはり重い。本当に、それでいいのか、司は迷つていたけれど、四葉は求める。

「いいの。お願ひ、妊娠させて」

「……わ……わかつたよ…」

司が緊張して生睡を飲み込みつつも、ゆっくりと腰を振つていく。

パン！ パン！

突かれて四葉のお尻が音を立てて鳴る。妊娠したいと強く想つている四葉は初体験なのに快感を覚えて息を乱しているうちに、ヨダレまで垂らしていく。けれど、司は緊張して、なかなか最後の衝動まで至れない。

パン！ パン！

そのうちに四葉のスマフォオが鳴つた。

チャラツチャア♪ チヤララタララチャチタラタア♪

四つん這いのまま、四葉はスカートへ手を伸ばしてスマフォオを出している。

「四葉、電話に出るの？」

「うん。……ごめん。ハア…時間が無いの。司は…ハア…続けていて」

「続けるつて……」

「電話が終わつたら、すぐ行かないといけないから。お願ひ、ちゃんと妊娠させて」

「…わ…わかつたよ」

パン！ パン！

「もしもし…ハア…四葉です」

四葉は司と結ばれたまま、電話に出た。

「私だ」

かけてきたのは父の俊樹だつた。

「四葉、電話かまわないか？」

「ええ…ハア…」

四葉は赤く紅潮した顔で、なるべく冷静な声を出しているけれど、強い快感のために、どうしても熱っぽく息を吐いてしまう。

パン！ パン！

司に突かれる度に身体の芯へ快感の波が走り、喘ぎ声を出してしま

いそうになるけれど、それを我慢して父親との会話を続ける。

「四葉、声がおかしいようだが、大丈夫なのか？」

「…大丈夫よ。…用件をお願い。…パパ」

「……」

いつになく優しく甘えた声でパパと言われて、俊樹は自分でも意外なほど嬉しかった。思い返せば、パパと呼ばれることが自体、何年ぶりだろうか、町長になつてから一度も無かつたかもしれない。

「…ハア…ハア…んつ…」

「四葉、息が荒いようだが？」

「パン！ パン！」

「用事があつて走っていたの。ハア…用件を早くお願ひ」

便宜的なウソについて四葉は会話を促した。

「わかった。北斗神拳について調べがついたぞ」

「そう、よかつた。ありがとう、パパ！ ハア…んつ…」

「うむ」

俊樹が嬉しそうに返事している。ありがとう、パパ、という言葉の響きは心地よかつたし、四葉の声には甘えたような湿っぽさがあつて余計に感情を感じる。

「パン！ パン！ パン！」

「…。いつになく四葉の声が優しいな」

「パン！ パン！」

「頼み事を実行してくれた人に対する礼儀よ。ハア…」

「パン！ パン！」

「お前も大人になつたな」

「パン！ パン！」

「ええ。…んつ…」

四葉は身をよじつて鼻声を漏らしながら、スマフォを持つている手の小指を自分で噛んでプルプルと震えた。そうしないと喘ぎ声をあげそうなほど気持ちよくて、頭が真っ白になるような快感が背筋から攻め上つてきて性感の頂点を迎えていた。なのに、緊張している司はなかなか終わってくれない。とくに電話の相手が父親のようなのでは

娘さんを妊娠させてしまって本当にいいのかと、たじろいでいる。

「…ハア…」

やつと四葉は強烈な快感の波が少し静まってくれたので、司を促すように腰をくねらせた。それで萎えかけて迷っていた司が再開する。

パン！ パン！ パン！

「つ…はう…」

再び突かれると、静まっていたはずの快感が、すぐに燃え上がつてしまい、四葉は声を漏らさずにはいられなかつた。もう恥ずかしいという気持ちより、しつかりと司の両手が倒れそうになる四葉の腰をもつて突いてくれるのが本能的に嬉しくて、また快感の頂点が次々と波になつて押し寄せてくる。

「あああ…ハア…」

「…四葉？　どうした？」

「お…お願い、早くして。ハア…ハア…いろいろ時間が無いの。お願  
いつハアつ…ハア」

四葉は父親と恋人へ、早く終わらせてくれるよう懇願した。

「そ、そうだな。まず北斗神拳は暗殺拳だそうだ」

パン！ パン！

【諸説あるが1800年から2000年の歴史があると自称してい  
る】

パン！ パン！

「にせ、んつ…」

また四葉に快感の絶頂が来襲して身もだえする。喘ぎ声を我慢するためには噛んでいる小指にヨダレが流れスマフォも濡らしている。防水仕様のスマフォなので問題はなかつたけれど、電話しながら、もう片方の手で四つん這いを維持するのが苦しくなり、上半身は崩して畳へ伏せると、お尻だけを突き出すような体勢になり、その状態で突かれると奥深くまで司が入ってきて結ばれ、何倍も快感が強くなり、四葉の瞳が蕩けた。

パコン！ パコン！

深く結ばれる二人の立てる音も少し変化した。

「形としては寺院だが、宗教法人格はないようだ。檀家や信徒もおらず、ごく少数の弟子がいるようで、寺宝は巨大な阿吽の像だが、文化庁による年代測定を拒否している。作風から鎌倉期のものと思われるそうだ」

パコン！ パコン！

「ハア…代表者は？ あハア…」

「現在の伝承者は北斗ラオウというらしい」

「ラオウさん…んつ…。在籍者にジャギさんか、ハアハア…ケンシロウさんの名前はある？ ハア…」

パコン！ パコン！

「いや。手元の資料にはないな。本当に息が荒いな。大丈夫なのか？」

「んつ…、うんつ、…大丈夫よ…、つ、続けて」

パコン！ パコン！ パコン！

四葉は突き続けられて、また絶頂する。

「あはつ…んんつ…」

喉の奥から喘ぎ声が溢れてしまい、四葉はヨダレを流してよがつた。

「ハアつ…ハア…」

パコン！ パコン！

「四葉、とても大丈夫とは思えないのだが……息が、それに声も…」

「は、走ってるの。…他にも用事があつて…ハア…急いでハアるから…ハア…んつ…」

パコン！ パコン！

「それなら、あとにしようか？」

「ううん、パパとの…ハア…話も大切だから…ハア…お願ひ…続けて…ハア…」

パコン！ パコン！

「わかつた。えくつと…とても大きな馬を飼育しているらしい。…」

いや、これは、どうでもいいか。なにか、質問はあるか?」

「ハア…ラオウさんは今どこに? ハア…連絡を取る方法はあるの?」

パコン! パコン!

また四葉が絶頂してプルプルと震える。今度は喘ぎ声を漏らすことは我慢したけれど、快感が強烈すぎてオシツコを少し漏らしてしまった。娘の様子がおかしいと思いつつも、俊樹は話を続ける。

「東京の八王子に寺院があり、そこにあるようだ」

「八王子……たしかに、そのあたりなら都心が爆心地なら生き残れて…ハア…ハア…連絡は?」

パコン! パコン!

「直接の連絡は難しいようだ。電話も引かれていない。ただ、八王子にあるトキ鍼灸院が窓口になっているそうだ」

パコン! パコン! パコン! パコン! パコン!

ようやく緊張していた司も快感が高まってきて、より強く早く突いていく。その強さと激しさで四葉は喘ぎ声で父親へ返事する。

「ハア…トキ鍼灸院…んんっ!」

「ううつ! 四葉。出る! 出るよ!」

「うん、お願ひ。んつ、んあああ! あああ!」

喘ぎ声が絶叫になり、四葉は送話口を指先で押さえながら、お尻を快感で激しく痙攣させた。そうして身体の奥で熱い逆りを感じて、これまで妊娠できるという悦びに蕩けた笑顔で涙を零した。

「ハア…ハア…トキ鍼灸院ね…ハア…」

少し息が静まつてから四葉が再確認する。

「…、ああ」

俊樹は冷めた声で返事した。

「ハア…お姉ちゃんの容態は?」

「あのままだ。点滴はしているが、容態は悪い。医師は水分と栄養補給のために鎖骨下静脈からの点滴が必要だと言うのだが、とても太い針を胸のあたりに刺さなければならない。そうすると三葉が精神的ショックで死んでしまうかもしれないとも言っている。だが、どんどん

ん衰弱している。もう時間が残されていない」

「ドクターへりを呼んで」

もう性交が終わったので四葉は冷静な声で言つた。余韻に浸る間もなく司から離れるときショーツをはいている。

「へりを？ だが、どこに搬送する気だ？」

「トキ鍼灸院よ」

「……東京だぞ？」

「東京だからへりなの。私も乗るわ。ラオウさんに会わないといけないから」

強い使命感で動いている四葉の声は強引で有無を言わさない迫力があつた。さつきまでの蕩けた声と違うので俊樹も緊迫して問う。

「それも、また、とても大切なことなのか？」

「ええ、お願ひ。パパもついてくれると助かるわ」

「四葉……今は町議の選挙中で……」

「お願ひよ」

甘えた声をまじえても、断らせない押しの強さがある。お願ひよ、と言いつつ、命令よ、と言つていうような絶対さがあつた。

「ついてきて、パパが必要なの」

「……頼つてくれるのはいいが……」

「お願ひ」

「……わかつた」

俊樹が従うと決断した。

「そうだな、そうするしか、あるまい。お前は宮水の巫女なのだから」

「ありがとう。パパ」

四葉が心から礼を言つた。それを聴いてから、俊樹は父親として告げる。

「ただ、一つだけ言っておく」

「何かしら？」

「父親との電話口でセックスをするな!! お前は行動が二葉に、そつ

くりだ！ いいところも悪いところもなツ！」

「うつ……ごめん……なさい。お父さん」

子供として四葉が謝った。

「わかつたら、町のヘリポートは知っているな？」

「はい。病院の裏駐車場よね？」

「そうだ。すぐに来いよ」

「はい」

電話を終えると四葉が頭を抱える。プリンと可愛らしく、おっぱいが揺れた。

「あくんつ……バレちゃつてたよ。もお、どんな顔して、お父さんに会えばいいの……」

「…………。けどさ、二葉さんに、そつくりだつてことは…………同じこと、してたつてことじやないか？」

「あ、そつか。…………うやつて私も産まれたのかな……ね、五葉。お誕生、おめでとう」

もう名前が決まつていて、産まれてくると確信して、お腹に語りかけている四葉を見ていると、司は大変な一族と関わることになつたのかもしれないと思い、御神体とされている隕石へ視線をやると、あまり深く考えないことにした。

「じゃあ、司、いつてきます」

「ああ、いつてらっしゃい」

司に見送られて、四葉は町の病院まで走り、裏駐車場へ着陸していだドクターへりへ乗り込んだ。すでに三葉と俊樹も乗つていて、すぐに東京へ向けてへりは離陸した。飛騨高山地方と東京の八王子は交通の便は極端に悪いけれど、直線距離にすれば200キロしかなく時速300キロを超えるドクターへりで移動すれば、フライトそのものは40分ほどで四葉たちがトキ鍼灸院に近いビル屋上のヘリポートへ降りたのは14時前だった。そこから、さらに救急車とタクシーに分乗して目的地に到着した。

「ここのがトキ鍼灸院……」

四葉は雑居ビルの地下一階にあるトキ鍼灸院への下り階段を見下

ろして、つぶやいた。八王子の商店街の裏通りにある古ぼけた雑居ビルで雰囲気は良くない。トキ鍼灸院という看板は出ているけれど、手作りのようで木の板にマジックペンで書いてあるし、掲げられているわけではなく、ドアへ釘で打ち付けられているだけだった。四葉が不安になり、それは俊樹にも伝染する。

「四葉。本当に、こんなところで三葉の症状は治るのか？」

「うううっ！ 痛いい！ ひいい痛いい！」

今も三葉は苦しんでいる。担架に寝かされてドクターへりを降りてからは東京都の救急隊員が搬送してくれているけれど、あいかわらず服を着るのも毛布をかけられるのも激痛のために拒むので、せめて四葉と俊樹が左右で毛布を広げて通行人の視線から裸体を隠している。

「迷っていても仕方ないから、とにかく、入つてみる」

三人と救急隊員が中に入ると、受付にいた男性が挨拶してくる。受付をするには不似合いなほど、立派な筋肉をした男性で髪は短く、眉は太い。青年のようにも見えるけれど、もう若くもないようにも見える。

「ようこそ、トキ鍼灸院へ。ご予約の宮水様ですか？」

「そうだ」

俊樹が答えると、受付の男性は習慣的な動作で用紙とペンを出してくる。

「こちらの問診票にご記入いただき、少しお待ちください」

「……。わかった」

俊樹は素直に問診票を受け取ろうとしたけれど、四葉が苛立つて言う。

「急いでるのっ！」

四葉が男性を睨む。

「……」

睨まれて男性は目をそらした。立派な筋肉のわりに気が弱いのか、四葉へ頭を下げた。

「すみません。トキ先生は先客の治療中ですので……」

「……」

四葉は睨んだまま、男性の胸元にある名札を見た。

「……田中ケンシロウ…。あなたはケンシロウさんなの？」

「え？ あ、はい。そうですけど」

「……」

四葉がジッと観察するように見ると、またケンシロウは目をそらした。若い女の子に見つめられて困惑しているような様子だつた。見た感じで年齢は俊樹より少し若いくらいの壮年なのに、若作りのつもりなのか青いジーンズを着ている。受付としての制服は無いようで、私服と思われ、もう何十年も着古したような色合いだつた。四葉が疑わしげに問う。

「本当にケンシロウさんなの？」

「は、はい。ケンシロウですけど……」

「あなた、いい身体してるけど、拳法とか強いの？」

「え？ 拳法？ いえ、そういうことは、ぜんぜんしません。自分は人を殴つたり蹴つたりといったことは嫌いですから。暴力は何も解決しませんよ、お嬢さん」

「……。田中つてことは、北斗ケンシロウではないの？」

「つ…北斗…そ、そ、その話は、トキ先生へ、お願ひします！」

北斗と聴いて、ひどく動搖したケンシロウを四葉は時間の無駄とばかりに押しのける。

「記憶を消されて……もういいわ。あなたに用は無いの。トキさんに会わせてもらう」

「あ、まだ、治療中で…」

引き止めようとしたケンシロウの手を払つて、四葉は治療室へ押し入つた。室内では治療台に白いヒゲの長い眼鏡をかけた老人が座っていて、そばに松葉杖が立てかけてあり、膝を患つている様子だつた。

「その足を治すツボは、これです。たぶん…」

トキが針を老人の膝へ、ドスツと突き刺した。

「ああ!! うぐっ!! ぐああ!!」

「ん？…………ま…まちがつた…かな…。やつぱり、この老人の足は時間がかかる…かな」

老人がガクガクと苦しみ、ビシシツと痙攣しているので、トキの顔に冷や汗が浮かぶ。老人の付き添いだった中年女性が怒った。

「お爺ちゃんに何を?!」

「あ、いえ、その、こ、この世には病に悩む人間が、なん千なん万といふ、わけで、この老人も、その一人というわけですよ」

「ふざけんじやないわよ！ 訴えてやる!! お爺ちゃん、しつかりして！」

女性は痙攣する老人を抱き支えながら出て行つた。ケンシロウが治療室に入つてくる。

「トキ先生、今の方、治療費は、どうしますか？」

「ケンシロウ、お金だけがすべてではないぞ」

「そうですね」

「オレにはな、夢があるんだ。ケンシロウ、お前だけはわかってくれると思う」

「兄さん……ボクだけはわかっていますよ、トキ兄さん」

「ああ、わかつてくれるのは、お前だけだ」

「四葉っ!!」

俊樹も治療室に押し入つて来て怒鳴つた。

「お前は、こんな男たちに三葉を診せる気かっ?!」

「……う…………」

四葉も困る。困っている四葉の肩へ、トキが優しく分厚い手のひらで触れて、澄んだ瞳で見つめてくる。治療家にしては不似合いなほど立派な筋肉をしていて白髪を長髪に伸ばしているのが怪しいけれど、澄んだ瞳と丸太のように太い腕は頼りになりそうな気もする。着ている白衣も胸筋の厚さでピチピチになつていて四葉なら10人でも持ち上げてしまいそうな力強さは感じた。

「お嬢さん、どうか落ち着いて。もう大丈夫です」

「……」

「ご家族を心配する、あなたの気持ち、よく私に伝わりました。どう

か、私に任せください。きっと、治してみせます」

「……トキ先生……」

優しくて穏やかで純粹なトキの瞳に見つめられると、四葉は信じたくなってしまいます。

「と、とりあえず、診てもらおうよ。お父さん。いい人っぽいし……腕前は、……。でも、他に方法もないし……」

「四葉……」

他にあてがないのは俊樹もわかつている。医師は原因不明と首を振るばかりだつた。

「ご安心ください。それで病人は？」

トキが問い、待合室から三葉が担架で運ばれてきた。

「痛いいいい！ひいーーーっ！お願いいい！そつと、そつと、おろしてええ！」

「…………これは……」

トキが一目見て驚き、それから考え込む。

「これは、…………え、つと…………これは、何だつたか…………腰椎の…………いや、胸椎の……ツボのような…………ツボでないような…………」

何かを思い出そうとして頭を絞つている。

「ん、…………なんだつたか…………」

「…………」「…………」

四葉と俊樹、そして三葉が不安になつてトキを見つめる。その視線を感じてトキは取り繕うように自分の胸を拳で叩いた。

「大丈夫、大丈夫ですよ。この身体を治すツボは、これだ！」

グリッ……

トキは三葉の両こめかみを左右から両の親指で強く押した。

「イキヤああ!!!!ひで

ぶううううううううううううううううううううううう!!!!」

ほんの少し触れられるだけでも激痛が走つて身悶えする状態なのに、グリグリと親指でこめかみを押されて三葉は聞いたことのないような悲鳴をあげて、のたうち回つた。涙とおしつこを噴き出すように流している。トキは首を傾げて指を離した。

「うむ……違つたか……では、これだ！」

トキは三葉の両わき腹に人差し指と中指を突き刺すように押しつけた。

「あべしいいいいいいいいいいい!!!」

また、三葉は奇声をあげて苦しんでいる。

「では、これかも！」

トキは三葉の左肩に人差し指を突き立てた。

「ううっ！ うわっ!! ひい!!! いつ、いつ！ いたああいい!!  
やめてえええ！ くだけそおなのおおお!!」

三葉の左手は本人の意思に関係ないようにグー・パーを繰り返している。

「あいいぎあが!! あがががくく!! たわばあああああああ!!  
「これも違つたのか……」

「貴様つ!!」

俊樹がトキの胸倉をつかむ。

「これの、どこが治療だ?!」

「落ち着いてください。大丈夫、安心して」

乱暴に胸倉をつかまれてもトキの筋肉と体格は、ほぼ同じ年齢に見える俊樹より、はるかに大きいので微動だにしない。優しく微笑み返して、娘を心配する父親の瞳をまっすぐに見つめた。

「どうか、落ち着いてください。お父さん。私には、イメージがある。この病は、ほんの一つ、いいところを押せば、きっと、たちどころに治る。そんなイメージがあるのでですよ。今ね、そこを探っているのです。ええ、お父さんが見ていてつらいように、私もつらい。ですが、一番苦しいのは娘さんです」

「ハアひつ！ ハアひつ！」

三葉はガタガタと震えて変な呼吸をしている。

「三葉……こんなに苦しんで……」

俊樹がトキから手を離した。トキが新たな閃きをもつ。

「そうだ。やはり指圧ではなく、針。しつかりと皮膚にズブズブと入れた方がよいイメージがあります。しかも、あなた方は運がいい。

ちょうど、鉄工所に頼んでおいた特注の針が仕上がっているのです。

ケンシロウ、あれを」

「はい、兄さん」

すぐにケンシロウがステンレスバッドに入った大きな針をもつてきた。それはトキの指と同じ形、同じ太さをしている。

「やはりね、人間の指では鋼鉄のように人の皮膚をズブズブと突けない。どんなに鍛えてみても人間の指は鋼鉄のようにはならない。そこで私は考えた、このような針を造つて突けば、きっと、あらゆる病が治る」

「ハアひつ……ハアひつ……」

大きな針を見た三葉は逃げようとしない。むしろ、涙目で愛おしそうに針を見上げた。

「ハアひつ……お願い……もう……ハアひつ……早く……」

「お姉ちゃん……」

四葉は姉の表情で感じた。もう姉は死にたがっている、殺されたいと願っている。この苦痛から解放されるなら、死こそ甘美な結末として、この針を刺してもらえばショック死することが感じられても、逃げるどころか望んでいる。針を見つめる姉の目は、セックス好きの女が長い長い愛撫のすえに、ようやく男根を向けられたときのような、待ちわびた好色的な瞳になつていて。

「早く……刺して……」

「あなたも、わかるのですね。これが効くと」

トキが心得たとばかりに頷く。

「…お願ひ…、…早く…」

「お姉ちゃん……」

このままで危ないのでないか、四葉は不安になる。けれどもトキは自信満々に微笑して針を振り上げた。

「さあ、いきますよ。むんつ！」

「待つて!!」

四葉が叫ぶのと、俊樹が手を出すのは同時だつた。

ズブつ！

トキが三葉の胸を突こうとしていた鋼鉄製の指のように太い針は、俊樹の手のひらを突き刺していた。

「ぐつ…」

「な…なぜ…」

トキが悲しそうに俊樹を見つめる。俊樹は娘を守るために一喝する。

「これ以上、貴様にッ!! 指一本たりとも娘は触らせん!!」

「ハアひつ…お父さん…ハアひつ…、邪魔しないで…早く…早く殺してよ!!」

「お姉ちゃん…お父さん…あつ?!」

不意に四葉は治療室の壁にかかっている鍼灸師の免許証が目に入った。そこには氏名が表示されている。

「山田トキ…つ! 私は、大変な考え方違いをしていたわ!!」

「お嬢さん、どうかしたのですか」

「あなたは北斗トキではない!!」

「え? あ、はい。山田トキですが、それが何か?」

「北斗は?! 北斗の人は、どこに?!」

「北斗…」

トキとケンシロウが困った顔をする。

「北斗に会わせて! ラオウさんに!!」

「はて、何のことやら…」

「あ、そうか。紹介料! お父さん!」

四葉はへりで移動中で読んだ北斗神拳に関する資料の中にあつた紹介料のことを思い出した。手を刺されている俊樹が痛みに耐えつつ、四葉へ問う。

「その話は、三葉の後ではないのか?」

「私が考え違いをしていたの。鍼灸院なんていうから期待してしまつたけど、この人たちは北斗であつて北斗でないの。もう記憶を失つているのよ!」

「四葉……お前の言うことは、なにがなんだか……まあ、いい。ここまできたら、お前を信じよう」

俊樹は負傷した手でスーツの内ポケットから百万円の札束を出した。

「これで、北斗に会いたい」

「…………」

トキの表情が変わる。今まで優しい瞳をしていたトキが冷たく悲しそうな目をして直立不動で構えた。

すーーーーっ…

仏を拝むように両手を合掌して、俊樹が差し出す百万円を受け取ると、流れるような鮮やかな動作で白衣のポケットに入れた。

「たしかに、頂戴いたしました。これより北斗へと、ご案内いたします。救急隊員の方は、お帰りください。担架は私とケンシロウが持ちます」

東京都の職員を帰して、トキとケンシロウが三葉をのせた担架をもち、トキ鍼灸院の玄関には休憩中の札がかけられて、再び移動する。商店街を通ると、大都会らしい強引な客引きがされていた。

「ただいま、アミバ整骨院ではキャンペーン中です！　一回5万円の小顎矯正コースが、なんと回数券を購入すれば一回あたり2980円に！　さらに、天才治療家アミバ先生考案の「脚矯正サポーター」をお友達を紹介するとキャッシュバックキャンペーン中ですよ！　頑張る君を応援したい、レツゴーアミバ！」

怪しいものが多いので四葉たちも、あまり日立たずに移動できる。トキとケンシロウは、すぐに裏通りへ入り、何度も路地を曲がつて人間の方向感覚が不確かになつてくる頃、大きな寺院へ四葉たちを導いた。

「こちらです」  
「…………」

四葉と俊樹が無言で頷き、トキが付け加える。  
「ご契約の成立にかかわらず紹介料は返却いたしませんので、あしからず、ご了承ください」

五人が寺院に入ると、巨大な阿吽の像があり、その足下に一人の大きな男がいた。男は剃髪した僧侶のような頭で、僧衣を着ている。

「あなたが北斗ラオウさんですね？」

四葉が問うと、ラオウは頷いた。

「いかにも」

「私は宮水四葉、大切な用件が二つあり、ここへ来ました」

四葉は姉を指して頼む。

「まず、姉の三葉を治していただきたいのです」

「ほオ、これは…」

ラオウは三葉の様子を見ると、すぐに指を三本、立てた。

「3000万」

「……お父さん、払える？」

四葉が不安そうに父を振り返る。

「払えなくは、ないが……本当に、それで三葉は治るんだろうな?!」「我にはできる。そして、我以外のこの世の誰にもできぬ」

「…………わかつた。支払う」

「よからう」

ラオウは三葉に近づくと、その裸体に軽く指先で触れた。

「つ……痛くない……痛くない！　ど、どうして?!」

ずっと苦しんでいた三葉が立ち上がり、自分の手を見て不思議がつてている。そして歓喜に満ちた顔になつた。

「治つてる！　私、もう、どこも痛くないの！　お父さん！」

喜びのあまりプリンプリンと、おっぱいを揺らしている。

「三葉……よかつた」

俊樹と三葉は抱き合い、そしてスーツの上着を脱ぐと娘の裸体に着せてやつた。四葉が礼を言う。

「ありがとうございます。ラオウさん、やはり、あなたが正統継承者なのですね」

「して今ひとつ用件とは？」

「私は北斗神拳の奥義を教えてください。今から日没までに可能などけ」

「愚かな小娘だ」

もう話は終わつたとばかりに、ラオウは踵を返して背中を向けると

歩み去ろうとする。その背に四葉が問う。

「ラオウさん、ジャギさんという方を、ご存じですか？」

「ぬつ?!」

去りかけていたラオウが振り返って四葉を睨んでくる。

「小娘、その名を、どこで知った?!」

咆吼といつていいような詰問でラオウの背中から爆炎のような闘氣が噴出し、奔流となつて四葉を押し流そうとする。

「ひつ…」

「ううつ…」

その余波を受けただけの三葉と俊樹が気圧され、少し離れていたトキとケンシロウも数歩さがつた。それなのに、四葉は動じることなくラオウを見据えていられた。ラオウが驚き、目を見開く。

「我が闘氣を受けて微動だにせぬとは……小娘、貴様は何者だっ?!」

「最初に名乗りました。宮水四葉、宮水神社の巫女です」

「ぬう……では、宮水、どこでジャギの名を知つた?!」返答次第では、

「ここから生きて帰れぬと思え!!」

「私は巫女として時間を飛ぶことができます。そして、1990年代後半の世界にいるジャギさんと心と体を入れ替わつたのです」

「世迷い言を!! 捻り殺してくれる!!」

ラオウの右手が四葉の顔に迫るけれど、寸止めだった。基本的に女の子へ暴力は振るえないタイプのようで威嚇だけに終わっている。その威嚇に四葉は動じていない。

「たしかに、ものすごい闘氣。でも、あの世界にいたケンシロウさんに比べても、ジャギさんに比べても、凄味も殺氣も乏しいです」

「おのれエ」

ラオウが大きな手のひらで四葉の身体を握り込むと、持ち上げて顔を近づけて睨む。

「……」

二人の目と目が合い、瞳を見つめ合う。

「小娘……貴様は半分、神か？ 天の者か？」

「そうなのかもしません。使命を帯びているときは  
「バカなことを……もう一度、問う。ジャギの名、どこで知つた?!」  
「この2020年の私と、1990年代後半のジャギさんの心と体が、  
何度も入れ替わったからです。そして、こことは歴史の流れが違う1  
990年代の世界でジャギさんはケンシロウさんと激しく争つてい  
ました」

「ジャギとケンシロウが……」

ラオウがチラリと今ここにいるケンシロウを見る。見られたケン  
シロウはありえないとばかりにブンブンと首を横に振つてゐる。そ  
の様子から、とても人と争うような性格ではないと伝わってきた。再  
びラオウの視線が四葉を見据えると、四葉は真っ直ぐに見返した。  
「お疑いならば、逆に問います。さきほどまでの私の姉、三葉の症状は  
北斗神拳によるものではないですか？」

「むつ……」

「あれはジャギさんが私の身体に宿つておられたとき、ほんの指先一  
つで突いただけで、あのようになつたそうです」

「むうう……。あれは、確かに今は我しか知らぬはずの秘孔……」

ラオウが呻り、四葉を床へおろして手を離した。四葉が自分のペー  
スを掴めたと思い、さらに問う。

「もう一つ問います。どうか、教えてください。ジャギさんは今どこ  
におられますか？」

「……。おらぬ」

「どこへ行かれたのですか？」

「この世のどこにも、おらぬ」

ラオウは指を一本立て、天を突いた。

「ジャギは天にある」

「天……それは、……まさか……」

「あやつは我が殺した」

そう答えたラオウの瞳に深い悲しみの色が浮かんだ。

「ジャギ……その男の名は、かつて弟と呼んだ男」

「…………」

「あの男は北斗神拳継承の掟により、北斗神拳に関する記憶を奪うことに同意するか、拳をつぶすか、いずれにも抵抗しおつたゆえ、我と戦い、我が殺した」

「つ……そんなつ……ジャギさんが死んでいるなんて……」

四葉がショックを受けて、膝をついた。ひどく動搖し困惑していた。何度も入れ替わった相手が今現在は死んでいるというのは、やはりショックが大きかつたし、何よりも四葉が考えていた行動計画も狂ってしまう。

「……ジャギさんが……死んで……」

「ジャギの死が悲しいか？　ならば、我を憎め」

「……」

憎めと言われて四葉はラオウへ強い意志を込めた視線を向けたけれど、そこには憎悪は一欠片も無かつた。

「ぬう……お前の目は、何を見ている……何を見てきた？」

「私は憎しみの連鎖が、より大きな憎しみの呪縛しか産まないことを、そして破滅しかけた世界を、さんざんに見せられて、ここに来ているのです」

「では、どうする？」

「…………。やはり予定通り、私に北斗神拳を教えてください」

「バカなことを。そんな細腕に何ができる？　お前の意志の強さは認めよう、だが、その身体は小娘そのもの」

「言つたはずです。私にはジャギさんになる時間もあるのです。そのとき、北斗神拳を知つていれば、取れる選択肢は飛躍的に増えるはず」

「ジャギ……あの男は我が倒した中で最強の男であつた……」

「ラオウが遠い目をして昔のことを思い出している。」

「後にも先にも、あれほどの男はおらなんだ」

世紀末に継承者争いをしてからは、ときおりある暗殺の依頼を受けていたものの、たいていは鍛え上げた拳法家などが相手ではなく、力を出し切るような戦闘は経験していなかつた。

「あのジャギに、お前がなるというのか……信じがたい。……だが、

お前の目はウソを言つていない」

「お願いします」

「しかも日没までにと言いおつたな」

「はい」

「一つだけ方法がある。秘孔、心靈台。これを突けば、その後に我が教授する技、すべて一度で習得できよう。ただし、その習得した技は3日で消え、その後にお前の身体は今の半分しか筋力が残らぬ、歩くことはできても二度と戦うことなどできぬ身体になるであろう」

「……」

「しかも、心靈台を突いた直後、全身を激痛が襲う。その苦痛で、その場で発狂し死ぬやもしれん。それでも、やる覚悟はあるか？　お前の姉が受けっていた苦痛を上回る苦痛が少なくとも1時間は続き、それは全身を切り刻まれるような痛みだ」

「……3日……」

四葉が悩み、そして決断した。

「それでも、かまいません。お願いします」

「四葉っ！」

俊樹と三葉が驚き、思い止まるように叫ぶ。

「四葉！　冷静に判断しなさい！」

「そうよ！　私の痛みを上回るつて！　そんなの耐えられるわけない！　あれば、どんな地獄だつたか！　いつそ殺してつて思うような痛みだつたのよ！」

「お父さん、お姉ちゃん」

父と姉が止めてくるのは予想していたので、四葉は振り返つて微笑む。

「どのみち私は宮水の巫女として半分は捧げてるの。筋力の半分くらい、おまけみたいなものよ。赤ちゃんを抱っこする力くらい残るでしょう」

四葉がラオウを見上げて頼む。

「お願ひします。今すぐに」

「よい覚悟だ。では…」

ラオウが、また指を3本、天に向けて立てた。

「3億」

「つ…………、…………」

予想より2桁ほど大きかつた。四葉が不安そうに父親を振り返る。

「……お父さん……払える?」

多選の町長として娘のために3000万円を決断してくれただけでも立派だと尊敬しているけれど、さすがに3億円は無理な気がする。四葉の不安げな視線を受けて、俊樹も呻いた。

「3億とは…………また…………しかも、3日のことに……」

正直に無理だとは言わず俊樹が悩む素振りを見せると、ラオウが足元を見てくる。

「北斗神拳の歴史は2000年、その奥義を知るに、わずか3億。おしぐば、去るがよい」

「…………わずか3億ですか……」

俊樹が自分のこめかみへ指先をあてトントンと触れながら言う。

「たしかに、わずか3億といえば3億。わが町の年間予算程度だ。高速道路建設費で言えば、地価や難工事箇所によつては3メートルに満たないでしよう。ところで、北斗さん」

まるで世間話をするような穏やかさと平静さで俊樹が、逆にラオウの足元を見返していく。

「お飼いになつてる老馬のお加減は、いかがですか？　ずいぶんと高齢で、しかも癌を患つてゐる。獣医への支払いも大変でしょうね」

「ぬう……」

「それに、お義父さんのリュウケンさんも有料老人ホームに入つておられ、月に36万ほど、ご入り用のようですね」

「貴様、どこで、それを知りおつた……」

「いやはや、ちょっとした世間話ですよ、世間話」

俊樹は調べさせた資料にあつた内容からラオウの足元を見定めていく。経験豊富な町長として交渉ことは日常茶飯事で、相手の足元を

見る眼力は拳法家を、はるかに凌駕していた。

「何より、この阿吽の像。そろそろ大規模な修繕が必要ですね。わざか3億では、こういった立派な文化財の修繕は、とてもとても」

俊樹が元学者らしい觀察眼で北斗家に伝わる巨大な阿吽の像を見上げて微笑む。ラオウが眉をピクリと動かした。

「貴様、何が言いたい？」

「ご商売の方はいかがですか。暗殺業ですよね、最近では受注が減っているようで。平和な時代だ、需要そのものが減っている」

「……」

「たまに暗殺の注文を考える人がおられても、バイクと拳銃で、さつさと済ませる業者に仕事を取られたりね」

「我を愚弄するかっ！」

ラオウが一喝したけれど、俊樹は受け流して言い募る。

「いえいえ、立派なお仕事だと思いますよ。素手による暗殺。伝統技能の継承もまた大切なことです。ただ、少し将来性というか、持続可能な事業展開や施設の維持、ご家族の介護といった面から、私にも協力できることがあるのではないか、と愚考した次第ですよ」

俊樹が畳み掛けに入る。

「たとえば、ですね。有料老人ホーム、これを特別養護老人施設へ変更するだけでも、月々の支払いは3分の1で済みます。ただ、いかんせん待機者が多くて東京都では1施設あたり360人待ちだそうです。ひるがえって、うちの町でなら、私の顔もあつて、なんとでもなる」

「……」

「うちの町はね、山奥ですが空気はきれいだ。土地もある。長年、連れ添つてこられた愛馬にも、最後の時間を過ごしてもらうのに、広い牧場があれば、どんなに喜ぶことでしょう」

「……」

ラオウの脳裏に田舎の牧場を穩やかに歩く黒王の姿と、もう何年も毎月支払っている有料老人ホームからの請求書が去來した。俊樹の口撃は続く。

「この阿吽の像、とても立派ですね。ですが、以前に文化庁から年代測

定を打診されたとき、先代のリュウケンさんが断つておられる。これが、500年以上前のものであれば修繕に補助金をつけることが可能になりますが、そういうふた補助金も順番待ちという事情もあり、なかなか。だが、私はね、町長となる前は民俗学者なんかをやつていましね。その関係もあって文化庁に顔もきく、修繕の順番を決める分科会に参加している学識経験者には友人や後輩もいます。また、多選のおかげで全国市町村長会で副議長も務めております」

「北斗神拳の歴史は2000年っ！」

ラオウが反撃したけれど、すでに俊樹は見切っている。

「はい、この阿吽の像、見たところ鎌倉期であることは確実でしょう」

「一子相伝！ 我以外に、なせぬ！」

ラオウの言の葉は、俊樹の勢いを止めることはできなかつた。

「そうですね。うちの娘は北斗神拳へ相當に、こだわつてゐるようだ。ですが、父親の私としては、ここは止めたい。だつて、そうでしよう？ こんなに可愛い娘だ。その娘が筋力が半分になる？ なのに、効果は、たつた3日？ その前に全身を切り刻まれ発狂し死ぬような痛み？ とんでもない話ですよ」

「……」

「それには、自分の娘だから、わかるんですが、この子はジャギさんが亡くなつていたことで、頭の中で考えていた計画が狂つてゐる。いわゆる計算違いというやつですな。なのに、とりあえず北斗神拳を身につけておけば、なんとかなるかもしれない、という当初の計画を捨てきれず、なのに先が見えない、いわばノープランな状態で突き進もうとしている。そんな顔をしています」

「う…お父さん…」

四葉は痛いところを突かれて、よろめいた。

「この子は、よく母親に似ている。だから、わかるんです。きっと、どう転んでも何とかするでしよう。だから、私個人としては3億も投じて娘に苦しい想いはさせたくない。ですが、娘が望むことであれば、かなえてやりたい気持ちもあります」

「貴様は何が言いたい?! 話が長いぞ!!」

俊樹からの言葉の拳が百烈してくるのに耐えかね、ラオウは不利なところで結論を急いだ。俊樹は勝利を確信したが、ほくそ笑んだりせず、誠実な顔で頼む。

「簡単な提案ですよ。3億ではなく、リュウケンさんの特養への入所、愛馬への牧場を亡くなるまで提供すること、阿吽の像の修繕を斡旋すること、この3つで手を打つていただけませんか。でなければ、この話はなかつたことに」

「…………ぬうう…………」

ラオウが呻りつつ考え、問うような目でトキを見た。

「ラオウ兄さん、いい話ですよ」

トキが頷いた。

「そうか。トキがそう言うのであれば、いいだろう」

実弟の意見を長兄が採用するという形でメンツも立て、ラオウは了承した。

「では、始める。背中を向けよ」

「はい」

返事をして背中を向けた四葉のブラウスをラオウが剥ぎ取つて投げ捨てた。ラオウへ背中を向けているので、俊樹たちには乳首を向けている。次女の乳首に俊樹は反応しなかつたけれど、トキは目を伏せ、ケンシロウも赤面して目をそらせた。

「お父さん、お姉ちゃん、外で待つていて。大丈夫、きっと耐えてみせる」

「……わかった。行こう、三葉」

「四葉……頑張つて。四葉なら、きっと…」

覚悟を決めている四葉を残して、二葉の頃から、こうなつたら引っ越しのがつかない一族だと思い知っている俊樹と、やつと地獄の苦痛から解放されて、ほんの少しだけ状況がわかりかけてきた三葉が建物を出る。扉を閉める寸前、ラオウと四葉の声が響いてきた。

「心靈台!!」

「くうつ!! うわあつ!! ああわあ!! はあつくう!! うわわつ!!

あ!! きやあつ!! はあつ!! うあつひああ!! わあく!! あ  
かわわ!! んんんくくく!!」

四葉の小さな背中がラオウの太い指で突かれると、それだけで死ぬのではないかというような様子だつたし、突かれた四葉は直後から激痛を感じているようで、のたうち回つて苦しみ悲鳴をあげている。三葉が心配で振り返った。

「四葉……」

さきほどまで同じような苦痛を味わつていただけに強く同情している。俊樹が三葉の肩を押した。

「ここで見えていても仕方ない。ともかく三葉の服を買いに行こう。四葉のブラウスも破られてしまつたからな」

そう言いながら俊樹はスーツのズボンを脱いだ。

「これを着ていなさい」

「ありがとうございます、お父さん。ごめんなさい、そんなカツコにさせて」

感謝してズボンを受け取る。やはり全裸に上着だけでは街を歩けないので父親の配慮はありがたいけれど、代わりに俊樹は下半身が白いブリーフだけになつてしまふのが申し訳ない。俊樹は肩をすくめた。

「娘が、つらい想いをするよりは、ずっといい」

「お父さん……本当に、ありがとうございます」

三葉は男物のズボンをはいて、上着の前も胸元が見えないように閉じると、寺院を出て最寄りの商店で、とりあえずの衣服を買ってもらつた。丸4日間も絶食だつた上に激しい苦痛に呵まれて喘ぎ続けたためか、ぽつちやりと太つていたウエストが高校生だつた頃のように、すつきりと細く戻つていたのは、ものすごく嬉しかつたけれど、今は喜びにひたつている場合ではないので、四葉にもブラウスを買って寺院へ戻つた。途中で三葉は俊樹から、四葉がジャギと入れ替わりながら何かを進めていくこと、今の状況を聴いて知つた。そして日没まで建物の外で待つていると、扉が開き、四葉とラオウが出てきた。

「四葉っ! 大丈夫なの?!」

「うん」

四葉は微笑み、手の甲を見せた。

「爪が3枚ほど飛んじゃつたけどね。そのくらいで済んだよ」

「四葉……」

「四葉、まず服を着なさい。買っておいたから」

ずっと上半身裸で北斗神拳の奥義を学んでいたのかと思うと、俊樹はラオウの配慮の無さを残念に思つたけれど、顔には出さない。四葉はブラウスを着て、ラオウに礼を言う。

「ありがとうございました。ラオウ先生」

「うむ」

頷いて、初めての女弟子を送り出しつつ、ラオウは付け加える。

「3000万と、さきほどの件だが」

「えっと……お父さん、大丈夫?」

「お金は1週間以内に、ご指定の口座へ振り込みます。さきほどの件も進めますが、こちらと連絡のつく電話番号を教えていただけますか?」

「ならば、トキ鍼灸院へ電話するがよい」

「わかりました。今後とも宜しくお願ひします」

多選の町長らしく事後処理を進め、三人は寺院を出た。東京の雑踏の中で俊樹が四葉へ問う。

「四葉、これから、どうすればいい?」

「糸守へ帰ります」

「わかった。今からだと、明日の朝になるな」

俊樹が腕時計を見て言うと、四葉の顔色が凍りついた。

「どうしてつ?! 今日中に帰らないと困るの!!」

「そう言われても、ここは八王子だぞ」

「だつて来るときは40分だつたのに!」

「それはヘリだつたからだ。電車なら東京駅に出てから新幹線で名古屋、もしくは山梨県の方から帰るかだが、そちらは列車の連絡が悪い。どちらにしても糸守に着くのは明日の朝になるな」

「そ…それじゃダメなの! 今日中に! 夜の12時までに! 糸守

へ帰りたいの！ ラオウ先生のところにいるのを日没までにしたのは、帰りの時間を考えてだつたのに……そんなに糸守まで時間がかかるなんて……お願い！ なんとかして！ お父さん！」

「そう言われても、うちの町が、どれだけ田舎か知つているだろう。名

古屋からタクシーを飛ばしても……無理だ。12時は過ぎる」

町長として東京へ陳情のために出向くことは多いので、どれだけ移動時間がかかるかは熟知している俊樹が言うと、四葉が絶望的な顔色になる。

「…………そんな……」

「お父さん、なんとかしてあげられない？ たぶん、入れ替わり現象にとつて糸守の地にいることは重要な要素だと思うの」

三葉が妹をかばうように言う。

「しかも、四葉は私みたいな不定期じやなくて、確實に一日で入れ替わつてるつてことみたいだから、また今夜、入れ替わるのよ」

経験のある三葉が真剣に言うと、俊樹も悩む。

「うーむ…………いや…………しかしだ。……」

俊樹はスマフォを操作して乗り継ぎ検索したけれど、どのルートでも到着は明日になる。

「いつそ、ここからタクシーで……いや、間に合わない。むしろ小松空港か、富山までフライトして……それでも最後の山道が……糸守まで走ってくれるタクシーも、なかなか……」

「へりはつ?!」

四葉と三葉が同時に問うたけれど、俊樹は首を横に振る。

「ドクターへりは帰してしまったよ。もう誰も病気ではないのだ。いくら私でも公私混同にすぎる。消防の方でも拒否するだろう」

「そんな……」

また四葉が絶望するけれど、三葉は社会人だつたので再提案する知識があつた。

「民間のへりをチャーターレンタルすればいいじゃない！ 東京なら航空会社いっぱいあるはず！」

「それも難しい。費用は80万ほどだろうが、そもそも糸守のへり

ポートはドクターへりなどの緊急公務用だ。民需での離着陸は、よほどでないと……、それだけ大事なことなのか？」四葉

「お願いします、お父さん」

すがりつくように娘から頼まれると、俊樹はノーと言えなかつた。すぐに電話をかけ、ヘリを予約した。

「かなり無理を言つて予約したよ。今夜は東京で花火があるらしい。おかげで夜間飛行可能なヘリは出払うのだが、花火が終われば、戻つてくる。それで帰れるよ。料金は150万と言われたがな」

「ありがとう！　お父さん！」

四葉に抱きつかれると、俊樹は二葉の面影と重なつて娘が見え、そつと黒髪の頭を撫でた。

「本当に、お前らは無茶ばかり……。おい？」

抱きついていた四葉がズルズルと崩れてくるので俊樹は慌てて抱き留める。

「大丈夫か？　四葉、どうした？」

「四葉、どうしたの？」

三葉まで心配すると、四葉は力なく恥ずかしそうに言つた。

「……めんなさい……目まいが……お腹が空いて……力がない……朝から何も食べてなくて……やつと、一段落して安心したら急に空腹が……」

「まつたく。本当に一葉のようだ……」

俊樹は四葉を抱き支えながら提案する。

「どうせ、花火が終わるまでは東京にいるんだ。しつかりした食事を摑りなさい。四葉が食べないことを、お義母さんも心配してました。三葉も、ずっと食べていなかつたろう。どこか、行きたい店はないか？」

？

「それなら私は！　IL G I A R D I N O D E L L E P A R O L E に行きたい！」

「えく……あそこお……」

言の葉の庭というイタリア語を、ずっと覚えていた四葉が即答すると、姉は行きたく無さそうな顔になる。

「あそこ、美味しいけど……」

三葉は入れ替わっていた時にバイトしていたこともあるし、東京で暮らしているときにも何度も利用したことがあるイタリアンレストランへ、離婚した今となつては行きたくない気持ちだつた。潰られて四葉が拗ねたように言う。

「お姉ちゃんが食べた料理とか、デザートの写真はインスタで何度も見せてもらつたけど、結局、私は一回も行つてないし食べてないもん！」

「うつ、うくん……」

東京生活の華やかな側面だけはSNSなどにアップして披露していたので、それを妹が羨ましいと感じていることに責任を感じなくもない。俊樹が店の位置を調べて領いた。

「利用するヘリポートにも、ごく近い。三葉、それほどイヤか？」

「わかりました。ご案内しますよ！」

三葉が諦めて予約を入れ、タクシーで移動してレストランで食事にする。四葉は朝から何も食べていなかつたし、三葉は4日間も絶食だつたので、行きたくないと言つていたけれど、いざ食べ始めると黙々と食べている。

「少し電話してくるよ」

俊樹は席を外して喫煙所で電話をかける。町議選の最中で連絡すべきことは多いし、夜中に糸守町の緊急用ヘリポートを使うことの調整もしなければいけない。娘たちに心配をかけないように、それらの連絡をしていると、このレストランのオーナーらしき男性もタバコを吸いながら電話していた。

「ごめん、ミキちゃん、やっぱ行けそうにないわ」

「ギリギリまで私を待たせておいて、ドタキヤンする気なの？」

オーナーのスマフォから藤井ミキの声が響いてくるけれど、俊樹にとつては長女の結婚式で一度だけ挨拶した間柄でしかないので、もう忘れていて気づきもしない。むしろ今は選挙戦の差配をツイッターなども駆使して黙々と進めている。オーナーが大きくタバコの煙を吐き出した。

「ごめん。ホント、ごめん。急に店へ奥さんが来ちゃつてさ。抜けれないんだわ」

「ふーん……待つてるうちに、ワイン空けちゃつたのよ」

「その支払い、オレのカードでしといてよ。ね？　もう一本いつてもいいからさ」

「花火は、どうするのよ？　ヘリをチャーターしてくれたんでしょ？」

「それも難しいんだよ。奥さんが何か疑つてる感じでさ。もうマジ抜けれないわ」

「……。楽しみにしてたのになあ。横から花火を観るの」

「今からじやキャンセルしても、キャンセル料100%だからさ。ミニちゃんだけでも観てきてよ。ね？」

「女一人で乗れっていうの？」

「いつそ旦那でも呼べばいいよ。どうせ、二人分を払つてあるから」「司にヘリの代金のこと、どう説明するのよ？　たしか58万とか言つてたよね。花火の日つて特別料金でさ」

「懸賞に当たつたとかウソつけばいいよ。まあ、ボクの心中ではミニちゃんを、ときどき借りてるレンタル料みたいな気持ちで払つておくからさ。たまには夫婦で楽しんでみたら？」

「当日、いきなり？　司に今朝、何も言つてなかつたのに……。つていうかさ、そういうウソからバレしていくのよ。奥さんに疑われてるのも結局そのへんの甘さなんぢやないの」

「あははは！　痛いとこつくね。じやあ、2号君は？　不倫相手の2号君いるんでしょ。えへつと、あの…タチだか、タキだか、なんとか君」

「タキ君よ。私に2号君がいること、勘づいてたんだ？」

「そのへんは、ぬかりないさ」

「ふーん……タキ、あいつは今夜、ヒマかなあ……当日の今で来られるかなあ…」

「きつとヒマだよ」

「なんでわかるの？」

「だつて先週、うちに面接に来たから。なんか再就職うまくいってないらしくて。もう一回、ここで働かせてくれないかって。ランチタイムだけ、ディナータイムだけのバイトでもいいからって」

「雇つたの？」

「まさか。うちは出戻りはお断りって言つたよ。まあ、ホントは彼つて使いやすい方だつたから欲しかつたけどさ。ミキちゃんと穴兄弟なんだから、発覚したとき店でトラブられてもイヤだし」

「賢明な判断ね。まあ、いいわ。今夜は許してあげる。不倫は、お互い様だし」

通話を終えると、オーナーは舌打ちした。

「ちつ……だんだん図に乗つてきたな。セフレ風情が。もう歳だし切り時かな。先週、可愛い女子大生も雇つたことだし。そろそろ更新時期かもな。やつぱ女は24歳までだな、賞味期限」

オーナーは高級腕時計を見て時刻を確かめると厨房へ戻つていった。俊樹は選挙戦の指令とお願いをスマフォから送り続け、ずいぶんと時間が経つたので、一度はテーブルに戻つた。

「すまない。もう少し連絡事項があるんだ。二人で食べていてくれないか」

「はーい」

四葉は素直に返事をして鯛の包み焼きを頬張つたけれど、三葉はナプキンで口を拭いて席を立つた。そして父親へ頭を下げる。

「ごめんなさい、お父さん。選挙のこと、いろいろ大変なんでしょ」

「いや……たいしたこととは、ない」

「ウソを言わないで」

「……」

「立候補者の私が4日も倒れていて、選挙活動がストップしているのに、大変じゃないわけないもの」

「……三葉……」

「今からは私も戸別電話をやります。電話なら東京からでもできるから」

「もう大丈夫なのか？ 体調は」

「はい。もう平気。四葉、一人で食べていられる?」

三葉に問われ、四葉は口の中のものを飲み込んでから答える。

「小学生でも食べるくらい一人で食べてるよ。お姉ちゃんは、やっぱりお父さん似だね。選挙が性に合ってるのかも。いつてらっしゃい」

すっかり選挙モードになつていてる父と姉に手を振つて、四葉は長年にわたつて話だけは聴かされ、写真だけは見せられていたイタリアンを、ゆつくりと味わう。その四葉が座つているテーブルの隣りには、柄の悪い二人組の男たちがいた。

「兄貴、そろそろタイミングじゃないっすか」

「そうだな。いつものヤツいくか」

男の一人が食事の途中で料理へ爪楊枝をさし込むと、店員を呼びつけ、文句を言つて無料にさせている。その一部始終を四葉は気づいていたけれど、余計なトラブルは抱えたくないので黙つて食事を続けた。

「うまくいきやしたね、兄貴」

「おうよ。この店は4年ぶりだからな」

「もうバイトは、ほとんど入れ替わつてオレらの顔を覚えてるヤツもいない感じっすね」

「同じ店でやるのは最低4年あけないとな」

「爪楊枝が一つあれば、三食、タダ飯つすもんね」

「指先一つでえ、つてなもんよ」

「あの技の方も今夜も、またやるんすか？　あのカツターナイフで女のケツ肉を切らずにスカートだけを斬る絶妙の神業。あれがデキるヤツは、そうそういないっすよ。すげえ神業っす」

「ああ、あの新人っぽい女子大生、可愛いしな。あの女のスカート、斬りてえな」

「よつ！　待つてました！」

「だがな、今夜のオレは昨夜までとは違う。新たな技をマスターした。もうカツターナイフなんてものは使わねえぜ」

「じゃ、どうするんすか？」

「素手よオ、素手。素手でスカートをバラバラに切り刻んで、パンツ丸出しのディナーシヨーにしてやるぜ。素手なら、そこまで剥いても証拠がねえ。女のスカートが勝手にバラバラになつたつてことで警察沙汰にもならねえ」

「そりゃあ素手なら証拠は無いっすけど……けど、そんなこと可能なんですか？」

「フフフ、オレはなア、この4年ずっと修行してきたのよ。シン師匠のもとでな」

「それってアレっすよね。太極拳みたいな健康体操をやる拳法道場の。たしかシン＆ユリア美容院とかで、どつちかというとエステのチエーン展開で大成功してるユリア社長のが有名っすけど。拳法道場つてオマケじやないんすつか？」

「それは表向きの姿よオ。裏では本格的な殺人拳を教えてくれる。まあ、授業料は500万もして、タダ飯で浮いた金を全部つぎこんだがよ。その甲斐はあるほどの拳法を教えてくれたぜ。しかも、オレは筋がいいつてシン師匠に誉められたんだ。斬るセンスがいいつてよ」

「兄貴のカツターナイフさばきは、かなり超人的つすもんね。ケツ肉を切らずにスカートだけ斬る、しかも相手に気づかせないつて普通できないつすよ」

「フ、お前の言う超人的つてのは、まだまだ常識の範囲、常人のレベルよオ。オレは、もはや常人の域を超えた。見るがいい！ 我が南斗聖拳を！ シヤオオ！」

ちょうど通りかかったウエイトレスは四葉ヘデザートを運んできた女子大生だつたけれど、その臀部に触れるか触れないかの間合いで、素早く手を一閃した。

パラリ…パラパラ…

ウエイトレスのスカートが直線的に切り刻まれ、床に落ちていく。スカートが無くなると、女子大生の臀部は丸出しになり、下着も少し斬られていたので肌も見えている。それでも皮膚は切れておらず一滴の血も出ない。急に下半身が涼しくなつて女子大生が下を見る。

「つ、キヤーッ?!」

悲鳴をあげて座り込んだ。

「す……すげえ……兄貴……すげえ……」

「ざつと、こんなもんよ」

「最高っすね！ ヒヨー！ このレストランはいいな！ こんなショ一までしてくれんのかよ！」

大声をあげられると注目が集まり、座り込んでいたウエイトレスは混乱して泣き出した。他の店員がフオローに出てきて、泣いているウエイトレスは奥へ連れて行かれ、オーナーが周囲の客に謝つて営業を再開すると、四葉が手を挙げた。

「はい、何でしよう？」

すぐにオーナーが駆けつけて問い合わせ、四葉は穏やかに答える。  
「私のデザート、さつき落とされたんですけど。作り直してもらえますよね？」

「あ、はい！ 申し訳ありません、すぐに！ どうか、少しだけお待ちください」

オーナーが厨房へ急ぐように指示しつつ、まるで見張るように睨んでいる正妻へは、オレはちゃんと仕事してるぜ、という視線を送る。すぐにデザートは作り直され、別のウエイトレスが四葉の前に置いた。それを、ゆっくりと味わつて食べ終えると、再び四葉は手を挙げる。

「はい、どうがされましたか？」

オーナーは柄の悪い二人組が帰るまではフロアにいるつもりだったのでも、すぐに四葉へ対応してくれる。問われて四葉は二人組を指して、はつきりと言う。

「さつき、あの二人は自分たちで爪楊枝をさし込んでから、店員さんへ文句を言つていました。お店の責任では無いと思います」「……」

オーナーは4年前にも来た客でない客のことを記憶していたし、その所業をわかつてもいた。それでいて、さもしい飢えた野良犬にエサをやつた気分で、無料にして穩便に帰つてもらうつもりだつたのに、

女子高生のように見える四葉が余計なことを言い出したので、今までの接客マニュアルに無い対応を考えなければならず、つい黙り込む。替わりに二人組が騒ぎ出した。

「ああん?!」

「んなつ証拠が、どこにあんだ?! コラッ!!」

オーナーの背後から、予想通りの反応が返ってきていた。柄の悪い二人が怒鳴りだしたので他の客は驚いているけれど、四葉は落ち着いて反論する。

「私の証言が証拠です」

「……」

オーナーが悩む。

「おい、コラっ!! お嬢!!」

「クソガキつ! しばくど!!」

「私の証言以外にも、その男たちの身体検査をすれば、次の犯行に使う爪楊枝も出てくるでしようし、このレストランにある爪楊枝と仕入れ先や商品が違うのも、詳しく調べれば明らかにできることです」

「……。お客様方、まあ、ここは穩便に」

オーナーは面倒なことは避けたかった。詳しく調べる過程も面倒だし、二人分の被害額などしている。ここまで揉めれば、もう二度と二人組は来店しないかもしれないし、それでいいので終わりにしてほしかった。もう明日以降の営業のことや、何より浮気に勘づきかけている正妻への対応に専念したい。オーナーが逡巡していると、四葉は席を立つて二人組に近づいた。

「私と外で、お話しませんか?」

「お? …お、…おう! いいだろう!」

「この女、アホつすね」

「お客様方……」

オーナーは四葉の身が心配になるけれど、外で起ることに店は感知しないのが原則だった。四葉は店外に出ると、人目のない裏路地まで歩いた。当然、二人組もついてきていた。

「お嬢ちゃん、わざわざ人目の少ないところまで、ありがとうよ」

「マジでアホっすね、このアマ」

「一つだけ私の質問に答えてくれますか？」

四葉が問う。

「ご飯をタダにしてもらつただけで満足すればいいのに、どうして、女の子のスカートまで斬ったの？ 何のために？」

「お？ ……てめえ、見てやがったのか」

「話も、だいたい聴こえていましたよ」

「そうか。そんじや、教えてやらねえとな」

「お嬢ちゃんのアホさ加減をな！」

弟分の男が襲つてくるのを、四葉はハイキックで撃退する。四葉が攻撃してくることなど考えてもいなかつた男は押し倒して性的な悪戯をしようとは無防備につかみかかろうとしていたところに、四葉の蹴りがあざやかに決まる。

「はアツ！」

四葉の気合いと同時に、相手の顔面に四葉の靴底が直撃し、一撃で昏倒させた。大きくスカートはめくれあがつたけれど、裏路地は暗く日没後なので四葉の下着は見えなかつた。弟分を一瞬で倒されて、残る男の顔から笑いが消える。

「この女……腕に覚えがあるようだな。どうりでスマしてやがると思つた」

四葉の身体に悪戯しようと企んでいた顔から、本気のケンカをする顔になつていく。

「いいぜ、やつてやろうじゃねえか。オレは油断しねえぞ」

「……」

四葉は無表情に再び問う。

「質問の答えが、まだです。どうして、女の子のスカートまで斬るの？」

「フフ……決まつてるだろ！ 斬りてえからよ！」

もともと下品だった男の顔が、ますます下品に歪んだ。

「斬りてえから斬つた！ それ以上の理由なんざ必要ねえ！ 最高だぜ、実にいい気分になる！ 今夜もグツときたぜ！ ヒヤツハーツだ

！」

「…………そう…………それだけ……」

疑問に思っていたことを知り、四葉が深いタメ息をつく。

「はああ…………。こっちの世界にも、こんなクズがいるのね」

「あん？」

「いえ、もともとは同じ世界。一つの紐のうちの糸。東京だからかな……ううん、うちの田舎にも似たようなのがいたし、世界がどうであっても、都会でも田舎でも、人口の一層層はクズつてことなのかな。正直、うんざりするわ」

「何をブツブツ言つてやがる？」

「悪党どもに祈る言の葉は無いって話よ」

「けつ！ 腕に覚えがあるようだが、ちょっとばかり今夜は相手が悪かつたな。このオレ様は南斗聖拳の初歩をマスターした男よオ」

「そう」

「お前はスカートだけじやねえ。すっぽんぽんの真っ裸に剥いてやるぜ！ ヒヤツハ——！ 斬れる、斬れる、斬れるオ！」

男が襲つてくる。四葉も構えた。

ザウツ！

四葉と男が交差して、すれ違う。

「オ……オレ様の南斗聖拳をかわした……」

「つ……せつかく、お父さんに買つてもらつたのに……」

かわしきれず四葉はブラウスの袖を切り落とされて、ノースリーブにされていた。

「それだけで済むとは、お前は何者だ？ なにか拳法やつてるだろ？！」

「お前の名を教えろ！」

「もう死んでいる人になら、教えてもいいかな」

四葉は構えを解き、少し考える。

「私の拳は北斗神拳」

「つ……北斗……」

「名は…………そうね、北斗の末弟よりも末席の女、拳……四葉…………。拳四葉でケンシヨウとでも名乗つておくわ。本名は、やっぱり秘密よ♪

一応、暗殺拳だから」

「ケンシヨウ…………お前、男か？」

「…………。本名は、もつと可愛いから」

四葉が氣を悪くしたように言う。ノースリーブにされて見えるようになつた肩もスカートから伸びている脚も、ほつそりとしていて女の子らしいけれど、さきほど一撃で男一人を倒したのも事実だつた。

「フン、まあいいぜ。じわじわ素っ裸にして、本名もマンコも晒してやんぜ。うつ……なんだ？ すげえ……腹が気持ち悪い……ボディなんか、くらつてねえのに…」

男が腹部を押さえて呻いている。四葉は死にいく者へ告げる。

「北斗巫娼拳の奥義、秘孔、咽倫義を突いたわ。すぐに、ああなる」

四葉が最初に蹴撃した男を指した。昏倒していた男は嘔吐を繰り返して喘いでいた。

「……ううつ……あ、兄貴……た・助け…うえ！ うげえええ！」

吐いているのは内臓だつた。自分の内臓を吐き出して苦しんでいる。

「なつ？ 何をしやがつたんだ?!」

「この秘孔は地味に効くの。じわじわと吐き気が強くなつて、吐き続ける。まずは、さつきのデイナー」

「うつ……うええ!!」

アスファルトにイタリアンだつた嘔吐物が拡がつた。

「けど、それは地獄の玄関前にすぎない。次に吐くのは自分の胃」

「胃つ？ …うう？ は、腹が！ 腹がよじれる?!」

「胃の次は十二指腸を吐いて、そのままズルズルと小腸を吐くの。気をつけなさい。吐き出した内臓を傷つけると大出血を起こして死ぬから」

「ひつ？! うつ、うええええ！」

男が胃を吐いた。それに連なつて腸も吐き出している。

「こ……こんな……バカなことが……うえええ！ あつて……たまるか… ハア…ハア…うう！ うええ！ うおえええ！」

内臓を吐き出す激痛と息苦しさで泣きながら悶え苦しんでいる。

「腸を吐き終わったら食道を裏返しに吐くわ。まあ、その頃には死も近いでしょうね」

「そ……そんな……うえええ！」

「頭や心臓を一気に破壊するわけじゃないから、秘孔の中でも苦しみが続く方ね。吐いて吐いて、窒息死するか、消化器官の血管がちぎれたことで失血死するか、どっちになるにしても、とても苦しい」「ひつ……い、イヤだ！　た、助けてくれ！　うおおええ！」

男の口から腸が垂れ下がっている。傷つけないよう両手で支えているけれど、出血している血管もあつた。すでに最初に蹴撃された男は内臓を吐き尽くしてアスファルトに転がっている。あまりの苦痛に、その顔は死後も引き攣つたままだった。

「た……助けて……お嬢さん……お、お嬢様……うぶつ……ふ……うええ……」

もう言葉もうまく吐けないけれど、助けを求めて来ている。四葉は冷徹に言つた。

「今までタダで食べた御飯、全部吐き戻して死になさい」

「ううおええ！　うええばああ！」

あまりに苦しくて窒息しそうにもなり、自分の内臓を噛んでしまい、大出血を起こして、のたうち回る。四葉は完全に死ぬところまで静かに見守ると背中を向けた。俊樹に連絡を取り、予定していたヘリポートに向かつた。そろそろ花火大会が終わる時刻で、豪遊していたカップルたちのヘリが次々と戻つてきていた。わずかな時間のフライトでも20万円を超える設定金額なので、あまり普通のカップルはない。経済的に成功した老夫婦か、経済的に成功しつつある男との不倫や水商売系の女とのカップルが目立つた。おかげで俊樹に連れられている三葉と四葉は一瞬、変な目で見られる。二人とも顔立ちは母親似なので親子だと思つてもらうには時間がかかる方だつた。それでも三人とも他人の視線など気にせずヘリの搭乗手続きを、降りてくるカップルたちの横で進めていく。手続きが終わりヘリポートそ

ばの待合室で出発を待つていると、三葉は最後に着陸した大きめのヘリから降りてきたのが、離婚した元夫と藤井司と結婚している藤井ミキだつたので驚いた。

「つ、タキつ?! どうして、ここに?!」

「え? うわっ?! お、お前こそ、どうして、ここに?!」

お互ひ不意に離婚した相手と出会つて驚いている。

「私には色々あるのよ! もうタキには関係ないでしょ!」

「お、お前だつて、もうオレと関係ないだろ! ……うわ? しつかりして! ミキさん!」

いつしょに降りてきたミキはワインを2本も呑んでからフライトしたために、泥酔と乗り物酔いが重なつてフラフラとしている。倒れそうになつたのを抱き支えられて、閉じかけていた目を開けた。

「え? ……大丈夫……大丈夫……花火、まだ?」

「終わつてますよ。いつしょに見たじゃないですか?」

「あ、ん? ……うん、そう見た。横から! 花火! 見た! つて、あれ、この女……えーっと、もと彼女……じゃなくて、ほら、……ド田舎の……誰だつけ?」

ミキが三葉を見て、名前を思い出せずにいる。三葉は不快そうに目をそらした。

「……」

「すごい田舎の……えつと……隕石が落ちたとこの……モトカノ?」

「モトカノじゃなくてモトヨメです。ほら、水

水をもらつてミキは少し落ち着いて待合室の椅子に座つた。今度は值踏みするように三葉の姿を見てくる。再婚してから太り始めたスタイルは4日間の絶食で戻つてているけれど、今は着てている服がありあえず急いで買った物なのでコーディネイトをしていない。なるべく俊樹に負担をかけないようセール品を選んだので安っぽい服装だつた。それに對してミキは高そうなワインレッドのドレススースを着てている。花火を横から見るという贅沢なデートに相応しい姿だつた。値踏みが終わつてミキはクスと微笑み、三葉へ挨拶する。

「お久しぶりね。三葉ちゃん」

「…………あなたに、そういう風に呼ばれたくありません」

三葉は会話をしたく無さそうだったけれど、降りてきたヘリは燃料補給とチェックのために、すぐには出発しない。ミキは酔いがひどいので、しばらく動かずに座っている様子だった。俊樹は娘が離婚相手と、どんな会話をするのか心配ではあつたけれど、あえて離れて聴かないようしている。ミキはチラリと俊樹へ視線を送り、彼氏や再婚相手ではなく親子だと察した。

「で、三葉ちゃん、タキと離婚してから、どうしてるの？ 彼氏とか、いる？」

「…………再婚しています」

答えないと負けた気がするので三葉が言つた。

「あく…………そつか、そうだつたね。たしか不倫したんだよね」

「くつ…………誰のせいだと思つてるの?!」

三葉が耐えかねて怒鳴る。

「あなたが結婚してからもタキに、ちよつかい出すから!!」

「それでタキをケンカして出て行つて、親友の旦那と再婚でしょ？ ハッピーエンドでいいじゃない」

「どこがっつ?!」

「勝ち組、勝ち組！ あく…………タバコ吸いたい…………って、ここ禁煙か……ちつ……」

「あなたこそタキの友達だつた藤井くんと結婚したくせに！ 今夜だつて、どうしてタキといいるの?!」

「司つて退屈なのよね」

「…」

ずっと黙つて無関係という顔をしていた四葉の耳がピクリと動いた。ミキはタバコを吸おうとして係員に止められ、諦めてハンドバツクに戻して話を続ける。

「頑張つてプロポーズしてくれたから、とりあえず結婚したけどさ。まじめで人並みの給料はもらつてくるけど、ただそれだけ。まあ、タキは今フリーターだけど。キャハッハ♪ でも、今夜は懸賞で当たつ

たへりで花火を横から見れて最高だつたよね。このあとは、どうしよつかな？ ね、タキ」

まだ酔いが強いようでミキは饒舌に語りつつ、男にしなだれかかる。不倫相手はコンビニでバイトしていたところを急に呼び出されたようで、バイト先の制服を着ていた。三葉が見たくないものから瞳をそらして問う。

「不倫なんて楽しいですか？ 私には後悔しかない」

三葉は胸が悪くなるような痛みを覚えた。親友だつた早耶香から克彦を盗つた感触は今でも後味悪く覚えている。自分の新婚生活がうまくいかず、それで逃げ込んだ先にいた克彦の優しさに甘えて盗つた。三葉は自己嫌悪で身震いした。ミキが笑つて言う。

「チンポ3本」

「は？」

思わず問い合わせた三葉へミキは指を三本立てて語る。

「不倫するなら、3チンポ握れ。っていう西原理恵子の格言を知ってる？」

「誰それ？」

「毎日新聞で連載漫画やつてるよ。でね、女は不倫するなら、1本じゃダメだつてこと。一つにだけウエイトを置くと不安定になるでしょ。三脚でも、そう。しつかりと立つには3本くらいが、ちょうどいいのよ。それなら、そのうちの1本が急に消えても大丈夫、自分は安定していられる。ようはバックアップを持ってつてことよ」

「くつ……こんな人に……私の新婚生活を乱されて……」

「お姉ちゃん、久しぶりだし、そして最期になるかもしないんだから、彼と話しておいたら？ 私は、この人と話してみたい」

四葉がミキを誘う。

「少しだけ、お話しませんか。あちらで」

「ふーん……妹ちゃん？ よく似てるわね。いいわよ。お説教したそな顔してる。女子高生が、どんなこと話すのか新鮮そうで聴いてみたいから、お誘いに乗つてあげるわ」

ミキが立ち上がり醉つた歩調で歩き、四葉は待合室を出てへりの

発着場で会話する。高層ビルの屋上なので風とヘリの音があり、やや大きな声で問う。

「さつき話していた司つて、旦那さんですか？」

「ええ」

「愛していますか？」

「クスツ…ええ、それなりに。初々しい質問ね、答える方が恥ずかしいくらい。クスクス…若いつて、いいわあ」

「司さんは不倫のこと、知っていますか？」

「ううん。そんなへマはしない。あなたたちが告げ口するなら別だけど。あく…今夜は酔いすぎたわ、こんなことペラペラ話しちゃって。横から見た花火が、あんまりキレイだったから、かな」

「ご自分のされていること、許されると思いませんか？」

「ええ」

「……。その理由は、ありますか？」

「私が美人だからよ」

「…………」

「美人は何をしても許されるの。男は、そういうものよ。あなたも可愛いから、もう少ししたら、わかるかもしれない。もう少し長く生きて経験して、お化粧とかすれば、きっと輝くようになれるわよ。せめて田舎臭いところを抜けば、いくらでも男がよってくる。電話一本で大みたにダッシュしてくる。すーっと前を歩くだけで、私の残り香を嗅いで発情するの。私は確実に美しいもの」

「あなたは長く生きすぎた」

「はア？　お姉さんと、そんな変わらない歳…っ⁈　何するのよ⁈」

ミキは急に四葉が身体に触れてきたので一步さがつた。指先で強く突かれ、とても不快だった。

「何のつもりよ⁈」

また一步さがる。

「北斗神拳奥義、悔恨積歩拳」

「はア？」

ミキは仕返しに四葉の肩を押してやろうと思つたのに、本人の意思

に反して、また一步さがる。さらに一步、さがる。

「え？ え？ なに？ なんで、足が勝手に?!」

「秘孔、膝限を突いたわ。あなたの足は意志と無関係に後ろへ進む！」

地獄まで自分の足で歩いていきなさい!!」

「な、何を言つて……、こ、この先は、たしか!!」

ミキが振り返る。高層ビルの屋上にあるヘリポートなので手すりもなにもなく、このまま歩き続けると、地上まで真っ逆さまだつた。

「うわあ!! と…とめてよ！ あ…足を!! とめてよ!!」

「ほんの偶然だと思う。司なんて、よくある名前だから、ごく偶然に重なつただけ。なのに、こんなに腹立たしいなんて、いつのまにか、私は彼を強く愛している」

「何を言つて……と、とめてよ！ 助けて！ 誰か助けて!!!」

もうミキは大声で叫んだけれど、ヘリポートにいるスタッフは花火の前後の混雑で疲れていたし、四葉たちの乗るヘリの準備に追われ、気づいていない。どんなに大声をあげてもアイドリングしているヘリの羽音にかき消されて四葉以外は誰も聴いていない。

「うわああああ！ あわわわわ!!」

あと落下するまで1メートルもなくなると、いよいよ恐怖で顔中が汗に濡れて、つけまつげがとれている。目の上下につけまつげをしていたので、下のまつげが涙で流れ、上のまつげは目蓋の変なところに貼りついている。涙でアイメイクが溶け、黒い涙を流して、ファンデーションが汗で落ちていき、頬に白い汁がダラダラと滴っている。

「い…いやよ！ たすけてえええ……な…なぜ、私が、こんな目に!! 美人の、この私が、なぜええ!!」

とうとう爪先だけで屋上の端に立つてはいる。下を見ると、地上200メートルはありそうで背筋が凍る。

ジヨワジヨボジヨボ!!

ミキは恐ろしくて失禁してしまい、漏らした尿がビル風とヘリが巻き起こしている旋風で舞い上がり、本人の顔や上半身を濡らして藤井

司名義のリボ払いで買ったワインレッドのドレススーツが、ワイン2本を飲んで分解した臭い尿で染まつていく。

「あわ…」

最期の一歩を踏み出して、ミキの身体が落ちていく。

「うわっ！　うわああ!!　たわばああ……」

たすけて、わあ、と最期に言つたのか、もう声は聴こえなくなつた。

四葉が黙つて待合室に戻ると、係員に呼ばれる。

「宮水様、3名様、ご出発の準備が整いました！　ご搭乗ください！  
お帽子やスカーフなど飛びやすい物は必ず手に持つていただきか、力  
バンに入れてください！」

四葉と俊樹が呼ばれた方へ進み、三葉も会話していた元夫に最期の言葉を告げる。

「ごめん。結局、なにもかも、急ぎすぎたのが、いけなかつたのかも」

「オレの方こそ、ごめん。未熟だつた。君の気持ちを考えられなくて、  
ごめん」

「じゃあ。さよなら」

「ああ……さよなら…」

男に見送られて三葉は背中を向けると、ヘリに乗つた。ドアが閉まる  
と旅客向けのヘリなので会話できるくらいには静かになる。

「三葉、大丈夫か？」

俊樹が、不意に離婚相手と出会つてしまつた娘を心配して問ひ、三葉は微笑んだ。

「うん。話せて、よかつた。ずっと弁護士任せで離婚したから、会つて話して気持ちがスッキリしたわ」

「そうか、よかつたな」

気がつけば、もうヘリは上昇していて、スカイツリーを見下ろす高度になつていて。花火が終わつた後の渋滞で道路は輝き、ビルやネオンも宝石のように見えた。

「東京…………この街が…………人を、おかしくしてしまうのかも……私、  
サヤチンに謝りたい。どんなに謝つても許されないとしても、謝りた

い

「…………」「」

俊樹と四葉も眼下を見下ろす。出発したヘリポートのあるビルの下に救急車やパトカーが集まり始めているのに気づいたのは四葉だけだった。

「東京、たしかに、こんな街、焼き尽くしてしまったらとも……ううん、それはダメ、なんとか防がないと……でも、疲れた。もうクタクタ……」

四葉は倒れ込みそうなほど睡魔を覚えただれど、頭を振つて意識を保つ。

「ダメダメ！ 寝ない！ 寝ない！」

「ねえ、四葉、今夜も入れ替わるの？」

「たぶん、ううん、きっと。……眠い……ごめん、お姉ちゃん、寝そそうだから、何でもいいから話しかけて」

「何でも、つて言われると……あ、ほら、もう東京が終わるよ。空から見ると、あんなに小さい都市だったんだ」

三葉が窓の外を指した。キラキラと輝く人工の光りが途切れ、山梨県に入ると眼下は、ほぼ真っ暗だつた。

「私たちの町も、上から見ると、こんなに暗いのかな？」

四葉の問いに俊樹が答える。

「その分、星がキレイに見えるさ」

「そうだね」

四葉は星を見ようとしたり、旅客ヘリの窓の構造上あまり上方は見えない。しかも、空は曇つていた。

「お客様」

副操縦士が客室と操縦室を隔てる戸を開いて声をかけてきた。

「山梨県から長野県にかけて濃い霧が出ているとの情報です」

「そうか」

「大変申し訳ありませんが、山梨県内にて着陸いたします」

「つ、それは困る！」

俊樹が声をあげ、四葉も叫ぶ。

「お願い！ 岐阜まで飛んでください！」

「そうおつしゃいましても、きわめて危険ですから」「どうしても戻らないといけないの!!」

「追加料金が発生してもかまわない！ 飛んでやつてくれ！」

「金額の問題ではないのです。運行規定違反になりますから、着陸いたします。料金は後日全額返金されますので、どうか、ご了承ください」

「そ……そんな……」

「どこに着陸するんだ?!」

「検討中です。どうか、お静かに」

そう言うと副操縦士は戸を閉めてしまった。しばらくして、ヘリが山梨県内にある日本航空高校のヘリポートへ緊急着陸した。降り立つてみると、周囲は真っ暗で何もない。コンビニの光りさえ、遠かつた。

「……あと2時間も、ないのに……」

「四葉、しつかりして、顔色が悪いよ。まだ、方法はあるかも知れないから！」

三葉が励まし、俊樹が電話をかける。

「タクシーを呼ぼう！」

電話で呼んだタクシーが来るまでに30分を要して、中央自動車道を進むけれど、ヘリと違い、飛騨までは大きく山脈を迂回しなければ到着できない。霧の濃い高速道路を運転手に無理を言つてスピードを出してもらつても、ようやく長野県に入り諏訪湖の近くを通る頃になつて、夜の12時になつてしまつた。

「日付が……四葉っ?! 四葉、しつかりして！」

三葉は妹が、ぐつたりとしていることに気づいた。

「寝ちゃダメなんですよ！ 起きて!!」

大声で呼びかけて揺すつても反応がない。助手席に座っていた俊樹も心配して振り返る。

「四葉の様子は？」

「ぜんぜん反応がないの！ 四葉！ しつかりして！ 四葉!!」

三葉が頬を叩いても反応が無いどころか、顎に力も入っていなくて口が開いてヨダレが垂れてしまう。目蓋にも力が無くて、閉じているというより半眼で瞳に動きもない。

「四葉……」

三葉はゾッと腹の底が喪失の恐怖で冷たくなる。もう四葉からは生きている様子が消えてきている。母親を亡くしたときと同じ、身内を喪つてしまふかもしれないという重く冷たい恐怖感が三葉の背筋に貼りついてきた。

「四葉……四葉！　お願ひ！　四葉、生きて！」

抱いている妹の全身には少しも力が入っていないくて、とても重たい。じわりと三葉はお尻が温かく濡れてくるのを感じた。触つてみると、同じシートに座っている四葉が小水を漏らしている。

「…おしつこまで、もらして……四葉……息は…」

三葉は死んだよう動かない妹の口元に耳をあてた。

「つ！　お父さん！　四葉が息してない!!」

「なつ…」

驚いた俊樹は慌てかけたけれど、長女に言い聞かせる。

「こんなときこそ、落ち着きなさい」

「そんなこと言われたつて!!　息してないのよ！　四葉が！」

もう泣き出しそうな声で三葉が叫ぶ。助手席にいる俊樹は何もできなければ、慌てずに言つた。

「私も、どうするのが、いいか考える。お前も考えなさい」

すでに妻を亡くしたことのある男が静かに諭すと、三葉も少しだけ冷静になれた。

「……どうすれば……どうしておくのが……いいの……息が……なら  
！　息をつ！」

三葉は唇を四葉と重ねると、大きく息を吹き込んだ。

## 第4話

四葉は肉体をともなわず、意識だけが空を飛んでいるのを感じていた。

(……)は……あっちの世界……核戦争があつた世紀末……)

濁つた空と赤茶けた砂漠のような大地が見える。その大地に墓石が立つように、ところどころコンクリートのビルが残っていて、ここが核戦争後の世界なのだと想い知らせてくれる。

(……させない……こんな核戦争は……絶対に……させない……でも、私、糸守にいなかつたから入れ替わりがハンパに発生して……身体が……ジャギさんは……あ、ジャギさんがいる)

空の高いところにあつた四葉の意識が、だんだんと降下していき、地上200メートルのビル屋上を認識して、ジャギを見つけていた。

「ウワッハハハ！　どこに逃げようとも炎が貴様を追いつめる！　こ<sup>こ</sup>は地上200メートルどこへも逃げられんぞ！」

そのジャギはケンシロウに向かつて、勝ち誇つて哄笑している。すぐ近くまで四葉が降りる。

(あ、結局は拳法で戦わずに罠にしたんだ。まあ、その方が確実かな)

そう考えている四葉がジャギと重なつた。すつと四葉の意識がジャギに入つていく。

「うつ……痛い……けつこうダメージ受けてる。な？　何だ？！　オレの中に……」

一つの肉体に二つの意識が宿り、ジャギが頭を振つた。

「うう！　頭を振らないでよ、すごく痛い！　何だ？！　これは？！　どうなつてやがる？！　そうか！　四葉とかいう女！　お前だな！」

「…………ジャギ…………貴様…………」

ジャギが自問自答している様子が変なので、ケンシロウは怪訝な顔で見ている。ジャギは身体の中には四葉へ怒鳴る。

「オレ様から出て行け！　ごめんなさい、私も、こうしようと思つて、こうなつてるわけじゃないの！　オレ様は今忙しいんだ！　とにかく静かにしてやがれ！　ぶつ殺すぞ！」

ケンシロウと戦闘中だつたジャギが殺氣立つてゐるので四葉はいながらにして静かに見守ることにした。見守つてゐると、ジャギは屋上に火を放ち、ケンシロウを炎壁で囲む。

（お見事……まるで孔明の罠……意外に頭脳派なんですね）

「……。フ、オレは拳法だけがすべてとは思つてないからな。ようは勝てばいいのよ、勝てば」

四葉が声を出さずに意志を伝えてみると、ジャギも誉められて悪い氣はしないので得意そうに微笑んだ。そして、ケンシロウに向かつて、冥土のみやげと称して昔話を語つて聴かせている。ユリアのことでシンを焚き付けた話を得々と披露した。

「シンをゆさぶり消えかけた炎を再び燃え上がらせたのだあ!!」

（なるほど、色恋沙汰を利用して……むしろ、もう拳法家より策士の才能があるんじやないですか。にしても、ジャギさん、ものすごく熱いです）

足元の業火は熱が上にも伝わつてくる。一つの肉体に二つの意識でいる四葉へも皮膚感覚が伝わつてきて、足先が焼けるように熱い。ジャギの機嫌を損ねないよう四葉が恐る恐る指摘してみる。

（そろそろ脱出しないと危険じやないですか。私たちが立つてゐる、これつて燃料タンクですよね）

「うるせえ！　これからケンシロウのヤツを最大限に悔しがらせてから焼き殺してやるんだ。お前は黙つてろ!!」

（はい、すみません）

そんなことに時間を潰していないで早く脱出した方がいいと四葉は思つたけれど、ジャギとケンシロウに、どんな確執があつて争つてゐるのか理由を詳しく知つてゐるわけではないので、積年の恨みもあつて語りたいのもしれないと考え、再び静かにする。ジャギは昔話を続けて語り終えると、高笑いする。

「ひやあははー！　どうだ、悔しいか？！　悔しいかあ？！　はははあ！！

ウアハハ！ オレ様は誰だ！ 名を言つてみろ!! オレは北斗神拳の伝承者ジャギ様だ!!

(……自分に様付けするんだ……私が自分で自分に四葉様って言つたら司とか、どんな顔するかな……)

四葉の思考はジャギに伝わつてしまつたけれど、ジャギは感じなかつたことにする。

「……。ウアハハハ！ 貴様からすべてを奪いとり、そして今貴様の命も尽きるのだ！」

「ぬうう!!」

燃料タンクの下で炎に囲まれながら話を聴いていたケンシロウが激怒した。

「うおおお!!」

雄叫びをあげ、怒りのあまり筋肉が大きく膨張して上半身裸になつた。

「な?!」

驚いているジャギに四葉が伝える。

(ジャギさん、そろそろ脱出を!! 足、火傷しますよ!!)

(そうだな。そろそろ…)

ジャギも声を出さずに四葉へ意志を伝えることが自然とできた。一つの身体にいるからか、単に思つてゐることが、そのまま伝わつてしまふようだつた。ジャギが目線でチラリと脱出のために用意しておいたケーブルを確認したときだつた。

「おおお!! ぬああ!!」

ケンシロウが咆吼し、さらに屋上の床を殴りつけてゐる。  
ドコオツ!!

人間離れした強烈な一撃でコンクリートの床がヒビ割れていき、そのヒビが燃料タンクの方まで走つてくる。

「な……なに…、ゲエ!! うわあ!! キヤーっ?!!」

屋上の床が崩壊して燃料タンクごと落とされてしまい、ジャギが驚き、四葉は悲鳴をあげた。

「ゴホッ…な…なんてヤツだ…」

「ジャギ…オレの名を言つてみろ!」

ケンシロウも落ちたけれど、まったくダメージを受けておらず迫つてくるので、四葉が叫ぶ。

「待つてください! ケンシロウさん! バカめ!」

ジャギの手が素早く動きケンシロウの顔を浅く斬った。その寸前にジャギらしくない口調で発声していたのでケンシロウに隙もできていた。斬られたケンシロウが少し驚く。

「……この技は!! 南斗聖拳!!」

ケンシロウが動搖しているので、ジャギは得意げに微笑む。

「フフフ…その通り、オレも昔のジャギではない」

(四葉、てめえ、次に余計なことしたら、マジでぶつ殺す。お前を殺せなくとも、次に入れ替わったとき、沙耶香とテツツーを八つ裂きにするからな)

ジャギはケンシロウに語りつつ、四葉へは声に出さず警告した。四葉とは入れ替わりが起きる関係なので直接に殺害はしにくいので、沙耶香と司を人質にする論法だつた。

(ごめんなさい、それだけは許してください! お願ひします!)

「だつたら、黙つてやがれ! 男同士の間に入るな!」

「……」

ジャギが声に出して四葉を怒鳴ると、ケンシロウは会話のキヤツチボールが成立しないので少し困っている。四葉は二人を人質にされて今度こそ黙つて見守る。四葉が静かにしていると、再びジャギとケンシロウが戦い、ジャギは南斗聖拳で挑むけれど、すぐに押されていき、また追いつめられた。

「うつくく…き…貴様、使つたな。北斗神拳の奥義、醒銳孔を!!」

「そうだ…胸椎の秘孔、龍領を突いた! 今、貴様の身体は、むきだしにされた神経で包まれている!! 指でふれただけで全身に激痛が走る!!」

ケンシロウが指先でパパパッと触れてきた。

「うぎやあ!!」

(うつくく…痛うう…心靈台とは、また違う痛みで、これは、こ

れで、きついよ)

ジャギの身体が秘孔を突かれると、その痛みは四葉にも伝わり、とつさに四葉はラオウから習つた対応する秘孔で痛みを取り去つた。勝手に手を操られたジャギが怒る。

(四葉、てめえ、またオレ様の身体を勝手に動かして…)  
(ごめんなさいつ、つい!)

四葉は慌てて謝り、ジャギはそれほど怒らなかつた。

(まあ、いいだろう。ケンシロウのヤツが驚いてやがるしな)  
「な…なに…ジャギ…なぜ、お前が正統伝承者しか知らぬはずの秘孔を知つている!」

問われてジャギも気づいた。

「あ、そうだ！　お前、なんで秘孔を知つてるんだ？！　いつの間に北斗神拳の奥義を?!」

「……。ジャギ！　貴様に訊いている!!」

ケンシロウが重ねて詰問しているけれど、四葉はジャギへ説明する。

(私の身体がいる世界が2020年なのは気づいてますよね。その2020年にいるラオウさんから教えてもらつたんです)

「兄者から……なるほど、それで。……いや！　けど、そんな簡単に教えてくれるものか?!」

うつかり声に出して問うてることさえ気づかないほどジャギは驚いている。四葉が続けて説明する。

(簡単ではありませんでした。3億円って言われたけど、お父さんが交渉して、なんとかしてくれたの)

「3億……3億円つて金か?!　金で北斗神拳を売つたのか?!　兄者は

?!」

「……。ジャギ!!　貴様は何を言つている?!」

もともと激怒していたケンシロウは会話が成立しないことに苛立つて殴りつけてくる。その拳を四葉との意思疎通に気を取られているジャギの意思ではなく、四葉の意思でヒラリと回避した。

「つ、その足運びは、ラオウ…」

ジャギとケンシロウがともに驚いている。これをチャンスと捉えた四葉が一気にお願いを始めた。

「お願いです！ どうか二人とも私の話を聴いてください！」

「……ジャギ……貴様は……」

「四葉！ てめえ！ 余計なことを言…お願い!! 聞いて！ 私は2020年から来たの！ そこでは核戦争は起こらなかつた！ こことは違う平和な世界があるの!! オレ様には関係ねえ!! 私は核戦争の無い世界を…それが、どうした?! あつちは、あつち！ こつちは、こつちだ！」

「……。あたたたア!!」

ケンシロウが蹴りを連発してくる。もう会話よりも戦闘を進めることに決めた様子の攻撃だつた。

「くくっ！」

ジャギが防御して間合いを取る。

(おい、四葉)

ジャギは声に出さず、体内にいる四葉へ声をかけた。四葉が緊張して謝る。

(はい、すみませんでした。どうか、司とサヤボボのことは…)

(その話じやねえ。四葉、お前も北斗神拳が使えるんだな？ ラオウ兄者の)

(はい)

(なら、いいことを考えた。お前がオレの左腕を操れ、オレは右腕で南斗聖拳を放つ。そんな混成攻撃ならケンシロウのヤツも混乱するだろう)

(あ、なるほど。使えるものは、何でも使うんですね。そういうの好きです。では)

ジャギと四葉が二心同体で構える。

「南斗！ 北斗！」

「……」

「ヒヤハツ！ 剣掌波！」

ジャギの両腕が左右バラバラの攻撃を放つた。右腕は南斗の動き、

左腕は北斗の技だった。

「な…」

ケンシロウが頬を斬られ、胸を打たれた。ジャギが得意そうに微笑む。

「どうだ、オレ様の拳は一人で二人分、北斗と南斗の合わせ技よオ」「……。あいかわらず、北斗神拳の真髓すら忘れたままか」

ケンシロウが構え直した。

「もう一度、そのくだらん技を見せてみろ」

「フフ、お望み通り地獄へ送つてやる」

（ジャギさん、二度目は通用しない気がします）

（だからって、他に手はねえんだよ）

（含み針とかは？）

（アレは最初にやつたけど、受け止めやがった。まあ、修行時代にも、やつたからな。ケンシロウも二度目はくらわなかつたんだろうよ）  
（つてことは北斗南斗の合わせ技も二度目はダメなんじやないです  
か）

（たしかに意表を突いただけで、ぜんぜん効いてねえからな。ヤツの  
目、明らかにカウンターを狙つてやがる）

「どうした。ジャギ、早くかかつてこい」

ケンシロウが待つて、四葉は諦めずにジャギへ問う。

（お二人が仲直りして共通の世界平和という目的のために協力してく  
ださる、という私の提案は無駄ですか？）

（無駄だ。せめて、ケンシロウを倒してからなら、お前の話も聞いてや  
ろう）

（ケンシロウさんを……、わかりました。私に作戦があります）

意外にもジャギが、とりあえずは話を聴いてくれる様子なので、四  
葉は停戦を諦め、乱世のならないに従い、ケンシロウを倒すことにした。

（私がケンシロウさんに色々と話しあげます。その間に、ジャギさん  
は攻撃してください）

（ほオ、ヤツの集中力を奪う作戦だな。いいだろう。はじめろ！）

「ケンシロウさん、どうか聞いてください！」

「……」

「本当のあなたは、もつと優しい人のはずです！ もし核戦争が起こらなければ、あなたはトキさんの鍼灸院で平和な時間を過ごしていましたのです！ 受付として！」

「トキ兄さんの……」

ケンシロウが有り得たかもしれない世界の可能性を見てきたように言われて、やや闘気を弱められた。そこへジャギが攻撃する。

（くらえ!! 北斗羅漢撃！）

ジャギが放った突きの連続は防御されてしまつたけれど、四葉もジャギも諦めない。四葉が切実に話しかけ、ジャギが狡猾に狙う。「西暦の2020年、私はケンシロウさんに出会いました。そのとき、あなたは言つた。自分は人を殴つたり蹴つたりといったことは嫌いですか。暴力は何も解決しませんよ、お嬢さん、と」

（死ねエ！）

「……」

ケンシロウは激しいジャギからの攻撃と、四葉からの言葉を受け流している。

「今のあなたは本当のあなたではない！ あなた自身、望んでいかつた世界の、望んでいなかつた自分なんです！ 私は、こんな世界を変えたい！だから、もう一度だけチャンスをください！ 私に時間到！」

喋っているのは四葉でも、声はジャギなので、とても気持ち悪い。

ケンシロウは拳を握り直した。

「ジャギ、寝言は地獄の底でわめいていろ！」

「うつ！」

（ぐう！ 強い、やはり昔のケンシロウではない…）

ジャギは反撃を受けて吹っ飛んだ。四葉も驚く。

（ううう……これが、あのケンシロウさんの……まるで、違う……八

王子の鍼灸院で受付をしていたケンシロウさんとは……まるで…）

（ああ、昔のヤツには、こんな凄味はなかつた。この非情さ……乱世

が、こいつを変えたんだ)

「最後に、これは…」

ケンシロウが鬼気迫る顔で近づいてくる。

「貴様によつて、すべてを失つた。オレの…」

「ケンシロウさん！ もう一度だけチャンスをください！」

「このオレの怒りだあ！！」

ケンシロウの渾身の怒りを込めた突きが、ジャギの胸を突いた。

「（うぐつ……この秘孔は、……新血愁）」

突かれたジャギも四葉も北斗神拳を知つてるので、突かれた秘孔の効果もわかる。それでもケンシロウは丁寧に説明してくれる。

「秘孔、新血愁を突いた。3日後、全身から血を噴き流して死ぬことになる!!」

さらにケンシロウは説明を追加する。

「貴様は、なぜか、秘孔、龍頷に対応する秘孔を知つていた。だが、この新血愁に対応する秘孔は心靈台のみ！ たとえ、それを突いたとしても貴様の死は変わらぬ!! 今までの罪！ ぞんぶんに悔いるがい!!」

そう言い放つとケンシロウは去つていった。

「ゴホツ…、ゴホつ…クソ！ 痛てええ…」

（ごめんなさい、ジャギさん…）

「よりによつて新血愁か…クソつ…」

（3日間……）

「クソつ!! ケンシロウめ!!」

（ううつ…痛い…）

「呻くなよ、余計に痛いだろ」

すでに秘孔による身体の変調が始まり、四葉とジャギは苦痛に震えた。

「ぐうう…」

（ううつ……今、この時代、この世界でラオウさんとトキさんは、どうしているんですか？）

「生きてるらしいくらいの情報しか知らねえ。携帯電話とかスマフォ

みたいな便利なものは無いからな。それに、たとえ兄者たちに会えても、新血愁の効果は打ち消せねえ。それは、お前にもわかるんじゃねえのか？ ぐふつ…」

（ケンシロウさんは、それをわかっていて突いたから……ううつ…）

苦しくて膝をつき、肩で息をしている。

「3日か、長えな……死ぬのか……クソつ!!」

（あああつ！ ……痛い……痛いいい！）

「そういうや、お前、オレが死んだら、お前は、どうなるんだ？」

（わかりません。このまま、いつしょに死ぬのか、元に戻れるのか。そもそも、ここに二つの意識があること 자체、もう私の体は死んでいるのかも知れない。……赤ちゃん……いたかも知れないのに……ぐすつ…）

「泣くなよ、余計に痛みが増す！ 四葉、お前、妊娠してたのか？」

（してたら、いいな、くらいに）

「相手はテツツーか？」

（はい）

「あのチエリーめ、しつかり決めやがって」

（私から誘つたの）

「なんだ、据え膳か」

（司……それに、赤ちゃん……五葉……）

「もう名前を決めてあるのが、単純なネーミングセンスだなあ」

ジヤギが立ち上がった。

「くだらねえこと言つてたら、だんだん痛みが治まってきたな」

（はい、今は少しだけ、という感じですけど）

「オレは死ぬとしても、四葉は戻れるといいな、あっちの世界によ」

（ジヤギさん……）

「あっちの世界……よかつたな、いろいろと……飯も美味かつたし…」

（一つだけ、助かるかも知れない方法があります。無駄かも知れませんが）

「おつ、いいこと言うじゃねえか！」

（本当に、どうなるかわからない。ただ、何もしないよりマシというだけの可能性ですけれど）

「もつたいぶらずに早く言えよ」

（この世界の岐阜県、飛騨高山に3日以内に到着できますか？）

「うーん……バイクで道路が崩壊してる箇所が少なければ、まあギリギリ」

ジャギが歩き出した。

（え、もう行くんですか？ 私、どんな方法か説明してないのに）

「どうせ、やることねえしよ。ギリギリって言つたら。まあ、バイクも

乗りたい気分だしな」

ジャギが階段を下りていく。下に行く途中で、手下たちの死体を、いくつも見た。すべてケンシロウに倒されたようで北斗神拳による惨殺死体だった。

「こいつらにも貧乏くじを引かせちまつたな。逃げ延びてるヤツがいるといいが」

（ジャギさん……少し人が変わつてませんか？）

「そうさなあ……もう死ぬつて決まるとなあ……悔しいが今からケンシロウを追いかけて最後の決戦を挑んでも結果は見えてるしなあ……飛騨高山……いいところだつたな。核攻撃を受けてないといいな」

外に出たジャギはバイクに跨つた。

ドルウウン！

「最後のドライブだ。行くぜ」

（はい）

二人は砂漠化した関東平野を走り抜け、山梨県、長野県を駆けた。日付が変わり、長野県に入った頃から日本アルプスが見えていた。（この世界でも山脈はキレイですね。雪が降り積もつて）

「そうだな。雪化粧した山脈の眺めが人生のエンディングみてえだ」

（小川の水もキレイ……雪解け水が、すごく透明で……放射能さえ、な

ければ)

雪解け水が小川になつてゐるけれど、周囲に植物はない。山脈も美しいけれど、森林限界以下の高度でも緑がない。強い放射性物質の存在を示していた。人も獸もない、死の山脈だつた。

「人にも出会わねえつてことは、このあたりは住めねえ、移動もできねえ、つてくらい放射能がきついんだろ。オレらも3日の命じやなきや、通ろうつて気にならないほどにな」

(それつて変じやないですか?)

「どこが?」

(核攻撃による放射線は7の法則で最初の49時間で100分の1になるはずなのに)

「ふーーん……そいいえば、シェルターに避難したとき、そんな放送があつたなあ」

(核戦争から、ずいぶん経つはずなのに、植物も生えないなんて……どうして)

「それは、お前、あれだよ。核の冬とか、なんとか。あと、このあたりに原発があつたんじやないか。そこにミサイル来てたら、しつこく放射能あるだろ」

(岐阜も、福井の原発が、すぐそこに……日本一の原発銀座だつたら)

「まあ、風向きによつてはヤバいかもなあ」

二人の不安は的中して飛騨地方に入つてからも植物は生えておらず、生命の気配はなかつた。美しかつたはずの緑は一つもなく、山々が岩肌を見せ、わずかな平地は砂漠化し、建物は朽ちかけている。

「あの婆アは生きてりや、今、いくつだ?」

(えつと……今が1997年だとすれば、お婆ちゃんは66才かな)

「婆アは婆アだなあ。四葉のオカンは?」

(お母さんは……26才だと思う)

「26才か、年頃だな。生きてるといいな」

(……)

「黙り込むんじやねえよ。何か喋つてろ。暗くなるだろ」

意外にも励まされて四葉は気を取り直して問う。

（年頃つて何よ。エツチなこと考えてない？）

「沙耶香も可愛かつたけど、お前は肉付きが足りないな。オレは、もう少しグラマーなのがいいんだ。しつかり成長した感じの女がよ。こうハイヒールが似合つてそうな脚でミニスカでよ。肩とか露出してると最高だな。髪もボリュームがあるのがいいな。ちょっと染めてるくらいの。お前らの学校、ホントみんな黒髪ばつかだつたな。本当に未来か？ すげえ保守的だつたな」

（東京とド田舎の違いだと思うよ、たぶん）

色々なことを一人で話ながら、とうとう糸守町に到着した。町に核攻撃はなかつた様子なのに誰一人いない。建物も半壊しているものばかりだつた。

「誰もいねえな」

（うん……予想はしてたけど……やつぱり福井の原発のせいみたい。かなりの放射能汚染があつて建物もボロボロになつてる）

「原発は攻撃目標になつたからな。まあ、仕方ねえよ」

（都心だから危険、田舎だから安全なんて、核戦争に関係ない。どこもかしこも傷だらけ）

「泣いても、待つても、はじまらねえな」

（使用済み核燃料まで最終処分せずに、いつまでも施設内においておくから爆撃されて舞い上がつて。戦争を想定してない安全基準に何の意味があるの……）

「お前、いろいろ勉強してんなあ」

ジャギが感心しているのか、あきれているのか、半分半分で言ったとき、バイクの燃料が切れた。

「ここからは徒歩だな。お、あれは四葉の家じゃないのか？」

ジャギが見覚えのある家屋を指したけれど、四葉は否定する。

（ううん、あれは隕石が落ちた後の仮住まいだ、本当の家は、こっち）

「この町は、いろいろ大変なんだな」

（その危機はお姉ちゃんが救つたから…………これが私の家）

宮水神社と宮水家に到着した。やはり半壊しているし、緑溢れる土地柄だつたのに草一本生えていない。

(……)

「入るのは、やめておくか？」

(ううん、見ておく。知つておくべきだと思うから)

「そうか。じゃあ、お邪魔するぜえ」

宮水家に入つてみる。家屋は雨戸がすべて閉じられ、玄関や窓にガムテープを貼つた後があるけれど、もう剥がれていてボロボロになっている。戸も壊れていた。中に入ると見覚えのある間取りで、すぐに居間を見た。

「まあ、こうなるはな」

(予想通りね……)

「あんまり気落ちするなよ。予想してたことだ」

(うん)

居間には白骨化した遺体が2つ、寄り添うように並んでいた。体格から一葉と二葉だとわかる。死んでからも肉は腐らず、ミイラ化して、肉がボロボロになつて白骨化したような様子で、死ぬ前に全身から出血していたのが、畳に残るシミで伝わつてくる。

「避難する場所もなく、家の中で死の灰をやり過ごそうとしたんだろう」

(う)

(核戦争があつたのが、1992年だとしたら、お母さんは21才)  
「それから5年ほどか」

(つ?!)

ずっと身体を動かす主導権をジヤギに任せていた四葉が何かを見つけて柱に駆け寄り、手で擦つた。そこには包丁で刻み記した文字があつた。紙にインクで書いたのでは放射線のために朽ちてしまうことを見越したような、しつかりと深く刻んだカタカナだつた。

「(ココハ…ホウシャセン…ツヨイ…ハヤク…イキナサイ…四葉)」

二葉が書き残したメッセージだつた。

「…うつうつ…お母さん…うつ…泣くなよ、オレの身体でよお、オレが泣いてるみたいだろ、バカ野郎…ぐすつ…」

溢れてきた涙をジャギが拭つた。四葉も気持ちを引き締める。

(ジャギさん、もう目的地へ急ぎましょう)

「そうだな、もう身体がもたねえ」

涙には血が混じっていたし、口の中も血の味がする。これが新血愁によるものなのか、放射線によるもののかは、すでにどうでもいい。残り時間が少ないことだけは確かだつた。宮水家を出ると、早歩きになり、ご神体のある山地へ向かい、駆けた。

「ハア…ハア…ペツ! ここか?」

血の混じった唾を吐いて、ジャギが問い合わせ、四葉が答える。

(はい、この巨石の中なの)

巨石の奥へ進むと、そこに奉納された口噛み酒があつた。

「意外と、ボロボロじやねえな」

封印は数年を経て古ぼけているけれど、町の荒廃に比べると放射線の影響は少ないようで形を保つていた。

(そつか……この御石様が放射線から守つてくださつて……)

「なるほど、こんだけぶ厚い石ならシエルター並みかもな」

ジャギが口噛み酒を手に取り封印を解いた。

「これを飲めばいいんだな?」

(はい、お願ひします)

「酒か……オレは下戸だからな。まあ、もう、どうでもいいが」

そう言つてジャギが一葉が造つた口噛み酒を飲んだ。

「……もう味は感じないな……オレの舌がダメになつてやがるのか……」

(お母さん……お願ひ……)

「…………何も起こらねえな」

(…………ごめんなさい、ジャギさん……)

「いや、もう期待してなかつたからいいぜ」

ジャギは外に出る。もう新血愁を突かれてから3日が過ぎようとしている。

「ダルいし、痛いし、もうダメだな」

(はい……すみません。無駄足をさせて)

「もう、いいって言つてるだろ。ぐつ…」

バフオツ！

ジャギの右肩から血が噴き出し、棘のついた肩パットが飛んでいく。

「痛てえな……クソ…」

(はい、痛いつ…ものすごく……これが北斗神拳の被害者の痛み…)

「オレ様の死に場所……ちょうど、墓石にいいかもな」

そう言つてジャギは巨石の上に登り、寝転がつた。

「痛てえ……この痛みとも、あと少しで、おさらばよオ……」

ジャギがマスクを取り去り、左前頭部を撫でた。

(とても痛い……苦しい……寒気がするのに熱い…)

「ああ、そんな感じだな…」

(これが北斗神拳で殺される人の……ううつくう……最悪の痛み……、核兵器も、北斗神拳も、本当に最悪の存在…)

「そうだな、そうかもな……なんで、オレ、こんな拳法、はじめたんだつけ。ああ、そうか、家が貧乏でクソリュウケンとこ養子にやられて……ああ、やばい、走馬燈きた」

ジャギが天へ手をかざした。

「死兆星が見えやがるぜ。あんなに、はつきりと」

(死兆…うううつ！)

「ぐあああ！」

(ああああ…痛い、痛い…)

「痛てえな……クソ……けどよお、四葉……お前といつしよで、よかつたぜ。なんか、痛み、半分つて氣もするからよ」

(半分……ジャギさん……あぐつ?!)

「あ～おぐつ！」

ジャギの全身から血が噴き出していく。

「(うわあああああああ!!!)」

いつしょに絶叫し、そして肉体が飛び散る。

「(ばわつ!!)」

血と肉片が巨石の上に拡がった。

(……)

ふわりと四葉は意識が上へ登るのを感じた。

(……ジャギさんは……)

四葉は半透明のジャギを見つけて、手を握り、そして手を引いた。

ジャギは布団の中で目を覚ました。

「…………なんか悪い夢だつた気がする……けど、女も出てきたような」

寝返りをうち、身体の痛みを思い出した。

「痛てえ、リュウケンめ。あんな突きをくれやがって」

起き上がつて状況を思い出した。訓練中に突きを受け、気絶して寝ていたのだった。

「クソ……」

洗面台で顔を洗つて、鏡を見た。

「……オレ様の顔……」

一瞬だけ、左前頭部が秘孔を突かれて破裂しかかった顔を見たような気がする。

「クソ、頭も打つてるのかもな」

「ジャギ兄さん」

ケンシロウが入室してきて声をかけてくる。

「大丈夫ですか？ ひどく魔されていましたが」

「あ！ ケンシロウ、てめえ！」

ジャギはケンシロウの胸倉をつかむ。その顔に怒りが浮いたけれど、すぐに困惑へ変わっていく。

「てめえ……てめえ、何だつける……なんか、すごくケンシロウがムカつく気がしたんだが……何だつたか……」

「勘弁してくださいよ」

「……。貴様、なぜ、ここにいる？」

「夕飯が、できたことを伝えに来ただけです」

「そ……そとか……飯か…」

ジャギは手を離した。部屋を出てケンシロウと食堂に向かい一つ問う。

「おい、ケンシロウ、今年は何年だ？」

「え……さあ、あまり、そういうことを気にしないので、すいません」

二人で食堂に入ると、トキとラオウ、リュウケンもいた。

「兄者、今年は何年なんだ？」

「……」

ラオウが無視して食べ始め、トキが答えてくれる。

「元年と呼ばれるだろうね」

「がんねん？」

「1年ということだよ、ジャギ」

「1年、2001年なのか？」

「ジャギ……さきほど、ひどく頭を打つたようですね」

「ジャギ兄さんは、かなり魔されていましたよ」

「そんなことはいいから、今は何年なのか、教えてくれ！」

「今年は平成元年となるよ」

「平成……西暦でいうと？」

「1989年……」

「いつたい、どうしたというのです？」

「あ……いや……何だつけ……」

ジャギは頭を撫でながら着席した。テーブルには大きな丼が置いてある。

「ケンシロウ、お前、またこれか」

「すみません。時間がなくて」

「けつ、まあいい」

ジャギは丼を食べ始めた。

「このよオ、魚肉ソーセージ丼よオ、安っぽい味だよなあ。テキトーに切った魚肉ソーセージとよ、卵とタマネギで親子丼みたいにして

よオ、ほんの少し鰹節がかかつてよオ。飛騨牛コロッケとはいわねえからよオ、もう少しなんとかならねえのかよ」

文句を言いながら食べるジャギの両頬が涙で濡れた。

「ジャギ兄さん、どうして泣いているのですか？」

「ああん？」

「言われて頬に触れてから気づいた。

「オレ様が……なぜ……」

トキが心配そうに見てくる。

「さきほどの模擬戦で、秘孔に影響があつたのかもしれない。食事が終わつたら私の部屋に来なさい」

「お……おう」

ジャギは食事が終わると、トキとラオウの部屋に入った。部屋にいたのはトキだけでラオウの姿はない。

「ラオウ兄者は？」

「筋トレの続きをしているよ」

「頑張るなあ……」

「そこに座りなさい」

トキが指した椅子に座つた。

「こちらを見て」

ジャギは素直にトキと目を合わせる。

「……うむ、とくに異常はないようだ。秘孔の影響も見られない」

「そうか。よかつたぜ」

「だが、今夜は早めに休みなさい」

「あいよ」

ジャギは言われたとおり、早めに寝て、いつも通りに起きた。

「……夢だつたのか……変な夢だつた」

「ジャギ兄さん、夕べも麿されていましたよ」

二段ベッドの上にいるケンシロウが眠そうな目で教えてくれる。

「かなり大声で何度も……おかげで、疲れなかつた」

「オレ様は何か言つていたか？」

「えーっと……四葉、とかなんとか」

「四葉……そう……四葉……つて何だつけなあ……」

もう記憶が曖昧でわからない。けれど一週間も同じような夢を見たジャギは再びトキに診てもらう。

「ほう、毎晩、同じような夢を」

「ああ、これつくらいの小せえ女だ。そいつが何度も何度も、何かをお願いしてきやがる」「どんなどとを?」

「いや、それを忘れちまうんだ。かなり大切なことみてえで泣いて頬みやがる」

「なるほど」

一通りにジャギを診たトキは優しく領き、義弟の両肩に触れた。

「ジャギ、それは愛というものだ。この病は私には治せない」

「……。そ、そうか? 違うような気がするぜ、トキ兄者。ケンシロウといっしょにするなよ。あいつ、毎晩、ユリアに手紙を書いてから寝てやがるんだぜ」

「うむ、ともかく身体に異常はないよ。どうしても気になるなら起きた直後にでも夢の内容をメモしてはどうだろう? 枕元に紙とペンを置いておくといい」

「メモねえ……」

ジャギは半信半疑だつたけれど、部屋に戻るとケンシロウが手紙を書いていたので命じる。

「おい、オレ様にも紙とペンをよこせ」

「はい、どうぞ。誰かに手紙を書くのですか?」

「余計なことは気にしなくていいんだ!」

とりあえず秘孔を外して蹴りを入れた。ケンシロウは腿を蹴られて、痛そうに呻きつつも、つい問う。

「ううう……、もしかして、四葉さんですか? ……」

ケンシロウが探るような瞳でジャギを見てくる。ジャギが苛立つた。

「なんだ、その目は?! それが兄に対する弟の目か?!」

もう一発殴ると詮索を止めて静かになつた。

「つたく」

ジャギは二段ベッドの下へ潜り込むと、トレーニングで疲れた身体を休めた。翌朝、ジャギは見慣れない女子のような字で書かれたメモを見た。びつしりと細かい字で用紙いっぱいに書かれている。それを読み終わつたジャギは立ち上がつた。

「……」

荷物をまとめているとケンシロウが起きる。夕べも眠れなかつたようで眠そうな目をしていた。

「ジャギ兄さん、どこかへ？」

「少し行くところがある。必ず戻ると兄者やオヤジたちに伝えておいてくれ」

「わかりました。……四葉さんのところですか？」

「……」

ジャギが視線を送るとケンシロウは防御の構えをとる。ジャギは攻撃せずに答えてやつた。

「似たようなものだが、違う。じゃあ、オヤジたちによろしくな」

ジャギは義弟の頭をポンポンと叩いた。

「ケンシロウ、お前は、その甘い感じがいい。今まで、けつこう何発も蹴つたり殴つたりして、すまなかつたな。じゃ」

「ジャギ兄さん……」

ケンシロウを置いてジャギは出発した。

五ヶ月後、ジャギはビジネスホテルの一室でテレビを見ていた。テレビはニュースを伝えている。

「米戦艦アイオワの砲塔爆発事故で乗組員47人が死亡した件で当局は乗組員の一人が自殺をはかるため爆発物を仕掛けたのが原因と発表しました。続いて、アフガニスタンからソ連軍が撤退を完了したニュースです。9年あまりにおよぶソ連の軍事介入からボリス・グロモフ駐留軍司令官が最後の部隊を率いてアフガンとの国境を流れるアムダリア川にかかる友好の橋を渡り撤退いたしました。ソ連軍の

介入は79年から10万3000人の兵力を常時投入、アフガン政府軍と協力してムジャヒدين・ゲリラと戦闘、約1万5000人の戦死者を出したほか、アフガン市民を含めた9年間の死者は100万人をこえるもようです」

ジャギはベッドで寝返りを打った。

「四葉、これで、お前の狙い通りなのか……オレには、さっぱりだ」

「またカンボジア領内に侵攻していたベトナム軍の残存部隊2万6000人が撤退を開始し、78年以来10年にわたるカンボジア侵攻に終止符がうたれることです」

「さてと、そろそろ帰らねえとリュウケンに殺されるな」

ジャギは潜伏していたビジネスホテルを出ると、まっすぐに八王子の寺院へ戻った。中に入るとリュウケンとトキがいた。

「どこへ行つておつた。この愚か者めが」

「ジャギ、どこへ行つていたのです？」

「どこだろうと、オレが破門になることに、かわりはねえんだろ？」

「…………」

トキが厳しい目で質問してくる。

「ジャギ、よもや、遁走中に北斗神拳による暗殺を行つてはいまいな？」

「ああ、撃は破つてねえよ」

ジャギは平然とウソをついた。四葉の依頼を受けて政府の高官、大企業家、ロケット技術者を3人、自殺や事故にみせかけて殺していた。ただ、ジャギとは無関係の人間で、金銭の動きもない、バレるはずがないと堂々としている。

「オヤジ、もう伝承者は決まつたのか？」

「決めた」

リュウケンが答え、ジャギが頷いた。

「やつぱり、ラオウ兄者か」

「いや、トキに決めておる」

「つ……歴史が……揺らいでやがるのか……」

「今の世にラオウでは激しすぎる。ケンシロウでは甘すぎる。トキが、ちょうどよいのだ」

「そうかい」

「北斗神拳伝承の掟により、ジャギ、貴様は北斗神拳に関する記憶を消すことに同意するが、でなければ拳をつぶすか、また北斗を名乗ることも許されん」

「ケンシロウとラオウ兄者は、どうした?」

トキが答える。

「ケンシロウは記憶を消すことに同意してくれたよ。ラオウは……姿を消してしまった」

「そうか……」

「ジャギ、私はお前と戦いたくはない」

「トキ兄者なら、そう言うだろうな。ああ、オレも記憶を消す方で頼む。名も……ケンシロウは、どうした?」

「田中ケンシロウとしている」

「……田中……オレは、どうなるんだ?」

「山田か、それとも希望があれば多少は融通する」

「山田もイヤだなあ……ううん……宮水もオレには似合わねえし……飛騨も画数が多くて書くとき面倒だな。そうだ、高山というのはどうだ?」

「高山ジャギか。お前が、それでよければ、そうしよう」

「ああ、頼む」

「では、ジャギ、こちらへ」

トキが促し、ジャギが近づく。

「今から北斗神拳に関する記憶を奪う。頭の中で北斗神拳に関することをすべて考え、思い浮かべるようになさい。うまくいけば一度で済みますが、失敗すれば完全に消えるまで何度も突くことになる。下手をすると、ジャギ、自分が自分であることも忘れてしまう。だから、素直に北斗神拳に関する記憶を消すと念じなさい」

「ああ、わかつた」

ジャギが目を閉じるとトキが秘孔を突く。

「むん！」

ジャギの側頭部を4本の指で突いた。

「ぐつ……」

「ジャギ、どうですか？」

「どうと言われても……痛かつた……」

「構えてみなさい。戦いの構え、お前の得意な攻撃で」

「オレの……」

ジャギが構えをとる。それはケンカのような構えだつた。

「蹴つてきなさい」

「いいのか？ トキ兄者」

「さあ」

「……おら!!」

ごく普通の蹴りだつた。

「うむ。秘孔というものを知っていますか？」

「非行？ タバコを吸つたりとかか？」

「一度で済んだようです」

トキがホツとしたようにリュウケンを見て、リュウケンも頷いた。

「で、これからオレは、どうすればいい？ なんか、いろいろ大事なことを忘れちまつた気がするんだが」

「私は、この寺院を守る傍らで整体院を開設するつもりです。この世には病に悩む人間がなん千なん万といふ。そんな人たちの役に立てる、と

「で？」

「そこで受付を募集しているのですが、ケンシロウといつしょに働く気はありませんか？」

「ねえな。くだらねえ」

「そうなると、支度金と新しい高山姓の住民票を渡しますので、ここから出て行つていただくことになります」

「おう。それがいい」

「わかりました」

トキが義弟の進路相談を終え、リュウケンが懐から出した封筒をジャギに渡した。

「ジャギ、これまで…」

「あばよ」

ジャギはリュウケンの別れの言葉を聞かず、背中を向けた。寺院を出て八王子の街を歩く。とりあえず、封筒を開けてみた。

「……一万円かよ……リュウケンめ…」

文句を言いながらトンカツ店に入り、食事を摂る。

「トンカツ定食大盛り、お待ちどう」

「ようやく、あの魚肉ソーセージ丼とも、おさらばだな」

ジャギは美味そうにトンカツを頬張り、食事を終えると爪楊枝を使う。

「…………」

爪楊枝を使つていて、ふと思いついた。

「ブツ！」

勢いよく爪楊枝を噴き出した。狙い通りに飛び、紙ナップキンに刺さつた。

「うむ、3本くらい同時でもいけるかも」

今度は3本の爪楊枝を口に入れる。

「ブブブツ！」

狙い通りには飛んだけれど、1本がテーブルに当たり、どこかへ飛んでいった。

「オレ、こんな特技があるんだな。これは使えそうだ」

とりあえず爪楊枝を10本ほどポケットに入れておく。ジャギが伝票を持つて立ち上がったときだつた。

「店員さん、この味噌汁に爪楊枝、入つてるんすけど」

男子高校生が店員にクレームをつけている。店員だつた中年女性は人情味のある対応で謝つた。

「あらあら、ごめんよ。どつから入つたのかねえ。すぐ交換するね。あと今日はね、タダでいいから許してくれよ」

「え？ ヤツタア！ マジで?! おばちゃん、サンキュー！」

「これに懲りずに、また来とくれよ」

「兄貴、ラツキーフすね！」

「ついてるな、今日！」

男子高校生が後輩と喜んでいる。ジャギは自分のせいかな、と思つたけれど黙つてレジの前に立つ。

「おあいそ」

「あいよ」

支払いを済ませると所持金が8320円になつた。再び爪楊枝を咥えつつ街を歩く。

「これから、どうするかな……岐阜でも行くか……って、なんで、オレ、岐阜なんかに興味があるんだ……あんなド田舎……しかも、この金じや、もう行けねえだろ」

目的地も今夜の泊まるあてもなく歩いていて、ふとプロレスのポスターが目に留まつた。見てみれば、ちょうどプロレスジムの前だつた。

「プツ！」

爪楊枝を噴くと、ポスターに突き刺さる。

「……オレ、意外と鍛えてるな……何してたんだつけ……」

自分の腕を見ると、かなり太い。胸筋も腹筋もバキバキにキレている。

「寮あり、飯つきか……やつてみるか」

ジャギはジムの入口へと進んでいった。

五年後の1994年、ジャギは高級ホテルのスイートルームで、お気に入りのキヤバ嬢たちとノンアルコールのシャンパンを開けていた。

「乾杯だ！」

自分の勝利を祝いながら、今夜の試合の録画を大型ブラウン管テレビで見ていく。

「さあ、はじめました。注目の一戦！ 高山ジャギVS馬場ジード、総合格闘技界のトップを決める一戦、プロレスから転向してきたジャ

ギ選手と、対するはボクシングからのジード選手。この二人、どうで  
しょう」

「ジャギ選手はプロレス時代、相當に卑怯な勝ち方をしてきましたからね。含み針のジャギという異名もあるほど。ですが、総合格闘技に入るにあたって、そういうつた卑怯技を封印して、ごくまつとうな戦い方に変化しているようですから、これは、わかりませんよ」

「このジャギ選手ですが、プロレス以前は、どこに所属していたか不明でありながら相当な力量があつたとのことですね」

もう終わつた試合なので、それほど真剣に見ていない。キヤバ嬢たちと談笑しながら、乳房を揉んでいると、1ラウンドで試合終了となり、テレビのチャンネルを変えた。

「3日前に落馬事故で亡くなつたと報道されました北海道すすきののクラブ・ユダに所属していた人気DJラオウこと北斗ラオウさんの死因について、北海道警察は遺体に殴り合つた痕などの闘争痕跡が見受けられたことから、詳しく述べ、東京八王子の整体院経営、北斗トキ容疑者を全国に指名手配しました。一人は養親からの相続で以前から争つており、事件当日にJR北海道から東京八王子駅まで移動する北斗トキ容疑者が、複数の監視カメラで確認されており、また殴られたものとみられる打撲傷や出血もカメラに映つており、警察では殴り合いの末にラオウさんを殺害、その後に落馬事故にみせかけて逃走したものとみて、手配しています」

「……兄者たち……」

ジャギがテレビに入つていると、手下の一人が声をかけてくる。

「ジャギ様、お電話が入つております」  
「おう」

ジャギは300グラムほどの大きな携帯電話を受け取ると、発信元が公衆電話からだつたけれど、すぐに出た。

「オレだ」  
「ジャギか……私だ。テレビは見たか？」  
トキの声だつた。

「ああ、たつた今」

「そうか……私は伝承者として大きな過ちをおかしてしまったのか  
かもしれない」

「伝承者？ つて、何の？ あの寺のか？」

「ああ、そうか、そうだつた。そうだつたな。ジャギ、私は警察へ行く  
前に、お前に会つておかねばならない」

「おう、いい弁護士を紹介するぜ」

「いや、そういうことではなく、とにかく会つて話そう。二人きりで」

「……わかつた」

ジャギは電話を終えると、トキが指定した埼玉県の山寺へ向かつた。行つてみると寺は無人で夜中なので暗い。

「兄者アア！ いるかあ！」

ジャギが大声で呼ぶと、気配もなく無から生じたようにトキが現れた。

「うわっ?! ビビつた。急に足音もなく……」

「これは無想転生、哀しみを知つた者のみ体得できうる北斗神拳の究極奥義だ」

「ほくとしんけん?」

「今からジャギ、お前の記憶を戻す」

「記憶を……？ たしかに、オレには、なにか、忘れちゃいけねえことを忘れてるような、そんな感じはあるが……」

「ジャギ、私を信じ、目を閉じて、忘れていることを、大切なことを思い出す気持ちを頭にめぐらせ、念じていってくれ」

「……わかつた。兄者は触れるだけで人を治したりするからな、まあ、信じるぜ」

ジャギが目を閉じるとトキは指先で頭部を突いた。

「…………つ…………四葉…………ケンシロウ……、そうか……そんな世界も……」

ジャギが深い哀しみを瞳に宿した。

「兄者……すべて思い出したぜ。すべて、な」

「そうか。では、これより北斗神拳の伝承者のみに知らされている秘孔と奥義を伝授したのち、お前が私の記憶を封じよ。そして、私を警察に」

「……わかつた。意外と便利に記憶を封じたり、戻したりできるんだな」

「北斗神拳の歴史は2000年、一子相伝、ある程度のバツクアツプがなければ、続かなかつことでしょう」

「それも、そうだな」

夜明けまでトキと過ごしたジャギは埼玉県警に義兄と出頭すると翌日、岐阜県飛田高山の糸守町へ新幹線で向かつた。迷うことなく宮水家を訪ねてみた。

「すいません、ここに、宮水二葉つて人、いますか？」

「ここにちは」

二葉が待つていていたように庭で出迎えてくれる。まだ23才のうら若い女性で、よく四葉に似ていた。

「私が四葉の母です」

「そうか……あんた……未来がわかるんだな。オレが今日、ここに来ることも」

「すべてではありませんが、ある程度わかります」

「じゃあ……自分が……」

「自分の寿命のことも知っています」

「…………少し身体を診せてくれないか」

「ありがとう。でも、無駄です」

二葉は礼を言い、無駄と言いつつも、ブラウスを脱いで上半身を見せてくれた。しばらく診てジャギが詫びる。

「…………すまねえ……オレには何もできねえ。たぶん、トキ兄者でも」「ジ厚意は感謝しますよ」

そう言いながら二葉がブラウスを直していると、俊樹が家から出てきて驚いた。

「二葉?! その男は?!」

「お客様です。大切な」

「いや、でも、お前、今、服を……」

俊樹は35才にしては、少し老けた顔で新妻が見知らぬ男に肌を見せていたことを詰問しようとしたけれど、ジャギと目があつて、おそらく体格が立派なので穩便に済ませることにする。

「……んにちは」

「ああ、こんにちは。えつと、町長の旦那だつけ……」「は？ 私は学者ですが」

「ジャギさん」

二葉が少し怒った顔で見つめてくる。

「ああ、そうか……そうだな……黙つてなきや……」「あなたにお願いがあります」

「お、おう！ 何でも言つてくれ！」

「今から26年後……」

二葉は話しかけて俊樹の視線に気づいて告げる。

「トッシーは少し離れていて。私たちの声が聞こえないくらいの距離に」

「……けど……二葉……」

さつきまで肌を見せていた新妻と見知らぬ男が密談することに強い抵抗を覚える俊樹だったけれど、二葉は容赦ない。

「離れていて。あと、ジャギさんとの話の次には、トッシーとも大切な話があるから、どこにも行かないで待っていて」

「……わかつた」

俊樹が離れていくと、二葉は話を再開する。

「今から26年後の2020年10月18日、この町の病院に入院して3日目になる四葉の意識が戻るよう北斗神拳で刺激を与えてください」

「わかつた。……あなたは北斗神拳のことまで、知つてるのか……」「リュウケンさんには何度か、暗殺を依頼したことがあります。お安くないので大変でしたが」

「……そんな優しい顔して殺したいヤツがいたのか……」

「100万人を助けるために一人なら、初步的なマキヤベリズムです」

「…………まあ、そうかもな……二葉は、たつた3人で億単位だつた。いや、全世界を救つた。天使様みたいなもんだ」

「私たち宮水の巫女は半神半人です。半分は人、半分は神、人として心が痛みもしますが、報いは寿命の半減で受けてもいます」

「そうだな…………えつと、10月18日だつたな」

ジャギは忘れないようにメモをする。メモが終わると、二葉は糸守町の観光マップを差し出した。

「キヤバクラはありませんが、キレイな水なら、たっぷりありますよ」

「そいつはいい」

「あとで案内します」

そう言つてジャギと別れると、二葉は俊樹を呼ぶ。

「トツシー」

「ボクに話つていうのは？」

「次の次にある町長選挙に立候補して町長になつて」

「は？」

「今から近所に愛想良くしたり、子供ができたらPTAの役員とかも積極的に引き受けておいて」

「いやいや意味不明なんだけど！ ボク、学者だよ！ 民俗学者！」

「二葉も知つてるよね？ 政治学、経済学とかじやない、民俗学だよ！」

驚いて慌てる俊樹へ、二葉は断定的に告げる。

「私と婚約したとき、言つたよね。理由は説明しない。ただ実行してつて」

「けどさ、民俗学からつて進路として無茶だよ……」

「それはそれで役に立つから、とにかく準備しておいて

「…………どんな役に立つんだよ？」

「父親に権力がある方が、私たちの子供に役立つでしょ」

「…………それつて子供が間違つた風に育たない？」

「いいことしか使わないはずよ。たとえ周囲が理解してくれなくて

も、胸をはつて生きられる子に」

「…………わかつたよ…………町長つて…………ヤダなあ。責任重そうだ  
し…………しがらみとか、面倒そう…………学者のままがよかつたなあ…………つ  
ていうかさ、この町で町政にかかるつてことは、あの勅使河原の  
オツサンと付き合わなきやいけないよね…………あのオツサン、町内会の  
飲み会でも、しつこいしさ…………二葉の口噛み酒を一口でいいから欲  
しいとか言つてくるからイヤなんだけどなあ…………」

ぼやいている夫を置いて二葉は、せつかく訪ねてくれたジャギを歓  
迎するために飛驒牛コロッケが美味しい店を教えに行つた。

## 第5話

2020年10月18日の夕方、市町村合併の賛否を問う糸守町町議会議員選挙の投票日に、三葉は夫の勅使河原克彦と選挙事務所にいた。二人とも口数は少ない。

「…………」

事務所は普段は農業倉庫になっているけれど、俊樹が町長選挙のさに使うこともあつて選挙事務所としての立派さは他の候補をしのいでいる。多数のパイプ椅子が並び支持者と運動員が談話しつつ時間過ごしている。テーブルには本来は公職選挙法違反の疑いがもたれる寿司の出前やヤカンに入つてお茶のようにカモフラージュされている酒もあり、すでに軽い飲み会の雰囲気になっていた。

「…………」

ひな壇の上に置かれたパイプ椅子には三葉と克彦が座つていて、まるで結婚式を思い出すような位置関係で町民と対面しているけれど、これが結婚式ではないのは背後が金屏風ではなく、必勝と書かれた応援メッセージと三葉の笑顔を撮つて修正加工もした選挙ポスターが並び、片目のダルマが鎮座していることで痛いほどわかるのに、それでもやつぱり町民たちは結婚式のことを思い出してヒソヒソと会話している。話題は東京で結婚式をあげた四人が、すぐに離婚してしまった、今は三葉と克彦が夫婦となつてていることで、これまで何度も世間話のネタになつたことだつた。町の人間全員が三葉と早耶香、克彦の三人が子供の頃から仲が良かつたことを知つてゐるし、不倫のことも知つてゐる。

「あと一時間か」

俊樹が腕時計を見てつぶやいた。夜8時で投票は終わり即日開票となる。人口の少ない町なので1時間もなく当確が出るはずで、定数7に対して8人が立候補し、うち三葉を含む4人が合併に反対、残り4人が賛成という、まさに町を割る選挙だつた。事前の予想では合併反対が8割を超えるものの、三葉の不倫や俊樹の多選に対する批判票

と選挙運動中の入院などの不安要素が大きくなっている。

「長い一日やな……」

克彦が居心地悪そうにパイプ椅子から立ち上がり、やや離れたところにいた俊樹に近づいて耳元で問う。

「お義父さん、ずいぶん豪華な寿司が並んでるけど、腐敗や言われんでしょうか」

「それは大丈夫なはずだよ。他の候補もやつてることだから。三葉だけ吊し上げるわけにはいかないから、問題にすれば、すべての候補が選挙違反ということになる。みんな心得ているさ。出前を注文している仕出し屋だって町内の者ばかりだ。書類の上では巻き寿司といナリ、オニギリになつて いるさ」

「……巻き寿司とイナリ、オニギリつて……」

克彦はテーブルに並んでいる特上寿司を困惑した目で見る。山奥ではあるけれど、富山湾は遠くない、甘エビ、ハマチは当たり前に、大トロやウニさえ提供されていて、どう見ても巻き寿司などには見えない。克彦は高校生の頃から疑問に思つていたことを、思い切つて義父となつた俊樹に質問してみる。

「…………それを腐敗、言いませんか？　何年か前、富山県の議員もえらいことなつて、辞職の連発でしたやん。ヤカンの中、お酒なんでしょ？」

「うむ、あれは誰かが勝手に持ち込んだもので、私たちは感知していない。持ち物検査をしているわけではないからね。持ち込んだ飲食物で楽しんでもらうのは自由だよ」

「えええ……裏で、オカアが日本酒を入れてるの見たんですけど」

言い募る克彦の肩に俊樹が手をおいた。

「見間違ひ、記憶違いだと思いなさい。田舎の選挙とは、こういうものなのです。胸を張つて堂々としていれば大丈夫。さ、君も候補者の夫として、もつと胸を張りなさい」

「……はい……」

俊樹の表情は穏やかなのに目が怖いので克彦は黙ることにした。克彦がパイプ椅子に戻ると、動いたことで町民たちの話題も克彦のこ

とになる。

「テツシー、お前、なんで、そんなボロボロなん？　夫婦喧嘩でもしたんか？」

かつての同級生が笑いながら訊いてくる。克彦は顔や腕、全身にアザがあり、どう見ても殴られたり蹴られたりしたような様子で絆創膏などを貼っていた。

「階段で転んだだけや」

本当は4日前の朝、登校中だつた四葉とすれ違つたさい、眉毛が気に入らないという理由でタコ殴りにされたのだつたけれど隠している。ただ、すれ違つただけなのに四葉は、貴様のその眉毛が弟に似ている…と忌々しげに言つてきた。義妹から弟に似ていると言われて、何が何だかわからないうちに立てなくなるほど打ちのめされていた。むしろ、克彦と司は兄弟なので顔は似てゐるけれど、眉毛だけは違うというくらいで、太い眉の克彦と細めの司は有名だつたのに四葉は蹴つてきた。克彦は蹴られながら、たぶん三葉と不倫の末に再婚したことなどが気に入らないのだと解釈して誰にも被害は訴えていない。克彦の反応が面白くないので町民たちの話題は別のことへ移る。

「それはそうと最近、四葉ちゃんの様子おかしなかったかいな」

「しーつ…3日前から入院しとうよ。意識不明やて」

「あれま？　入院しようとは三葉先生の方やないとか？　今は座つてはるけど、やつれてはるし。選挙ちゅーんはプレツシャーなんやねえ」

「やつれはつて高校生やつたころみたいにシューとしてはるね。この前までは、ちょっと太りすぎやつたけん選挙ポスターも修正されとるけど、今なら無修正で絵になるわ」

町民たちはヒソヒソと話しているつもりだけれど、なんとなく何を言われているか、三葉たちの耳にも響いている。

「三葉先生、いつときは危篤やドクターへりが来とつたらしいよ」「ああ、あのときのへり」

「ほんで、次は四葉ちゃんが入院で、かわいそうにねえ。お母さんも早くかつたし。家系なんかねえ」

「いやいや一葉さんはピンシャンしてはるし。そういうや一葉さん、やつぱり事務所に顔だしはらへんね。町長選のときも知らん顔しはるし」

「四葉ちゃんも姉ちゃんの立候補が気に入らん顔してはつたらしいよ。えらい荒れてたて」

「まあ、高校生ちゅーんは、そんなもんじやろ。三葉先生かて、その時期はツンとしてはつたし」

「四葉ちゃんの荒れようは、ひどいらしくて。男の子とまでケンカしたり、うちの子が言うてたけど、授業中も机に足あげて教師を睨んでたて」

「あの子て、学年トップやんね」

「勅使河原さんとこの司くんとトップ争いしどうくらい賢い子ね」

「よっぽど、姉ちゃんの立候補が気に入らんかねえ」

「立候補だけやのうて、不倫ちゅーのが若い女の子には許せんやろ。氣難しい時期やもん」

少しでも面白い話題は、すぐに町全体へ広まるし、結局は不倫のことに話が戻つてくる。こんな風に集まつて時間をつぶすことしかできなきときは、とくにだつた。

「……」

三葉は黙つて前を見ている。今は選挙の結果より、四葉の容態が気にかかる。息をしなくなつた妹へがむしやらに人工呼吸したおかげなのか、すぐに自発呼吸は取り戻してくれたけれど、いまだ意識は戻らない。もう3日になる。入れ替わりのようなものなら、せめて24時間で回復してくれるかと期待したけれど、2日目になつても、3日目になつても呼びかけても、頬を撫でても起きてくれない。当初、何かと戦つているかのように手足をバタつかせて殴つたり蹴つたり掌打を放つような動作がみられたけれど、今は手足に力はなく、ぐつたりと動かなくなっている。

「……四葉……」

毎日、少しは見に行つてはいるけれど、選挙期間中ということもあって一葉と沙耶香、司が見ていてくれる。今も見に行きたい気持ちを耐

えて座っている。そして、もう一つ、駆けつけたいところがあつた。

「……サヤチン…」

謝りたい。謝りに行きたい。高校時代に入れ替わった男性と東京で再会した日、感極まつてキスをして、キスをするうちにお互いの服を乱し合つて、路上で性交しかけていたところを通りがかりの女子高生に笑われて、最寄りのラブホテルで交わつた。その日のうちに結婚しようと言い合つて式場巡りもしたけれど、東京の素敵な式場は予約が埋まるのが早くて見つからなかつた。そんなとき、すでに予約していた克彦と早耶香が、いつしょに挙げないかと提案してくれた。二人も占いでは来年に延ばした方がいいと言われたらしく、東京のせわしなさと冷たさ、それぞれに部屋を賃貸する家賃の高さに疲れていたこともあつて早めていた。四人で最高に幸せな結婚式をして、その翌日に克彦と早耶香はハワイへ発つたけれど、三葉たちはパスポートが間に合わず、予算的にも厳しかつたので、来年行こうね、と約束して、それぞれの会社へ出勤した。そして三葉は寿退職する都合もあつて帰りが遅くなり、10時過ぎに新居へ戻つたら、タバコの匂いがした。あえて質問はしなかつた。けれども翌週にも同じことがあつて追求するとミキが遊びに来ただけだと開き直られた。その後の記憶は、あまりない。日に日に険悪になつていく夫婦関係と生活リズムや習慣の違い、ろくに交際期間もなく同居を始めたので、すぐに二人とも口をきかなくなつた。必要なことは朝夕にメモを残して伝え、入れ替わつていた時よりも意思疎通しなくなつた。最後のメモは乱暴な字で、お前は出て行け、と書かれていて返事は書かずに飛び出した。行くあても現金もなくて相談した早耶香と克彦のマンションに泊めてもらつた。二人とも優しかつた。

「……私は……最低だ……」

優しい二人に甘えて何泊もするうちに、早耶香がいないとき克彦と手を握り合つたり、キスをした。昔から好きだつたと言われて嬉しかつた。あの日、変電所を爆破するほどの決断をしてくれたことも今も忘れていない。だから、早耶香が帰宅してきた気配が玄関からして

もキスを続けた。口で言うより、見せた方が早い、そんな計算をして。

「……刺し殺されたって……おかしくないことをして……。私は、するい女……サヤチンの性格につけ込んで……」

やや受け身なところのある温和な性格の早耶香に高校時代も町営放送のジャックで矢面に立つてもらい、言い逃れできない、逃げることもできない放送室を担当してもらつたし、そして新婚の夫を盗んでも早耶香なら激情して刺してきたりしない、高校時代と同じく損な役回りを泣きながらでも引き受けてくれると、計算していた。

「……サヤチン……ごめん……本当に、ごめんなさい……」

キスしていた二人を見たときの早耶香の目は脳裏から消えない。驚きと怒り、深い哀しみ、あまりに深い哀しみに沈み、早耶香の気配がその場から消えていくようにさえ感じた。そして、その瞬間から早耶香は声が出せなくなつた。罵られたり、怒鳴られたり、泣かれたりすることは覚悟していたけれど、何も言われず、何も言えなかつたようで、あとは弁護士に任せて終わつた。早耶香へは家一軒が買えるほどの慰謝料を両家の親から払つてもらつたけれど、そんなことが慰めになつていなければ、わかっている。早耶香が学生時代から、ずっと克彦を想つていたことは誰よりも三葉が知つていたのに、裏切つてしまつた。今になつて深く悔の海に沈んでいる。

「8時になりました。皆様、今しばらくのお付き合いをお願いいたします」

俊樹が投票が閉め切られたことを告げた。

「三葉、お前も何か挨拶を申し上げなさい」

「……はい」

三葉は立ち上がりマイクを持ち、支持者たちを見る。町の運命がかかつた選挙なので有権者には票割りがされている。合併反対派の候補について町を4区画にわけて票割りがなされているので、ここにいる支持者は三葉個人を支持しているわけではなく、糸守町の合併に反対している人たちという方が正確だった。逆に、ここにいないということは賛成派で、すなわち町を売つた人間というレツテルが貼られ

ることになるので、通常の町議選よりも何倍も人が集まっている。ただ、近所に家のある名取家の人は、さすがに誰もいない。そのことについて、誰も批判しないし、名取家の代表者は他の反対派候補の事務所にいるという話は聞いている。

「みなさん、こんな私を支持していただきて……」

常套句で始めた三葉は下を向いた。

「こんな私を……」

「三葉」

俊樹が小声で指示を送つてくる。もつと胸を張りなさい、と仕草で示しているけれど、三葉は深く頭を下げる。

「本当に私は最低です」

さすがに謙遜としても表現がおかしいので事務所内が少しづわついた。

「みなさんも『存じの通り、私は名取さんに対しても、何の申し訳も立たない、最低の女です』

「三葉、そんなことは、今はいいから…」

「いえ！ 今！ 今すぐ！ 私は彼女に謝りに行きます！ 許されないとしても、謝りに！」

そう言つてマイクを置いた。そして事務所を出て行こうとする娘の手首を俊樹が捕まえた。

「これから開票というのに、何を言つてるんだ!! だいたい、どうせ謝るなら選挙中にすればいいだろうに！」

「そうやつて何もかも選挙につなげて考えるから！ 8時までに謝りに行つたら、また選挙向けのパフォーマンスだつてなるでしょ?! だからよ!!」

父親の手を振り切つて三葉は事務所を飛び出した。小さな町名で名取家まで200メートルもない。走つて辿り着くと、庭に湯上がりで涼んでいた沙耶香と、犬の散歩から戻ってきた早耶香がいた。

「ハアっハアっ…」

「……」

早耶香が三葉に気づき、沙耶香も気づいた。

「何しに来たのよ!」

沙耶香が詰問して、姉を守るように背中にかばつた。

「ハア、ハア、……」「ごめんなさい!! ごめんなさい!!」

三葉が頭を下げて謝り、膝が震えて座り込むと土下座になる。

「本当に、ごめんなさい!! 私は最低でした!! ごめんなさい!!」

「ちよつ……今さら…」

沙耶香が不倫関係についての当事者ではないので対応に困り、姉を振り返った。

「…………」

早耶香は土下座している三葉を静かに見ていて。

「ごめんなさい!! どうか、謝らせてください!! 本当に、申し訳ありませんでした!!」

「…………」

「ごめんなさい!! ごめんなさい!! 本当に、本当に…」

三葉が地面に額を擦りつけて謝っている。早耶香が口を開いた。

「それで許すとでも、思うの?」

「つ、いえ、許されるなんて思つてません。ただ、ずっと謝りたかった  
! ごめんなさい!! どうか、どうか、この通りです! 申し訳あり  
ませんでした!!」

土下座を続ける三葉と、それを見下ろす早耶香と沙耶香、そんな光景に近所の町民や、さきほどまで事務所にいた支持者たちも野次馬として遠巻きに視線を送つてくる。三葉は涙を零しながら謝り、早耶香は静かに見下ろしている。三葉を追つてきた克彦も土下座を始めた。

「すまなかつた!! 申し訳ない!! どうか、どうか、三葉のこと許してやつてくれ!! オレのことは憎んでも、どうか、三葉のことは!! こ  
の通り!」

「だから、許すわけないやん。どれだけのこと、自分ら私にしたと思つ  
てるの?」

「…………」

もう言葉が出なくなつて三葉と克彦は、ただ地面に額を押しつけている。早耶香が震える手で力一杯に三葉の肩をつかんだ。爪が肉に食い込む。

「許さへんよ。一生」

「……」

「ずっと、ずっと許さへん。一生恨み続ける」

早耶香が言いつのる。

「この胸の傷が痛むたびに、あなたへの憎悪を燃やしつのらせて生きていく。覚悟なさい。この先、ずっと。来年も、再来年も、私が誰かと結婚しても、ずーーーと、恨み続けて言い続ける。この町で顔を合わせ度に、この町で暮らして、この町で歳をとつて、80歳になつても、90になつても。もう、ええ加減許してよ、つて言う頃になつても、ずっと、ずっと、ずっと、あの時ひどいことしたね、つて語りぐさにしてやるんよ。だから、覚悟しておき」

そう言うと早耶香は肩をつかんでいた手を離した。

「二人とも顔をあげてみい」

「つ、はいっ……」

三葉と克彦が涙と嗚咽でグチャグチャになつた顔をあげた。心から詫びて、泣いている顔だつた。早耶香が失笑する。

「クスツッ……アホみたいな顔して」

「ううつ……うあううつ、ごめんなさい、ごめん、ごめん」

「うぐうつ、ごめんよ、ごめんよ、オレが悪かつた！ あぐうつううう！」

「泣きたいのは、こっちやのにね」

早耶香が一人から目をそらして、糸守の夜空を見上げたときだつた。

「こちらは糸守町選挙管理委員会です。開票の結果、当選者は糸田邦男さん。守田六左右衛門さん。古川誠さん。大和茶太郎さん。勅使河原三葉さん。帰雲白乃介さん。遠藤半径さんの以上7名となりました。繰り返します……」

名取家の長女の声で放送が流れ、そこに三葉の名前があつた。当選

者の構成も合併反対派が多数を占め、安堵の空気が流れる。早耶香がタメ息をついた。

「ハアア………とりあえず、当選、おめでとう」

「さ……サヤチン…」

「もう立つて。事務所に戻つて、せいぜい胸はつて挨拶してき。そんな泣き顔、もう見てとうないわ」

トンと背中を押されて、三葉はヨロヨロと事務所へ戻つていく。克彦も申し訳なさそうに頭を垂れてついていき、遠巻きに見ていた野次馬も事務所での飲食を再開するために戻つていく。人がいなくなつて、沙耶香が姉に問う。

「お姉ちゃん、あんなんでいいの？」

「さあ……どうやろうね……よう、わからんよ」

「……」

「ただ、こんな小さな町で、これからも暮らしていくのに通りで顔を合わせる度に、こつちは無視して見ないふり、むこうは頭さげて小さくなつてやりすぐす。そんな関係つづけるくらいなら、正々堂々イヤミの一つも言える。挨拶くらいする、そんな方がええから」

「お姉ちゃん……大人なんやね……」

「ここまで気持ちを落ち着けるのに、ものすごい時間がかかつたから」  
またタメ息をついて、そして妹に告げておく。

「あんたは後悔せんようにね。司くんのこと好きなんやつたら、ちやんと言いくらい言うた方がええよ」

「つ…」

沙耶香が赤面して目をそらした。

「言うなら早めにね。アホのテツシーミたいに、もう言うたらアカンときになつてから言うてるようでは歴史の繰り返しやわ」

「………」

もう遅いよ、と沙耶香は思つた。そして時間を見る。

「もう9時前、病院に行かないと」

入浴を早めたのは病室にいる四葉を見守りに行くためだつた。父と姉が忙しく、一葉は高齢なので昼間付き添い、夜間は若い沙耶香と

司が行つてゐる。さつと身支度をして沙耶香は病院に向かい、玄関口  
ビーで司に出会つた。

「よう

「早いね」

「四葉の姉さん、当選したな」

「……。その言い方は、うちの前での事件、知らんね?」

「何かあつたの?」

「うん、まあ……」

どう言うべきか、迷つてゐる。

「何があつたんだよ?」

「謝りに来はつてん。四葉ちゃんのお姉さん。うちのお姉ちゃんに」

「……あの件で?」

「それ以外に無いやん」

「そつか……このタイミングで?」

「そう!  そうやんね!  やっぱ、そう思うよね!」

「う……うん、まあ……そんな力説しなくても……、そんなことより、あ、いや、そんなことつてわけでもないんだけど、四葉、今日こそ意識もどるかな……」

司が心配そうにすると沙耶香も胸が痛くなつた。選挙の結果も不倫の結果も、四葉の容態に比べれば、二人にとつて些事だつた。

「四葉ちゃん……きつと、何かのために頑張つて、それで……うまくいつたのかな?  うまくいかなかつたのかな?」

「どうだろう……四葉は、うまくいつても、うまくいつたことがわからぬかもしぬれない、とも言つてたから。ただ、ボクらが、こうして生きてるつてことは……うまくいつてると思いたい」

「そうだよね。でも、そのためには四葉ちゃんが……犠牲になつたんじや……」

沙耶香が思い詰めた顔をすると、司は優しく頭を撫でた。

「そんな顔するなよ。きっと、大丈夫、きっと大丈夫だつて」

そう言つて励ます司の顔にも不安が強く浮かんでゐる。もう3日、

まったく意識が戻らない。医師は原因不明だと言うし、ジャギとしてでさえ目覚めくれない。このまま、ずっと意識が戻らないのではないか、という不安は司も沙耶香も持っているし、一葉や三葉も口にしないけれど、考えていないわけではない顔を見せていく。

「四葉ちゃん……」

「きっと大丈夫だつて……ううつ……」

励ましていた司の方が泣きそうになってしまい、沙耶香が背中を撫でる。

「男が泣いて、どうするのよ」

「泣いてない」

「泣いてるじゃん……ぐすつ……」

強がつていてる司の肩へ、自分も泣きそうになってしまい顔を隠すために沙耶香が額をつける。司が涙を乱暴に拭いた。

「もう病室に行こう。お婆さん、疲れてるだろうし」

「…………うん、そうだね。ちゃんと、お昼寝してきた？ 明日は、学校あるから仮眠も交代でとらないとね」

「ああ、周りに心配かけないようにしないとな」

二人とも選挙活動とは無関係なので日中に休み、これから一葉と交代する。病室に入ると、一葉が四葉の手を握っていた。四葉は意識がなく、心拍と呼吸を診るためにモニターが胸に装着され、左腕には点滴がされ、食事の代わりになる栄養を与えるためのチューブが鼻の穴から胃まで挿入されているし、当初ひどく暴れたこともあって医師の判断で身体と手足を精神病者などの拘束に使うベルトで固定されている。

「こんばんは。お婆さん、交代するから、もう休んでください」

沙耶香が声をかけると一葉が顔を上げ、礼を言う。

「ありがとうよ。四葉、お友達が来てくださったよ。はよう起きてあげなさいよ」

祖母が話しかけても四葉は何の反応もしない。

「「…………」」

三人が、つい黙り込むと雰囲気が暗くなる。司が気を遣つて言う。

「お婆さん、もう帰つて休んでください。お婆さんまで倒れたら大変だから」

「そうやね。ありがとう。ほな、頬むね。四葉、私が代わつてやれたら……二葉のときも、どんなにか思つたけど、まだ高校生の……」

それ以上を口にすると泣いてしまいそうになつた一葉は愛おしそうに四葉の頬を撫でると、病室を出て行つた。

「…………」

「何か話せよ。サヤボボ」

「黙つてるより賑やかな方が、四葉ちゃんも起きてくれるかもしねないもんね」

沙耶香が四葉の左側に座り、司は右側へ座つて、なるべく楽しい話題を選んで会話する。病室は先日まで三葉が入院していた一番高価な個室なので夜に談話していても問題はなかつたし、宿泊の付き添いも可能だつた。

「四葉、そろそろ起きろよ、な」

司が握つていた四葉の右手を撫でる。沙耶香も握つている四葉の左手を撫でた。

「…………」

いくら楽しい話題を選ぶといつても限界があり、夜も更けてくると黙りがちになつてしまふ。心配そうに四葉を見つめる二人が少し眠気を覚えた頃だつた。

スーーーっ：

音もなく気配もなく存在感さえも曖昧に、ジャギが無想転生を使いながら入室してきた。二葉との約束通り四葉の意識を戻すため、北斗神拳による刺激を与えるためだつた。

（久しぶりだな、沙耶香、テツツー）

ジャギにとつては30年以上を経ての再会だつたけれど、二人は無想転生のおかげでジャギに気づかない。すでにジャギは初老といつ

ていい年齢で、頭髪を剃り僧衣を着ていた。

（とくに沙耶香、お前のおっぱいも変わつてないな。そうか、そういういえ  
ば、沙耶香に似てる女ばっかりだつたな……オレ、けつこうお前のこ  
と気に入つてたのか）

ジャギは北斗七星にちなんで7人のキヤバ嬢との間に39人の子  
供をつくつていたけれど、その7人が沙耶香と似てることに今さら  
ながらに気づいた。

（いい女だな、お前は。とはいえ、二葉さんとの約束だからな。もう、  
お前たちには関わらない。でないと、糸がからまつて毛玉になるとか  
なんとか。会えば必ず不幸になつて、くつついても磁石が反発するみ  
たいになるとか言つてたし。まあ、時間を隔てて入れ替わつてた人間  
関係で、本来、結ばれちゃいけないつてのは常識で考えても、どんな  
アホでも、なんとなくわかりそうなもんだからよオ。あれだけの厄災  
をチャラにできただけで、満足しとくべきだよなあ。にしても、無想  
転生は都合がいいぜ）

ジャギは二人に認識されないまま、四葉の頭部に触れる。

（こんなもん……かな……弱めにしどう。いまだに、この手の手加減  
は苦手だからな。最後の最後に四葉を殺しちまつたら、シャレになら  
ねえし）

やや弱めに秘孔を刺激したジャギは四葉の顔を見つめる。

（宮水四葉、お前こそ、まさに救世主だつたぜ。それを知つてるのは才  
レと、お前の母ちゃんだけだけどよ、誇りに思え。感謝してるぜ。  
じや、あばよ、四葉。テツツーと沙耶香も元氣でな）

ジャギは礼を言つて、立ち去り際に沙耶香の乳房を揉んでから退室  
した。

「え……、ちょっと、テツツー、今、私のおっぱい、触った？」

「は？ どうやつてボクがサヤボボのおっぱいを触るんだよ」

司はベッドを挟んで反対側にいるので物理的に不可能だった。

「けど、今、確かにモミモミつて……ハア……」

沙耶香が熱っぽい吐息を漏らした。ほんの2回だけの愛撫だつた  
けれど、かなり絶妙な手業だつたので身体が熱くなつてしまつた。

「気のせいとは……思えんけど……。四葉ちゃんの手は握つてるし  
…………」

沙耶香は四葉を見つめる。

「まだ起きないの？ 四葉ちゃん」

耳元で囁きかけてみる。顔を近づけると四葉の匂いがした。もつと顔を近づけて、沙耶香は耳にキスするほど接近すると、小さな小さな声で問いかける。

「あんまり寝てると、私がテツツーを盗つちやうかもよ？」

その声は確かに四葉の耳には届いたけれど、やっぱり反応はない。司には聞こえていないので、不思議に思つて問われる。

「サヤボボ、何をしてるんだよ？」

「四葉ちゃんと内緒話♪」

「ふーーん……じゃあ、ボクも」

司が四葉の右耳へ囁きかける。

「起きないと、おっぱい揉むよ」

「……テツツー、内緒話は、もう少し小さな声でしいな」

「うつ…聞こえてた？」

「おっぱいの話してたやろ」

「うう……」

「意識のない女の子にセクハラつて最悪やん」

「うぐつ……、いつそセクハラついでにキスしたら起きないかな？」

「眠り姫のセオリーではあるけど……一人つて、そこまで関係進んでたの？」

「……うん……まあ…」

「……その顔、エッチまでしたつて顔やん」

「……」

「うつ……沈黙で肯定した……」

「くつ……しまつた。……いや、でも、サヤボボこそ、保健室で四葉と変なことしてたろ？」

「つ……べ、別に、何も」

沙耶香の顔が真っ赤になつた。

「あのときジャギさんだつたけど、何をしてたんだよ？　二人のパンツ、置いてあつたし」

「蹴られながら、そんなこと見てたんや」

「で、何をしてたんだよ」

「…………だから、別に。何も」

「何もないのに二人ともパンツ脱ぐつて、どういう状況だよ？」

「…………うーー…………あ、そうそう！　トイレに行つたとき女の子は、どうすればいいかを教えたの！」

「それ今、思いついた言い訳っぽいけど」

司は疑いつつ、四葉の耳元に囁きかける。

「四葉、早く起きないと、またサヤボボになことされるよ」

「テツツーこそ、キスしようとか言うてたくせに」

「キスか……それで起きてくれるなら……キスしてもいいか？」　四

葉

本当にキスしそうに司が四葉を見つめると、沙耶香が戸惑い、そして止める。

「…………それは、ダメ」

「なんでだよ？」

「だつて…………一回、エッチしたかもしれないけど、だからって意識のないときに勝手にキスなんかされて女の子が傷つかないとでも思うの？」

「…………サヤボボだつたらイヤか？」

「私は…………相手による」

沙耶香が目をそらして、それから思いついた。

「いっそ、私とテツツーがキスするフリしたら、四葉ちゃん、それはダメっ！　つて慌てて起きるかもよ」

「サヤボボと……」

「フリよ！　フリ！」

「言い募つて、恥ずかしくて司を見ていられないでの沙耶香は四葉に言う。」

「いつまでも寝てると、テツツーとキスしちゃうよ」

ついでに頬をつついたけれど、やつぱり四葉は起きない。病室のドアが開けられて看護婦が入ってきた。

「キスとかエッチとか、友達が生きるか死ぬかってときに、のんきなんね」

「つ……」

司と沙耶香が廊下まで声が漏れていたことを深く後悔して下を向く。看護婦は医療材料を載せたカートを押してベッドまで近づくと、点滴の残量を確認して、心拍のモニターを看護記録に書き込む。ぐく事務的に作業をしていると、ナース服のポケットにあつたスマフォが鳴った。

「もしもし、つていうかさ、仕事中に電話してくるなつて言つてるじやん」

そう言つたのに電話を終えず話し続ける。

「うん、そう、これから夜勤。いやいや、飲み会とか無理だつて言つてるじやん。私、お酒は1滴も飲めないの。飲んだら吐くの。なのに、割り勘じや合わないしパスパス。じやあね」

電話を終えると、また事務的に四葉の腋に体温計を入れる。

「はい、じゃあ、身体拭いて、オムツも替えるから。見てたいなら、どうぞ。この子のウンチつて超臭いよ。吐くほど臭い」

「……」

追い出すように言われて司と沙耶香が立ち上がった。意識不明なのでオムツに排便することは仕方ないとしても、そんな姿を親友や恋人に見られたくないだろうというのはわかる。そして、この看護婦がやたらと刺々しい理由も知っている。看護婦は顔の真ん中に大きな絆創膏を貼っていた。入院初日に四葉が左腕で急に掌打を放ち、運悪く看護婦の顔面に直撃し、鼻の骨にヒビが入つたと聞いている。イヤミの一つも言いたくなる気持ちと、事務的な看護なのもわからなくなる。

「…………」「

少し心配そうな顔で司と沙耶香が病室の外へ出て行くと、看護婦は周囲を見回した。高価な個室なので広いしソファも液晶テレビも机

もある。

「……隠しカメラとか無いね。最近、虐待してると撮られてるらしいから…」

室内を見回したのは隠しカメラを気にしたためで、一葉が居たときと変化があったのは司がコンビニで買ってきていた夜食用のオニギリくらいでカメラや録音機の類は無かつた。

「よし」

心おきなく虐待できるとなり、まずは身体を拭くための熱いタオルを四葉の顔に投げつけた。

ベシツ：

熱いタオルが鼻へチューブが挿入されている四葉の顔に命中して拡がる。火傷するかしないか、通常は少し冷ましてから身体を拭くためのタオルが四葉の顔を覆い、呼吸を妨げる。四葉は右の鼻の穴へチューブを挿入されているので、左の鼻の穴でしか呼吸ができない。それがタオルで邪魔されると、苦しくなるはずなのに四葉は苦しがる様子もなく動かない。

「…………このままだと死ぬかな…」

だんだん脈拍が早くなり、手足の血色も悪くなつていく。さすがに死亡すると虐待が発覚するかもしれないでの、タオルをどけた。

「はい、顔、終了」

きちんと顔を拭くのではなく、タオルを投げつけただけで終わり、手と足も見えるところだけ軽く拭いて本来は拘束具を解いて全身くまなく拭かなくてはいけない手間を省いた。

「オムツは……」

看護婦は寝間着をめくつて四葉の股間を見る。四葉が着けている大人向けSサイズのオムツは股間が膨らんでいて排泄物が溜まっているように見えた。

「コイツのウンコ、マジで臭いのよね。大腸癌の婆でも、ここまで臭くないつてくらい。久しぶりに排泄看護で吐いたし」

あえて汚れたまま放置する虐待を選択し、さらに証拠が残りにくいくて虐待を続ける。四葉の若々しく上を向いた乳房を握ると、指先で絞る

「こうに捻つた。

「これ、めちゃ痛いはずなんだけど」

同じ女性なので、乳房を潰すように絞られるのが、どれだけ痛いか想像はつくのに、まったく四葉は表情を変えない。

「あく……顔、殴りたい。鼻、折つてやりたい」

やつぱり自分が殴られた鼻を思いつきり殴りつけてやりたいけれど、さすがに事件になることはわかる。何より痛めつけても、まったく反応がないと虐待のやりがいがない。思いつきり頬を叩いたり、腹を殴つたりしたいけれど、アザが残ってしまう。

「アイアンクロオ～！」

せめて、グリグリと頭部を拳で押した。たとえアザができても頭髪で見えないはずなので、容赦なくグリグリと押し、たまたま偶然、ジャギが弱く刺激したところも追加で押した。

「うう……」

「え？ 意識が…」

「……、ここは、どこ？」

四葉が目を開けて問うてくる。

「意識がもどつて。先生に……」

当直の医師に報告しようと駆け出そうとして、看護婦は思いとどまつた。せっかく意識を取り戻したのだから、何か虐待したい。

「あの、ここは、どこですか？ 私は宮水四葉ですよね？」

「……」

「今は何年ですか？ 2020年？」

「……」

「私は、どうして動けないの？」

四葉は精神病者を拘束する頑丈なベルトで固定されていて、手足はおろか首も動かせない。真上を向いていることしかできないでいる。眼球だけ動かして看護婦を見つけ、質問してくるけれど、とても不安そうだった。

「あの、すいません。私は……誰ですか？」

「誰なんでしょうね」

意地悪く看護婦が微笑むと、ますます四葉は不安そうになる。

「わ、私は……す、すみません。鏡を見せてもらえませんか」

「顔が見たいの？」

「はい」

「…………。見ない方がいいわ」

「ど、どうして？」

「…………」

医療従事者に意味ありげな沈黙をされると、四葉は不安で胸が張り裂けそうになつた。

「…………そんな…………どうなつて…………全部、ちゃんと終わつたと…………思つたのに…………こはどこ?! 今は何年なの?! 私は誰なの?! 戻つてないの?! 全部つ全部つちゃんとやりきつたと思つたのに! どうして?!」

もう、なんとなく入れ替わりは起こらない感覚があり、おかげで神がかつた精神状態から、ごく普通の高校2年生に戻つているのに、看護婦の冷たい対応と拘束された身体のおかげでパニックを起こしかけている。

「ハア……ハア……ううつ……すみません。この鼻に入つてるの、何ですか  
? うう……」

四葉の視界には病室の天井と自分の鼻に挿入されているチューブくらいしか見えない。そのチューブは鼻の穴から奥で喉まで曲がり、さらに食道を通り過ぎて、胃に直接栄養を運ぶ医療器具だつたけれど、意識が戻ると異物感が大きくて、どうにも苦しい。激しく話したせいか、喉にひかかつて嘔吐衝動が湧いてきた。

「ううつ……うえ! ……う……く……苦しい……う……うえ! す、すみませ  
…うえ!」

「吐くと窒息して死ぬから我慢しなさい」

「ううううつ……あううつ……うえ! うえ! うげえええ!」

どうとう嘔吐するけれど、チューブから流動体が送られていたのは夕方で今は胃に何もない。胃液だけが食道を逆流ってきて、喉に溢れる。

「ゲホッうえつうう！」

しかも横を向くこともできないので喉と口いっぱいに胃液が拡がり、息もできない。

「うええう！ ゲホッ！ ヒュツ…ゲホツ！ うええおうええ！ ヒュツ…ゲホツ！」

嘔吐し続けながら四葉は短い変な呼吸をしている。気管にも胃液が入つて焼けるように痛い。せめて下を向いて嘔吐しきれば楽になるのに、上を向いたまま、手足を動かすこともできないので苦しくて苦しくて意識が再び無くなってしまいそうだった。

「この拘束と経鼻栄養管の組み合わせって、医療事故で訴えられたら負けそうね。判断したのは医師だから、私の知ったことじやないけど」

もう四葉は聞いていても認識できていなさそうな様子なので、看護婦は冷笑しながら窒息死しかけているのを楽しみ、とうとう四葉の身体から力が抜けていく。わずかに動かせた手の指でシーツをつかんでいたのに、その指からも力が抜け、涙を流していた目からも光りが消えていく。

「はいはい、死なないでよ。ドーレンしてあげるから」

看護婦が別のチューブを四葉の口の中に突っ込んでくる。

ズズズズウズ！

歯医者で血や唾液を掃除機のように吸ってくれると同じ種類の機械で四葉の口と喉にあつた胃液と唾液が吸い取られ、呼吸が確保された。

「ハツ！ ゲホッ！ ハア！ ハアア！ ヒュツ！ ヒハツ！」

死にかけていた四葉が呼吸を取り戻した。けれども、まだ鼻から挿入されたチューブは胃まで伸びている。喉に異物がある感覚のために、また嘔吐衝動が襲ってきた。

「うええつ！ もえええ！ た…助け…もええ！ これ抜いてください…うえええ！」

今度は胃液もない、嘔吐衝動だけの空嘔吐をしている。

「おえおえおえええ！ 死、しぬ…おええ！ うえええ！」

「ドレーンしてるから息はできるでしょ」

看護婦は四葉の喉に胃液と唾液が溜まると機械で吸い取ってくれるけれど、鼻から挿入しているチューブはそのままなので空嘔吐が続いて死ぬほど苦しい。

「うげおおえうええ！」

「きやははは♪ 面白い声」

「うえおえ！ ヒュツ…おええ！ うおええ！」

あまりに苦しくて四葉は発狂しそうになつてくる。わけがわからぬ。なぜ、こんな目に遭つているのか、ここが、どこで、いつで、自分が四葉である自信もない。もしかして、これは夢なのか、もう思考がまとまらない。ただ、鼻から喉にあるチューブのために嘔吐だけを繰り返して下水口が逆流して溢水しているような音を吐いている。

「おえ…おえ…うえ…うおええ…」

もう腹筋に力も入らなくなつてきて、嘔吐さえ弱々しくなつてきた。

「…おえ…うえ…うう…うえ…」

だんだんと喉の粘膜がチューブがあることに慣れてきて嘔吐衝動が消えてくる。

「ハア…ハア…ひつ…ひつぐ…ハア…」

あまりにも苦しかつた時間が終わつて、四葉は泣けてきた。

「…ハア…ひつ…ひうう…ハア…」

「あ、もう慣れた？ 残念」

そう言うと看護婦はカートから別の薬剤を出してきた。それは單なる生理食塩水の入つた汎用パックだつたけれど、涙も拭けない四葉の目には、はつきり見えない。

「あなた、もう死になさい。これ、楽に死ねるお薬だから、このチューブから流し込んであげるね」

「つ?!」

驚いている四葉は何の抵抗もできない。看護婦はチューブを接続し直して、生理食塩水を流し込んできた。

「ひつ…イ…イヤ！」

四葉の目にチユーブ内を流れ落ちてくる透明な液体が見える。それが死ぬような薬だと言われていると、恐怖で顔がひきつっていく。

「きやははは♪ 死んじやえ」

「ひつ…ひイイ…」

逃げたくても身体を動かすこともできず、飲まないようにようと思つても勝手に鼻から喉を冷たい感触が流れて込んできて、胃に拡がる。吐きたくても、今度は嘔吐するための筋肉が疲れ切つていて吐けない。四葉は恐怖してガタガタを小刻みに震えて泣いた。

「……た……助けて……イヤ……お母さん……お母さん…」

「クスつ…カアさんカアさんつてリアルに言うヤツはじめて見た！  
きやはは♪」

「ひつ…ひくつ…ううつ…」

「そろそろ死ぬかな」

わざとらしく看護婦はペンライトで四葉の涙で濡れた瞳を覗き込む。

「まだ生きてる。あ、薬を間違えたからね。ごめん、ごめん、ただの水だつた。殺す薬は、こっちだつたわ」

看護婦はカートから本来流し込むべき栄養剤を取り出した。オレンジ色のペーストがパックに入つていて、ビタミン、ミネラル、カルリーラーすべて補給できる理想的な栄養剤で意識不明や嚥下障害などで食事がとれない病人に与えるものを毒薬と称して四葉に流し込む。

「イヤ！ イヤ！ やめて！」

ゆっくりとチユーブ内をオレンジ色のペーストが降りてくると、とても怖い。しかも手順では体温と同じくらいに温めてから流し込むのなのに、常温のまま使用しているおかげで、降りてくるのが遅い。

「ひつ！ ひい！」

首を振つて逃げようとしても、それさえできない。がつちりと頸や

頭部が革ベルトで固定されていて数センチも動かせない。さきほど  
の透明な生理食塩水よりもオレンジ色のペーストは見た目が恐怖心  
を強く刺激してくる。

「もうすぐ死ぬね」

「い……いや……なんで……どうして……私……一生懸命……頑張った  
のに……世界の……ために……」

「世界のため？　また、そんなこと言つてるんだ。頭のおかしさは姉  
といつしょね」

「姉……？　やつぱり、私は四葉なの？」

「ちつ」

うつかり情報を与えてしまつたことで看護婦は舌打ちした。

「……ここは、どこなの？　病院？　町の病院？」

「……。いいえ、警察病院よ。あんた逮捕されたの。わけのわからな  
いこと言つて暴れるから」

「警察……病院……」

「あんた姉と同じで人格障害あるでしょ。覚えてないかもしれないけ  
ど、連續殺人やつて捕まつたの。通行人へ言いがかりをつけて次々殺  
して逮捕よ」

「つ……そんな……ジャギさんが、そんなことするはず……ない……」

「もう一人の人格はジャギつて言うの。ふーん……どうでもいいわ。  
ということで死刑執行」

看護婦はペーストの入つているパックを強く握つた。なかなか降  
りなかつたペーストがチューブ内を一気に進んでくる。

「つ……いや！　いやあ!!　助けて!!　誰か助けて!!!」

「四葉つ?!」

「四葉ちゃん?!」

病室に司と沙耶香が駆け込んでくる。

「ちつ……」

「司つ?!　サヤボボ?!　いてくれたの?!　ここ、どこ?!」

「町の病院だよ!」

「今は何年なの?! 一人がいるつてことは2020年だよね?」

「2020年だから安心して。四葉ちゃん、意識が戻ったんやね!

よかつた!」

沙耶香と司は喜んでいるけれど、四葉は必死に頼む。

「これを抜いて!! 私、殺される!!」

「え……これって?」

司が何のことかわからず迷う。もうチューブから胃に何か抜がつている感触があるので四葉は青ざめている。

「この鼻に入ってるチューブを! 早く抜いて! お願ひ!!」

「…………これは……栄養を入れるチューブだつて聞いてるけど?」

「毒なの!! 早く早く抜いて!!」

「…………」

司が看護婦を睨むと、お腹を抱えて笑い出した。

「きやはははは♪ ウケるう! 超ウケる!!」

「四葉、落ち着いて。このオレンジ色のは、栄養だから害はないよ」「だつて、さつき、この人が……」

「きつとウソだよ」

「ウソ……」

「四葉、ここは町の病院で、四葉は3日間、意識がなかつた。今は10月18日だよ。この看護婦は……まあ、ちょっと意地悪だけど……それには、少し理由があるし……」

司が言葉を濁したので、沙耶香が四葉の耳元へ囁く。

「四葉ちゃんが意識をなくした後、少し暴れることがあつて運悪くこの看護婦さんの顔を殴つてしまつたらしいの。それで、すごい怒つてはるの」

「顔を……」

言われて看護婦が大きな絆創膏を顔に貼つていてことに気づいた。今までは半分パニックだったので、業務として着けているマスクなんかと思っていたけれど、しつかり見ると鼻全体を覆うように絆創膏が貼られている。おかげで人相も表情もわかりにくいので怖い。

「それは……すみませんでした。ごめんなさい」

「ちつ」

舌打ちして看護婦はカートを片付けて出て行つた。

「四葉ちゃん、意識が戻つてよかつたあ」

「ああ、四葉、おかえり。よかつたよ」

「うつ…ううつ…ごめんね…心配かけて…」「ごめん…よかつた…私、どうなつてゐるのか、わからなくて…二人がいてくれて、よかつた」

「ごめんな、ほんの少し離れてる間に…怖かつただろ？　毒なんて言われたらビビるよな」

「ううつ…あうううつ…はうううつ…」

慰められると安心したおかげで泣けてくる。沙耶香がハンカチで涙を拭いてくれる。

「目が覚めて何もわからへん、この状況で毒とか言われたら最悪やんね。いくら何でもひどすぎると」

「うううつあうううつ…ぐすつ…」

四葉の鼻水も拭いてやつてから、司と相談する。

「テツツー、四葉ちゃんの意識が戻つたことの連絡どうしよ？」

「今は11時過ぎか…お婆さんには明日の朝の方がいいだろ。電話したら起きて来るだらうけど、けつこう疲れてる様子だつたし」

「お父さんとお姉さんの方も今頃は祝勝会やんね。…明日の朝の方がいいかな」

「あの一人も相當に疲れてる様子だつたから、連絡すれば祝勝会の後、無理してでも顔を出すだらうけど、お父さんの方は、とくに年齢もあるし、やつぱり二人への連絡も明日の朝の方がいいかも」

「そうやね」

「ううつ…ぐすつ…はううつ…」

まだ四葉は泣いている。すべてが終わつたと感じて目が覚めたのに、地獄のような目に遭わされて殺されるかと思つたので、かなり深く傷ついている様子だつた。

「よしよし、もう大丈夫やよ。それにしても、このままやと可哀想や

ね。これ、外せへん?」

沙耶香が拘束具に触れると、司も触つてみる。

「うーん……ダメみたいだ。金具の重要なところに鍵がかかっていて外せない」

四葉の手足と胴体、頭部を拘束している革ベルトは鍵が無いと外せないようだった。

「しようがない。ナースコールしようか。あまり気が進まないけど」

四葉が鼻に挿入されたままのチューブのことを言う。喉の粘膜は慣れてくれたものの、常に違和感はあるし、何より鼻の穴に挿入された姿を恋人と親友に見られているのも苦痛だつた。司がナースコールを押し、別の看護婦が来てくれるのを三人で期待したけれど、あの看護婦が入室してきた。

「どうやね」

「ぐすつ…ううつ…これも抜いてほしい」

普通は高価な個室にいる患者には、へりくだつた対応をするはずなのに、この看護婦はスマフォをいじりながら面倒臭そうに訊いてくる。司がムツとしつつ言う。

「これ外してやつてよ。もう意識も戻ったから」

「無理」

「なんで?!」

「また暴れるかもしないじゃん」

「もう四葉だから大丈夫なんだよ」

「は? そんな保証が、どこにあんの? コイツ、ちょくちょく人格が変わるつてカルテにあつたし」

「もう大丈夫なんだつて! な、四葉?」

「うん、すべてが終わつたと思うから。もう入れ替わりは起こらないはず」

「はず、とか言われても、私、ただのナースだし」

「じゃあ、先生を呼んでやつてくれよ」

「今夜の当直はK 医科大卒のバカ医者だよ」

「うつ……あそこか……」

司が困った顔をすると、沙耶香が問う。

「なにか問題があるの？」

「私立医大で全国一の偏差値が低い医大なんだよ。その分、学費が6千万くらいして、大金持ちか開業医の息子しか入らない。一応、偏差値50以上ではあるけど、だいたい想像がつくだろ、どういう人材か」

「ふうん……でも、その先生しかいないなら頼むしかないんとちやう？」

「……まあ、……サヤボボの言う通りだけど……。先生、呼んでもらえますか？」

「はいはい」

面倒そうに看護婦が消え、しばらくして医師と戻ってきた。

「何？」

医師はP S Pをいじりながら訊いてきた。響いてくるB G Mから信長の野望というゲームだと司にだけはわかつたけれど、どうでもいい。

「……。この拘束してると、栄養チューブを外してあげてほしいんです」

「あく……ボク、眼科志望なんだよ。精神科とかイミフ」

「イミフって……いや、もう意識も戻ってるから」

「ふーーん……君、どう思う？」

医師は看護婦に問い合わせ、看護婦は顔の絆創膏を指した。

「この患者に殴られました」

「うわっ、怖つ」

「危険だと思います」

「だね。はい、継続。経鼻管は……君、どう思う？」

「明日、担当医が判断されるのを待つた方がよいかと思います」

「だよね。じゃ、ボク、忙しいから。…………さて、帰雲城の防御を…」

若い医師はPSPを操作しながら消えた。

「ほらね」

看護婦が勝ち誇ったように言い、沙耶香が悔しそうにつぶやく。

「完全に誘導しとるやん」

「こんな町の夜間当直にくる医者なんて、あんなもんよ。あいつ、国家試験に合格したから、もう勉強しないって決めてて、あとは夜勤バイトか、コンタクトレンズ屋の隅っこでゲームして一生過ごすプロ二トになるのが夢らしいよ」

「プロ二ートなのか、それ……努力と怠惰の配分がすごいというか……人生を本気で舐めてかかる気満々というか……他に先生はいないうのかよ？ K 医科大だつて、いい先生は、いいだろ」

「あれだけ。むしろ、この町に夜、医師がいるだけラッキーな夜。死亡診断書なら書いてくれるよ。ちなみに看護婦も私だけ。だいたい意識不明なんて状態なのに、この町の病院に入院するつて言い張ったのは、この子の家族だし。普通、麓の病院に入れるよ。案外、この子の家族も、ちゃんとした治療を望んでなかつたのかもね。精神病患者の家族には、よくあることだけど」

「[.]」

四葉たちには俊樹や三葉、一葉が町の病院にこだわってくれた理由はわかるけれど、それを看護婦に説明する気力もなく黙る。

「じゃ、よっぽどのことでない限り呼ばないでよ。私も忙しいから」

そう言つてスマフォをいじりながら消えていく。

「四葉……ごめん」

「四葉ちゃん……ごめんな」

「ううん……一人が悪いわけじゃないから……」

不自由なまま四葉が微笑をつくり、憐れに思つた沙耶香が問う。

「せめて、何かしてほしいことがある？」

「そう言われても、この状態で……」

四葉は何もできない状態で、お願ひしたいことを考えてみて、股間に

の痒さに気づいた。

「[.]」

気づいてみると、とても股間が痒い。

「何でも言うてよ」

「…………」

背中や頭なら搔いてもらいたいけれど、さすがに股間を搔いてほしいとは言えない。けれど、気づいてしまうと股間の痒さは猛烈で我慢できなくなつてくる。

「……ハア……ふく……」

少し身じろぎしてみて、自分がオムツを着けられていることがわかつた。この痒さは、そのオムツが汚れていることからくるものだとわかる。女子なので毎月の月経でナップキンをあてたときも汚れてくると痒くなるのは体験しているけれど、その痒さと比にならないほど強烈に痒い。

「……うう……ハア……くう……」

「四葉ちゃん、どうかした?」

「四葉、大丈夫? なんか顔が赤いけど」

「平気……何でもない……」

「…………」

「…………平気…………」

二人に知られるのも、あの看護婦にオムツを替えてもらうのもイヤなので隠して耐えようとするけれど、どんどん痒くなつてくる。まるで股間を何百回も蚊にさされたように痒い。それを我慢していると、さらに股間がチリチリと痛いくらいに痒くなつてきて四葉は小刻みに身じろぎして、手でシーツをつかんで耐える。

「四葉ちゃん……大丈夫に見えないけど……どうかした? どこか痛い?」

「……大丈夫だから……今、何時?」

「12時だよ。四葉、本当に大丈夫? 顔が苦しそうだよ」

「平気……平気……うく……ハア……ハア……」

このまま朝まで我慢すれば看護婦も交代してくれるはずと思うけれど、とても耐えられない。痒みが痛みと熱に変わってきて、まるで股間を炙られているような気さえする。痒さは股間全体に拡がつて

いて、あと8時間も耐えるとなると気が遠くなつてくる。

「…………ああ～…………うーつ…………」

もう声が出てしまうほど痒くて痛い。赤ん坊がオムツが汚れたとき、大声で泣く理由がよくわかつて、自分が母親になつたら絶対に気づかってあげようと誓うものの、今は自分の痒さが、どうにもならないほどで四葉は身じろぎを続ける。それを見ていて司と沙耶香は心配になつてくる。

「なあ、絶対、大丈夫じゃないだろ、これ」

「そうやね。…………どうしよ」

「うーーーつ…………平氣…………何でもないから…………一人とも、もう遅いから帰つていいよ。私も寝るし…………あ～あつ…………」

「四葉を一人にしたら、あの看護婦に何をされるかわからないよ」

「うん、あの人、ひどすぎやもん」

「…………う～…………く～…………」

「もしかして、鼻のチユーブが痛いのか？」

「…………うん、そう！ それでナースコールして！」

四葉はオムツのことを知られたくないでのチユーブのことにしてナースコールしてもらう。

「気が進まないけど、仕方ないよな」

司がボタンを押すと、5分以上してから看護婦が現れた。

「何か用？」

「鼻のチユーブが痛いみたいなんですよ」

司が説明したけれど、四葉は看護婦が顔を覗き込んでくると、目くばせしてオムツが汚れていることを伝えてみた。

「…………」

それは、すぐに伝わつたけれど、もともと看護婦は四葉のオムツが何時間も前から大便で汚れているのを知つていて、わざわざ痒くなるように放置している。思春期の少女が恋人と親友に知られたくないくて、たとえ意地悪な看護婦でも同性なのだから悟ってくれるかもしれないと最後の望みを託して頼ってきたのを感じ、そして無視する。

「別に異常はないみたいよ」

「つ……う……」

「明らかに苦しがってるから」

「そう言われてもねえ……宮水さん、どこか痛みますか？」  
わざとらしく問い、潤んだ四葉の瞳を見る。

「……う……ハア……」

四葉は目線で伝えようとするけれど、やっぱり無視されてしまう。

「何もないみたいですよ」

「あううう……」

思わず四葉は言葉にならない声をあげた。

「クスッ……そんな赤ん坊みたいな声を出して。たしか、高校生ですよ  
ね？」

「……う……」

「言いたいことがあるなら、ちゃんと言つてもらわないと、わかりませ  
んよ」

「宮水さん、どうかされましたか？　どうもしないなら戻りますよ」

「……あ……あの……」

このままでは看護婦が去つてしまいそうで、四葉は言葉を選んで言つてみる。

「……か……身体が……汚れてる……みたい……なんです」

「身体なら、さつき拭きましたよ。入浴は先生の許可がないと無理で  
す」

「い……いえ……そうじや……なくて……」

四葉が涙目になつて真つ赤になる。

「そうじやなくて、何？　私、忙しいんですけど。早く言つてくれない  
？」

「……オ……オムツ……」

「オムツが、どうかしたの？」

四葉が小さな声で言つたのに看護婦は大声で問い合わせた。

「つ……オムツが……汚れてる……みたい……なんです」

「汚れてるみたい、つて自分のことでしょ。ウンチしたの、オシツコしたの? オシツコなら3回は吸收できるから、すぐ交換は無理ですよ」

「……すぐ……お願ひ……します…」

「ウンチなの? ウンチもらしたの?」

「……はい……ひつく…ううつ…ううつ…ぐすつ…」

恥ずかしくて四葉が泣き出すと、司と沙耶香が気づいてあげられなかつたことを後悔しつつも、看護婦に対して怒りが湧いてくる。

「そんな言い方ないだろ」

「女の子なのに、ひどいやん」

「何が? 人間、ごく普通のことでしょ」

「そうかもしけないけど、配慮とかあるだろ」

「四葉ちゃんの気持ちを考えてあげてくださいよ」

「はいはい、いい友達がいてよかったです。そんなに言うなら、あなた達が替えてあげればいいじゃない。この子のウンコ、すつごい臭くて最悪なのよ」

「つ、うつうつ…うううつ…」

容赦ない看護婦の言葉は四葉の羞恥心と自尊心を握りつぶしていく。まるで熟れたトマトを握りつぶすように、ぐしゃりと乙女心が圧壊されて汁が垂れるように涙が流れる。

「四葉ちゃん……こんな看護婦、明日にでも町長のお父さんに言うて、追い出してもらおな。この病院が町立なこと、忘れん方がいいですよ」

「ボクの方でもオヤジに言つておくよ。いくら顔を傷つけられたからって、あまりにひどい対応だから」

「うるわしい友情と彼氏の優しさってところ? けどさ、あんたたち二人、この子が目覚めるまで、キスとかエッチとか言つてイチャイチャしてたよね?」

看護婦は四葉のオムツを交換するために脚を拘束している革ベルトの鍵を開けて調節する。まっすぐに寝ていた状態の脚を開脚させ

て再固定して鍵をかける。膝を立てるとき病人用の寝間着がはだけてオムツが丸見えになつた。司は病室を出ようかと迷つたけれど、看護婦を放置しておけないので四葉の身体から目をそらして残り、反論する。

「イチャイチャなんてしてない。四葉が目を覚ましてくれるように、面白い話をしたただけだ」

「そうよ、そうよ」

「はいはい、よくあるのよね。病院では。若い子が事故や病気で意識不明で運ばれてくるとね、お見舞いが同性だけのときは平穩に終わるけど、彼氏や彼女がいてさ、毎日お見舞いに来て、けど、他にも異性がいつしょに見守るパターンだと、だんだん意識の戻らない人より、手近な二人でくつついちゃうパターン。残念だつたね、こんなに早く目が覚めて。とくに、名取の末娘、あんた、好きなんですよ、こいつが」

「つ…で、でもかせ言わんといてよ！」

沙耶香が赤面して怒るけれど、看護婦は淡々と四葉の両脚の再固定を終えて、新しいオムツとウェットティッシュを出している。

「ホント、おしかつたね。あと二日、いえ、あと一日でキスくらいできそうな雰囲氣にもつてきてたのにね」

「何の根拠があつて、そんなこと言うのよ？！ 私が四葉ちゃんを裏切るようなマネするわけないやん！！」

「だってほら、玄関ロビーで抱き合つてたでしょ。交代のとき準夜勤のナースがラインで送つてくれたよ。私たち、二人が何日でくつづくか賭けてるから」

看護婦はスマフォを操作して画像を見せつけてくる。その画像は病院の玄関ロビーで司と沙耶香が出会つたとき、なかなか意識の戻らない四葉のことを心配して不安になり、それを慰め合つたときのもので、沙耶香の手が司の背中にあつたり、司の肩へ沙耶香が頭をつけていたりして、抱き合つているように見えなくもない写真だつた。それを天井を見ることしかできない四葉の眼前につきつけて嗤う。

「ほらほら、いい雰囲気でしょ？ きやははは♪」

「つ…」

濡れていた四葉の瞳が画像を見て凍りつき、沙耶香と司は慌てて否定する。

「こ、これは違うんよ！」

「誤解しないでよ、四葉！」

「…………うん……、……一人を……信じてるから……ううつ……ひつく…」

そう言いつつも涙が溢れるのを看護婦が嗤う。

「きやはは♪ 信じてるなら泣かなくていいじやん。ホントはもう半信半疑っていうか、ほほ黒だと感じて泣いてるくせにさ。だいたいのパターンで、ここまで来ると、もう捨てられるよ。結局さ、男つて病気でガリガリの女より、健康で元気な女の子の身体を選ぶから。おっぱいも段違いだしね！」

「つ…司には……私より…うぐつ…はうつ…ううつ…うわあああん！」

四葉が声をあげて泣き出した。意識が戻ったとき、ちゃんと達成感もあったはずなのに看護婦から地獄のような虐待をされて、さらに今は股間が痒くて気持ち悪くて、知られたくなかったのにオムツへ大便を漏らしていたことを知られて、なのに司と沙耶香が仲良くしていた写真を見せられて、司のためには長生きできない自分より沙耶香の方がいいのかもしれないと考えたりもするけれど、それでは自分があまりに報われなくて苦しくて、そして手足も首も動かせずに開脚で固定されてオムツ姿を晒されている状況が発狂しそうなほど苦痛だった。そんな四葉の心が、とうとう折れて大声をあげて泣き出している。もう、泣くことしかできなくなっていた。

「うわああん！ ああああん！」

「四葉ちゃん、ごめん！ ごめん！」

「謝るってことは認めるんだ」

「つ、違う！ 違うから、四葉ちゃん！」

「うえええん！ ふええええ！ ふええええ！」

「きやはは♪ ホント赤ん坊みたい！ ウケるう！ ウンコ漏らして

ビービー泣いて。そりや彼氏も引くつて

「お前いい加減にしろよ！」

女性に暴力を振るうタイプではない司が怒り心頭で看護婦の胸倉をつかむ。つかまれて看護婦は薬剤の入っていない注射器で司の首を刺した。

「痛つ?!」

思わず司は手を離す。看護婦は最後の仕上げに入った。

「えらそうに彼氏ぶるなら、彼女のオムツ交換ぐらいしてみなさいよ。臭い、気持ち悪いって投げ出さなければ、ちょっととは信じてあげるよ。できるかな？ ボクちゃん」

「するさ!! お前にさせりより、ずっといい!!」

「はい、どうぞ。オムツ交換は医療行為じゃないから、あんたらにさせてもOKなの。よろしくね」

これが狙いだつた看護婦は素早く司に新しいオムツを押しつける。もう司は引っ込みがつかないし、何より四葉にとつて最大に恥ずかしくて苦痛なのは、病院のスタッフや同性である沙耶香に交換されるよりも、彼氏である司にオムツを替えられることだとわかつていての誘導だった。

「ほら早くしてあげなよ。かぶれて気持ち悪いって」

「うええええ！ うえええん！」

もう四葉は泣いているだけで何も言えず、何も考えられない。

「四葉、泣かなくていいよ。ボクが優しく替えてあげるから」

「私も手伝うよ」

司と沙耶香がオムツを外すために、サイド部分を破していく。看護婦は嗤いながら見ている。

「臭いよ。超臭いよ。マジで吐くほど臭いから」

「四葉ちゃん、すぐにキレイにしてあげるからね」

沙耶香が四葉の寝間着を開いていくと、四葉の匂いが室内に拡がる。看護婦が鼻を擣んで呻いた。

「うーっ…臭つ……最悪……ホント、異常に臭い。……うつ…吐きそ  
う……オエ……あと、よろしく」

四葉を蔑むための演技ではなく本当に青ざめた看護婦は口元を押さえながら出て行つた。

「あいつ、職場放棄しやがつた」

「プロ意識がないよね。つていうか、そんなに臭くないし」

司と沙耶香は優しくウエットティッシュで四葉の身体を拭いていく。

「ふええ…うつ…ううつ…ぐすつ…ひつく…」

大泣きしていた四葉の涙が少し止まりつつある。

「いい子、いい子、もう少しやよ。四葉ちゃん」

「ぐすつ…ごめん…ごめんね」

みじめな気持ちで身体を拭かれている四葉は、せめて二人に謝つた。

「ええんよ」

「ああ、四葉の意識が戻つて本当によかつたよ。こんなことくらい何でもない」

「むしろ、四葉ちゃんの匂いつて、すごくいい匂い」

「ああ、なんか、すごい不思議な匂いがする」

そう言つた二人は誘惑されたように顔を赤らめると、ウエットティッシュで拭く代わりに四葉の身体へキスを始めた。

「ちよつ?! 何してるの?」

「「ごめん、ごめん、つい」」

謝りつつもクスクスと笑つてしまふ一人の顔が酔つたように赤くなつてゐる。

「あの看護婦、吐くほど臭いなんて言つてたけど、ぜんぜん平氣だよな」

「うん、むしろ最高の匂いかも」

沙耶香が四葉の開脚されたままの左膝に触れる。

「四葉ちゃんの身体つて、最高に美味しそうな匂いするよね」

「そうそう、ボクも、そう思う」

司も四葉の右足首に触れた。二人は触れているうちに、またキスをしてしまい、ついには四葉の身体を味わうように舐めていく。

「ちよつと！ 二人とも私に何してるの？」

「んく、四葉ちゃんの味見い」

「四葉から、あんまりいい匂いがするから」

「く…くすぐつたいから、やめて。私の身体、ずっとお風呂に入つてないから汚いよ」

四葉は逃げたけれど、少しも動けない。四葉が嫌がつているのに、二人とも酒に酔つたような顔色で舐め回してくる。そこへ看護婦が再び病室に戻ってきた。

「臭つ……ホント臭いわね」

看護婦はエアコンを最大換気モードに操作してから、四葉たちを見る。そして、備え付けのテレビのそばに目立たないよう置いていたスマフォオを手に取ると、動画データを確認して嗤う。

「きやははは♪ 信じられない！ やっぱ勅使河原の血筋つて変態よね！ ほら、見て見て」

看護婦が四葉にスマフォオを見せつけてくる。そこには四葉たち3人が映つていた。まるで酔つたような顔で沙耶香と司が四葉を舐め回している動画が撮られていた。

「まさか…スマフォオを…ずつと…」

四葉が問い、看護婦が冷笑する。

「そうよ！ エロガキどもが何かするかと思つて置いておいたの！ まさか、ここまで変態だとは思わなかつたけど！ いい映像が撮れたわ！ これ週刊紙に売つたら最高よね?!」

「…………」

「あとさ、あなたのオヤジ、東京に出張へ行くとホテルにデリヘル呼んでるよ」

「…………」

「ほら、証拠写真もあるし」

看護婦がデリヘル嬢と俊樹がビジネスホテルへ入つていく写真も見せつけてくる。娘として少し残念だったけれど、あまりショックを受けていない様子の四葉に、看護婦も残念そうにしたけれど言い募る。

「このネタで叩けると思つて週刊紙に売り込んだのに掲載されないから、もつとインパクトあるの狙つたら、娘でいいのが撮れたわ！ い！ 最高よ！ これ週刊紙よりユーチューブにあげた方が世界中に広まつていいよね？！ これで勅使河原も宮水も終わりよ！ ついでに名取も！ 女同士とか超キモ！ きやははははは！」

「…………あなた……誰なの？」

明らかに三人のことを知つている看護婦の口ぶりに四葉が問うと、看護婦は笑うのをやめて迫つてくる。

「私の名をいつてみなさい」

「…………」

四葉が看護婦の顔を見る。大きな絆創膏のおかげで目くらいしか個人を判別するヒントがない。鉄仮面をかぶつた状態で自己誰何するよりもシだと思うものの、わからない。四葉だけでなく、換気されたおかげで正気に戻つた沙耶香と司も状況を認識して、看護婦が誰なのか考へる。

「…………私…………この人、見たことあるような…………」

「ボクも…………そんな気が…………」

「それは私もなの」

四葉も見たことがある気はするけれど、思い出せないでいる。

「もう一度だけチャンスをあげるわ。私の名をいつてみなさい」

「「…………」「」

「そう。社会的に死にたいのね。この動画、アップしたらどうなると思う？」

「そ、そんなことしたら、お前だつてクビになるぞ！！」

「司が脅し返しても、看護婦は引かない。」

「いいわよ、どこか遠くで再就職するから！」

「くつ……お、お願ひだ！ 待つてください！ さつきのボクらは、どうかしてんだ！」

司が土下座して頼むと、沙耶香も土下座する。

「どうか待つてください！ お願ひします！」

「フフ……いいわ。最高に気分がいいわ。勅使河原と名取が私の足元

にひれ伏してゐる。なんて、いい日なの」

「あなた、本当に誰なの？なぜ、私たちを恨んでいるの？」

動くことのできない四葉が問いかねると、看護婦は顔の絆創膏を剥がした。

「この顔の傷、3日経つても治るどころか、まだ膨らんで疼くのよ」  
看護婦の顔には四葉の掌打を受けた傷があり、そこは肉が内部から破裂しあげたように膨らんでいる。

「医者は単なる打撲だつていうけど明らかに変よ……この傷が治らなかつたら、どうしてくれれるか」

「…………ごめんなさい」

四葉は北斗神拳による傷跡を見て、あまりに申し訳なくて謝つたけれど、看護婦は唾を吐きかけてきた。

「ごめんで済むかっ！」

看護婦は美人というわけではないけれど、年齢は三葉と同じくらいで女性の顔にある傷跡としては、あまりに痛々しい。動けるなら四葉も土下座して謝りたい気持ちになつたけれど、ベッドに固定されたままで何もできない。

「さあ、この顔を見ても誰だかわからないの？」

「え……でも、それは3日前に私が当てた傷で……あなたが私たちを恨んでいるのは、もつと前からじや……」

「そうよ！だから、この傷がない顔を思い出してみなさい！私の名を!!」

「傷が無かつたら…………あ！えつと！」

「ボクも思い出した！」

「私も！」

三人が看護婦を思い出した。

「えつと…………あの…………ほら、お姉ちゃんと同じ学年の…………」

「そうそう、お姉ちゃんと同じ学年の…………えつと…………」

「兄貴と同じ学年だつたはず…………名は…………えつと…………名前は…………」

小さな町なので、お互に知つてゐるはずなのに名前が思い出せない。看護婦が業を煮やしたように足元にいる司を蹴つた。

「あんたら家持ちは、いつもそりだ!! 私らを人間と思つてない!!」

「うぐつ…」

「とくに勅使河原と宮水!! あんたらに私たちは頸で使われ、この町で生きてきた!!」

そこまで言われて沙耶香が気づいた。

「あなたは、川の…」

「川の子?! それって名前?!」

「……すみません…」

この町では中世以前から続く差別が、山奥らしく明瞭に残つていた。科学と人権思想が発達した現代でも、巫女信仰が残る裏側の意識で、町民たちに深く刻み込まれている。さすがに昭和の頃ほど、はつきり口にされないけれど、住んでいるところが洪水に遭いややすい川原なので、川の人、川の子、単に川、と呼ばれたりして。長屋造りの老朽住宅が多く、もともとは差別を受けていた人でも、失業や前科があつて家賃の安さから住むようになると、そう呼ばれるし、やはり事情のある家庭が多く、母子家庭だつたり、父親が居てもアル中だつたりと、子供の頃から過酷な環境であることが多かつた。そのため町民たちも付き合い方を選んでいた。町の治安は良く空き巣などいないので、どの家も鍵をかけないのが普通だつたけれど、川の子が遊びに来ると、ほぼ無意識で町民は財布などの貴重品をさりげなく管理している。そして、町で唯一のコンビニで万引きが起きてパートカーが来ると、ほぼ100%川の子が捕まっていた。

「思い出した。あなたはお姉ちゃんと同じ学年で……お父さんの選挙のとき……」

四葉も小学校時代のエピソードの一つを思い出した。父の選挙のさいに登校中、三葉と克彦がそろつて登校していることを、土建屋と町長はその子供も仲がいい、と揶揄してきたグループにいた子だと気づく。学生の時期は一見して平等で、むしろ家柄のいい子の方がおとなしく、川の子が何でも言えるけれど、大人になつて町内で就職すれば、もう勅使河原にも宮水にも逆らえない、それが本能的にわかつて

いて、せいぜいの野次を飛ばしていただけの一人だった。

「さあ！ 私の名を言つてみなさい！」

「…………すみません……知りません」

この小さな町で名を知らないというのは、相手にしてない、人と思っていないということと同義だった。それぞれに家のある町民同士は名字で呼び合う、宮水の旦那、勅使河原の息子さん、と家族内のポジションで親しく呼ぶ。けれど、川の子は川の子、川の人は川の人だつた。町内会組織でも、それぞれの集落は仲良くしているけれど、この地区だけは役場直轄でゴミ捨て場も別、子供会も別だつた。そのため四葉たちも意図して差別しているわけではないけれど、ごく自然に看護婦の名前は知らなかつた。その無自覚の差別が許せないようで看護婦が沙耶香も蹴る。

「きやつ?! うう…」

「私たちにだつて！ 名前はあるんだよ！ とくに勅使河原と宮水！ 調子に乗りやがつて!! 私たちと何が違うっていうのさ!!」

町のヒエラルキーの中で経済は勅使河原家、宗教と政治では宮水家が頂点に立ち、お金の流れも、まずは地方交付税交付金が町役場に入り、町長が差配する。その中で旨味の多い土木建設系の随意契約などは、勅使河原家に振り分けられ、その勅使河原家が下請けや孫請けに、ごく当然にピンハネして仕事を与える。そして宮水家には氏子からの集金と賽銭、祈祷料、各事業所からの上納金が入る。逆に底辺層の地区に住む町民には、日雇いの交通整理や危険な高所作業が回つてくれるだけで、それもピンハネを繰り返した挙げ句の末端被用者なので旨味は何もない。炎天下に一日立つて7300円、目のくらむような山間の崖で作業して1万6500円だつた。完全に固定化された格差社会が小さな町の中にできている。たとえ、努力して資格をとつても差はなかなか埋まらないし、大きく出世して大手ゼネコンに就職しても、町がからむ仕事だと地元理解の名の下に、なぜか下請けになるはずの勅使河原建設に頭が上がらないという力関係で格差は永遠だつた。

「私の親は、あんたらの親にこき使われて生きてきたんだ!! 摘取さ

れまくつて！」

さらに看護婦が司を蹴る。

「うぐつ…」

「それがイヤで私は看護師になつたのに!! 高校卒業した途端に母さんの生活保護を打ち切りやがつて!! バイトしながら資格とるのがどれだけ大変かわかる?! なのに就職してからも奨学金の返済!! 夜勤しないと生活していくない!! あんたらと私で何が違う?! なに東京で優雅に学生してんの?! あんたらの金だつて、もとは税金でしょ?! 宮水!! お前なんか乞食と同じよ!!」

「あなた、あのときも……」

そう言われて四葉は子供の頃にあつたことを思い出した。大晦日の夜、年越しの神事が終わり、午前1時頃に御賽銭箱を開けてお金を集めているときだつた。この看護婦が他の男子とグループでやつてきて5円玉を三葉の肩に投げつけながら言つた、お前らつて乞食と同じだな、この金ネコババできていいな、と姉は反論して、きちんと集計して神社のお会計に入れています、ご参拝ありがとうございます、よいお年を健やかにお過ごしください、と目を伏せて静かに言つたけれど、じゃあお前らが喰つてる飯代や生活費はどうなつてるんだよ、と追求され、お給料として神社のお会計からいただいています、と答え、結局ネコババといつしょじやん、と罵られるともう姉は黙つてしまふ。金を専用の筹で集めていた。あのときの姉の目、もともと落ち着きのない性格だつた姉が無理をして心を落ち着け黙々と大人の対応で作業を進めていた目を、まだ四葉は覚えている。そばにいたお年寄りが三葉を可哀想に思つて、あれは川の子らやから相手にせんとき、と励ましてくれた。それが言葉として、川の子を四葉が認識した最初だつた。まだ子供だつた四葉にとつて、いまだ忘れていない記憶だつたけれど、やっぱり看護婦の名前は知らない、そういう人間関係だつた。

「この乞食が!!」

看護婦が動けない四葉の腹部を殴つてきた。

「うつー」

「なにが巫女よ！ 同じ人間じゃない!! 奇跡なんか起こせない！ ウンコ垂れのゲロ女！ ゲロ酒でも造つて売つてろ！ この売女！」

もう虐待の発覚など気にしなくなつた看護婦が四葉の顔面を狙つて殴つてくるのを司がかばつて背中で受け止める。女性の手で男の背中を殴ることになつたので、むしろ看護婦の方が痛いけれど興奮しているので止まらない。司の背中を殴り続ける。

「この変態ども!! この町の頂点から引き摺り下ろしてやる!!」  
「司……」

四葉が身代わりに殴られてくれている司を心配すると、男らしく微笑んだ。

「大丈夫……このくらい…」

「もうやめてください!!」

沙耶香が看護婦にとりついて止めるけれど、振り払われる。

「女同士舐め合うような手で触らないで!! 気持ち悪い!!」

「お願ひです、どうか、やめてください！ 私たちが何をしたっていうの?!」

「何をしたか?! 何もしないで優雅に暮らしてやつらに私たちの苦労がわかるもんか!! お前ら毛布2枚で冬が越せるかア?! いつも小便を便器でしてやつらに!! 水道代の節約だつて言つて外に追い出される女の子の気持ちがわかる?! 川で済ませるミジメさが!! 指さして笑いやがつて!! 人を人とも思わないお前らに復讐してやる!! この動画を世界中にバラまいて!! お前らを！ この世界から消し去つてやる!!」

幼い頃から色々と町社会に不満をためて成長してきた看護婦は、沙耶香と司への暴行を続け、動けない四葉は泣きながら謝つて、やめてと頼んだけれど嘲笑される。

「きやははは♪ いいカツコね！ ザマアミロ!!」  
「ううつ…うつ…」

「このオオボラ噴きのキチガイが!!」

看護婦が四葉の鼻へ挿入されているチューブを痛いようにグリグ

りと動かしてくる。さきほどまで守つてくれていた司と沙耶香は一方的に殴られ続けて、さすがに立てなくなつて倒れているし、四葉は何一つ抵抗する術がない。

「ううっ！」

「お前も！　お前の姉も！　母親だつてそう!!　この町を救つたとか！　意味不明なことを垂れ流して!!　町民も騙されて!!　ただのゲロ女が調子に乗りやがつて!!」

「ゴホッ！　ケハッ！　うええ！」

鼻から喉、胃まで挿入されているチューブを乱暴に動かされると苦しくて咳き込むし、再び嘔吐しそうにもなる。

「ただのキチガイ家系のくせに!!」

「うつオエえ！　ゴホッ！　ゴホッ！　んああ！　痛つ！」

氣絶しそうなほど苦しいのに、苦しすぎて失神することもできな

い。

「お前の母親なんて死ぬ前に何度も人格が変わつて、狂い死にしたみたいなものでしようが!!　お前もきっとそうなる!!　人格障害は遺伝するのよ!!」

母親を侮辱された瞬間、四葉の目の色が変わる。

「お母さんを悪く言うなア!!」

四葉が怒鳴り、手足に力を入れて拘束具から抜け出そうとする。

「きやははは♪　無理無理！　それはね、薬中のジャンキーが暴れても千切れない丈夫なヤツなんだから！　きっと、お前の母さんも、こんな風に拘束されてたんだよ！　キチガイゲロ女ども!!」

「ぬああああああああああ!!!」

筋力が半減している四葉が雄叫びながら怒り狂うと、筋肉がモコモコと海綿体のように膨らんでいく。

「ブチブチ!!

四葉の腕が筋肉で隆々になり頑丈な革ベルトが千切れしていく。

「なつ…」

「うわああああああああ!!!」

さらに首や胴体、脚を固定していた革ベルトも引き千切る。四葉の

腹筋が割れるほど隆々になり、脚の筋肉も何倍にも膨れあがつた。点滴の針が皮膚から飛び出し、鼻に挿入されていたチューブを引き抜くと、すでに寝間着も破れ飛んでいて、全身筋肉隆々の四葉が全裸で立っていた。胸に装着されていた心拍を診るモニターの痕は、まるで北斗七星のように並んでいる。

「……あ……あの……拘束ベルトを……千切るなんて……バカな……」  
驚いている看護婦の前に四葉が立つた。

「北斗巫娼拳、撫那死目路!!」

ズンツ：

四葉が指先で看護婦の頭部を突いた。

「秘孔、末岳を突いた。あなたは自分の名前も忘れるほどの認知症になる。どんな記憶も3分と続かない。恨みも逆恨みも、妬み嫉みも喪い、忘却の恍惚を彷徨うといい」

「え……？」

「あなたの名は？」

四葉が問うと、看護婦は首をかしげる。

「私の名……名前……あれ、……何だつたかしら……？」

「今は何年？」

「え……？　……何年だつたかしら……ねえ？」

「ここは、どこ？」

「どこ？　…………どこなのかしら……？」

何もかも忘れている様子の看護婦を、四葉は廊下の方へうながした。

「さようなら。この部屋から出て行つて」

「あ……はい……さようなら」

看護婦は老婆のような足取りで病室を出て行つた。

「よ……四葉、その筋肉は……」

倒れていた司が驚きつつ問い合わせ、四葉も考える。

「あれから3日……筋力は半減していたけど……北斗神拳のことは忘れてない。秘孔もわかる。たぶん、ずっと意識不明だつたから身体に定着してくれたのかも……」

「そ……その身体は、そのままなのか？」

司が筋肉隆々の四葉の身体のことを問い合わせ、四葉も自分の手を見る。胸筋も肥大化していて、もともと乳房が小さめなので、おっぱいが胸筋のオマケのようになっている。

「うーん、たぶん、あと少しで元に戻る感じ。元というか、半減状態に」

「そつか……よかつた…」

「さてと、あと一人、懲らしめなければならぬ人がいるよね」

四葉が拳をバキボキと鳴らしながら、沙耶香に近づく。

「え？ え？ な、なんで?! わ、私？ と、と、友達だよね？ わ、

私たちさ！」

とても驚いて青ざめた沙耶香は後退りしたけれど、そう広い部屋ではないので、すぐに壁に追いつめられた。筋肉隆々になつた四葉に迫られて沙耶香は本能的に膝が震えた。こんな筋肉で殴られでもしたら、頭蓋骨が碎けるかもしれないと、見てているだけでわかる。

「ま、ま、待つて！ な、なんで?! ど、どうして、私?!」

「自分の胸に訊いてみたら?」

「あつ…、で…でも…ち、違…、あれは違うの！」

沙耶香が否定しても、四葉は看護婦から奪つておいたスマフォオを眼前につきつけてくる。そこには抱き合つているように見えなくもない沙耶香と司が写っている。

グシャツッ!

四葉が圧倒的な握力でスマフォオを握り潰すとバラバラに落ちた部品を踏みにじつてから、再び沙耶香を睨む。

「こんな気持ちになるなんて思わなかつた。友達を本気で殴りたい、力任せに何度も何度も殴つてやりたい、こんな真っ黒い気持ちになるなんて」

「ひつ…ひいい…」

今の四葉に殴られると瞬殺されるとわかるので沙耶香は腰が抜け座り込む。四葉のこめかみには怒りで血管が浮いていて、自分を見つめるようにつぶやく。

「これが嫉妬……最悪の感情…」

「四葉、待つて！ 違うんだ！ 誤解だよ！」

「司は黙つていて、これは女同士の話だから」

「うつ……でも、暴力はダメだよ。暴力は」

「……ええ……友達を殺したくはないから。でも、実際、よくサヤチンさんは耐えたと思うよ。お姉ちゃんを殺さなかつた……だから、私も……すーーーっ……はあ……」

四葉が深呼吸すると膨張していた筋肉が細くなり、元の四葉に戻った。

「…………」

それでも本気で怒つている顔で沙耶香を見下ろしている。

「……めん、四葉ちゃん……でも、違うんよ。あれは…」

「まだ言い訳する？」

「つ……」

「私の目を見て答えなさい」

「は、はい」

「私の意識が無い間、一度も司を盗ろうと思わなかつた？ 一度も」

「…………」

沙耶香が無意識で目をそらして右下へ瞳が動く。

「目、そらしたね」

「ち、違う……そ、そんなつもりじゃ…」

「どんなつもりでも、あんな写真を見せられた私の気持ちがわかる？」

「…………めんなさい…」

「くつ……めんで許せると、いいねッ！ この真っ黒い気持ちをさア  
！」

四葉が手を振り上げて、それから暴力を思いとどまつて手を下ろす。

「仕返しはする。つていうか、後顧の憂いをなくしておく」

四葉は病室にある机に近づくと、そこにあつたボールペンとメモ用紙を手に取り、沙耶香に突きつける。

「はつきりさせたいから書いて」

「……何を?」

「司にラブレター、きつちり司に気持ちを伝えて」

「つ…わ、私は、別に…」

「もう今さら誤魔化さないで卑怯者」

「うつ…」

「さあ、書いて! 去年、私に見てくれたよね?! エーピリルフールにこんなラブレターを渡したらテツツーどんな反応するかな、つて。あれって遊びっていうより、私への予防線だつたでしょ? 司が私のこと好きなの気づいてて、自分は司のこと好きかもしけないつて私は教えておく。そうすれば、司が私に告白したとき、振つてくれるかもしれない。そんな計算してさ」

「…あ…あれば…」

「司、たぶん、サヤボボが男として司を意識したのは中学の修学旅行のときだよ。あのとき外国人に道を聞かれてサヤボボが困つてるのを司が英会話で助けてあげたでしょ。たぶん、それがキッカケ」

「そんなことあつたかな…」

「記憶に残らないような、ちゃつちいエピソードだから」

「……ひどい……四葉ちゃん……ひどいよ……」

「悔しかつたら司が心変わりするようなラブレター、ちゃんと書いてみたら?」

そう言いながら四葉は全裸だったので着る物を探すと、一葉が用意してくれていた着替え一式を見つけた。さらに病室に専用シャワー室があることに気づいて父親に感謝しつつ入していく。

「私がシャワーを浴びてる間に完成しておきなさい。最後のチャンスよ」

「…………」

病室に残された沙耶香と司に重い沈黙が訪れる。書く前からネタバレされたラブレターを書かれる沙耶香と、それを待たなければいけない司。

「…………」

「…………」

「……ボク、何か、飲み物でも買つてくるよ。3人分」

「うん……ありがとう…」

一人にしてもらつた沙耶香は意を決して書き始める。

本当に今さらだけど、

どう伝えようか、

とにかく、

私は、

「…………うく…」

書き出しが決まらない。それでもペンを取る。

気持ちを伝えることが怖い、ずっと想つていたけれど、私たち三人の関係を壊したくなくて、

私、名取沙耶香は勅使河原司くんが好きです。

ずっと、いえ、四葉ちゃんが言つたとおり、あの修学旅行のときから好きになり、それから、ずっと好きです。

司くんが四葉ちゃんを好きなのも知つてた。

今、こうなつて強制的に、

こうなつたから伝えるわけじゃなくて、いつか、伝えたいと想つていて、それが今になつて、

今から伝えます。  
好き。

司くんが大好き。

テツツーが大好き。

この気持ちを、知るだけでいいから、知つてください。

ううん、知るだけでは、やっぱり、淋しいけど、もう四葉ちゃんとテツツーは、

「…………これじやダメ」

そこまで書いて丸めて捨てる。

私、名取沙耶香は司くんが好きです。

きつかけは、もうバラされてしまつたけど中学の修学旅行のとき外人さんに道を訊かれて困っていた私をカッコよく助けてくれた、あの

瞬間、大好きになつたよ。

あれから、ずっと好き。

ずっと司くんが大好き。

だから、私のことも見てほしい。

私の気持ちを知つてほしい。

これからも、ずっと好きでいるから。

勅使河原司くんを名取沙耶香は大好きでいます。

「…………ああ……」

赤裸々に気持ちを書きつけたために頬が熱くなつてしまい、沙耶香は顔を両手で覆う。シャワー室のドアが開いて、四葉が出てきた。

「書けた？」

「…………うん」

「そう、見せて」

「え…………四葉ちゃんに？」

戸惑つていると四葉は机にあつたラブレターを勝手にとつて黙読していく。

「うへ…………」

呻りつつ、沙耶香は四葉を見る。四葉はシャワーを浴びて髪を整え、可愛らしいツインテールに結つていたし私服も着こなしてゐる。さつきまで一週間も入浴できていなかつた姿から完璧に身支度を調えた女の本気がうかがえる姿に変わつていた。それが沙耶香にも伝わつてくる。

「じゃあ、次は私への手紙を書いて」

「え？ 四葉ちゃんに……」

そう言われて沙耶香は全裸だつた四葉の身体や、四葉の匂いと味を思い出しても赤面するけれど、四葉は冷たく言つてくる。

「何、赤くなつてるの？」

「だつて、四葉ちゃんにラブレターつて、それつて、どういう意味……」

「は？ バカじゃないの。謝罪の手紙に決まつてゐるでしょ。私と司は付き合つてたよね。目の前で見てたはず。なのに、ちよつと意識がな

い間に盗ろうとした。そのことについて、きちんと謝つて

「……ごめんなさい」

「口先だけじゃなくて、きちんと書いておいて」

「……はい、わかりました」

「で、司は、どこに行つたの？」

「みんなの飲み物を買いに行くつて。自販機、すぐそこなわりに遅いから、たぶん、時間をつぶしてくれてるんだと思う」

「そう。……。私も行くから、戻つてくるまでに書いておいて」

「はい」

沙耶香が返事すると、四葉は病室を出て行つた。

「……謝罪の手紙かあ……」

再び沙耶香がペンを持つ。

ごめんなさい、四葉ちゃん、

四葉さん、

私は四葉さんに、ひどいことをしました。

でも、どうか信じてほしい、あれは誤解なの。

あの写真は抱き合つていたわけじやなくて、四葉ちゃんの意識がなかなか戻らないから、私もテツツーも心配になつて、泣きそうになつて、それで慰め合つていただけ。それを盗撮されて、あんな風に見せつけられて、どんなにか四葉ちゃんが傷ついたかと思う。

ただ、盗もうなんて気持ちは少しも、

「……少しも……ない……わけじや……ないつて四葉ちゃん見抜いて

⋮

沙耶香は隣りにある完成したラブレターと見比べる。そして、書きかけの謝罪の手紙を丸めて捨てた。

私は卑怯な女です。

四葉さんの意識がない間に、あわよくば司くんと仲良く、いえ、もつと振り返ると、私たちのお姉ちゃんたちのこともあつて、盗つたり盗られたりも男女の

「……これじや、責任転嫁……最低だ……」

破いて捨てた。

私は最低なことを考えていました。

意識がない四葉さんことを心配する一方で、ずっと好きだった司くんと同じ時間を過ごせることに喜びを感じていなかつたといえばウソになります。

だつて、急に二人が付き合うことになつて、四葉ちゃん、もともとテツシーのこと異性として意識してる風じやなかつたのに、

「……あ～……違う」

また捨てる。

ごめんなさい。

意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好きつて気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つて考えたとき、私の中に悪い心が生まれました。

とても悪い心です。

でも抑えられなかつた。

このまま四葉ちゃんが眠つたままでいるなら、私が、司くんと、そういう考えてしまつて、

私は最低です。卑怯者です。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。

どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください。

「……これかな……」

ようやく領けるものが書けた頃、四葉と司が戻つてきた。

「おかえりなさい」

「書けた?」

「うん」

「じゃあ、そこに立つて読んで。まずは謝罪の手紙から」

「はい」

沙耶香は部屋の中央に立つ。四葉と司はソファに座つた。司は心配そうな顔をしているけれど、女性同士の人間関係に踏み込めず、四

葉から何か指示されているようで黙つて座っている。沙耶香が音読を始めた。

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好きつて気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つて考えたとき、私の中に悪い心が生まれました。……とても悪い心です。でも抑えられなかつた。このまま四葉ちゃんが眠つたままでいるなら、私が、司くんと、そう考えてしまつて、……私は最低です。……卑怯者です。ごめんなさい！　ごめんなさい！　四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください。ううつ……ぐすつ……ごめん、四葉ちゃん、ごめんなさい」

読んでいるうちに泣き出した沙耶香が頭を下げていいけれど、四葉は冷たく怒った顔のまま、今度はラブレターを指した。

「次」

「…………今？」

謝罪の手紙の直後に、赤裸々に想いを綴つた手紙を読めと言われて戸惑う。このタイミングでは読み上げにくい内容なのに、早く読みなさい、と四葉は目線で語りつつ、並んでソファに座つている司の肩に頭をもたげ、腕を組む。これでは沙耶香が想いを伝えたところで、どうにもならない陣形で、ただ単に想いを空費させるだけの、絶対的に四葉が有利で沙耶香が不利な戦況だつた。

「さあ、読んでみてよ。大きな声で」

「…………」

「早く」

「…………はい……わ……私、名取沙耶香は……司くんが…………す

…………好きです。…………」

「続きは？」

「…………きつかけは、もうバラされてしまつたけど…………中学の修学旅行のとき外人さんに道を訊かれて困つていた私を…………か……カッコよく助けてくれた、あの瞬間、大好きに…………なつたよ。

……あれから、ずっと……好き。……ずっと司くんが……大好き。……だから、私のことも……」「最後まで全部」

「…………み……見てほしい。…………わ……私の気持ちを……知つてほしい。これからも、ずっと……好きでいるから。勅使河原司くんを……名取沙耶香は……大好きでいます。ううつ……ああっ！」

沙耶香が手紙で顔を隠して泣く。ぽろぽろと涙が手紙に降つていく。大切な想いを告白させられているのに、その対象の司はソファの上で四葉と座つていて、沙耶香から目をそらしている。答えは聞くまでもないし、聞きたくない。四葉が冷厳と言つてくる。

「じゃあ、もう一回、謝罪の手紙、さつきより大きな声で」「え……もう一回？ なんで？」

「ふーん、一回で謝罪の気持ちが伝わるとでも思うの？」  
「……いいえ……もう一度、読ませてもらいます」

沙耶香が手紙を持ち替えて音読する。

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを……好きって気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの……意識が……戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つて考えたとき、私の中に……悪い心が生まれました。……とても悪い心です。でも抑えられなかつた。このまま四葉ちゃんが……ね……眠つたままでいるなら……私が……司くんと……そう考へてしまつて、私は最低です。卑怯者です。ごめんなさい。ごめんなさい。四葉ちゃんを深く傷つけたこと心からお詫びします。どうか、こんな私ですが、これからも友達でいてください」「なんか、さつきより気持ちがこもつてない感じ」「…………ごめんなさい」

「ラブレターも、もう一回」「…………どうして？」

「もう一回」

「はい……私、名取沙耶香は司くんが……好きです。きっかけは、もうバラされてしまつたけど中学の修学旅行のとき外人さんに道を訊

かれて困っていた私をカツコよく助けてくれた、あの瞬間、……大好きになつたよ。あれから、ずっと好き。ずっと司くんが……大好き。だから、私のことも……見てほしい。私の気持ちを知つてほしい。これからも、…………ずっと好きでいるから。勅使河原司くんを名取沙耶香は…………大好きでいます。…………

もう熱い想いではなく絶望と徒労感のこもつた声だつた。それでも四葉は容赦ない。

「また謝罪の手紙。ちゃんと反省の気持ちで」

「はい……」

沙耶香が震える手で読み始めると、司が可哀想になつて四葉の背中を静かにトントンと触れて目線で、もう許してやれよ、と伝えたけれど、四葉は司の瞳を見つめ返した。

「……」

「……」

四葉が無表情に瞳の奥を見つめると、司は後ろめたいことはないはずなのに後ろめたい気持ちになつて目をそらした。沙耶香の朗読が続く。

「……抑えられなかつた。このまま四葉ちゃんが眠つたままで……」

読み終わつても、また四葉が冷たく言う。

「次、ラブレター」

「……はい……」

もう沙耶香も涙が出なくなつて、静かに赤裸々なラブレターを読んだ。

「謝罪の手紙」

「……」

司は四葉の表情を恐る恐るうかがう。表情は無く、まだ一欠片も許す気持ちは生まれていらない様子で、司は女の嫉妬による怒りの怖さを知つた。謝罪とラブレターを何度も繰り返し繰り返し朗読させるという精神的リンチが続き、沙耶香の目も声もうつろになつていく。

四葉は朗読を聞きながら、ゴミ箱を探つた。ゴミ箱には沙耶香が書

きかけてボツにした手紙が何枚も入っていた。それを拡げて目を通していく。

「本当に今さらだけど？　本当に今さらよね」

「つ！　それは！」

沙耶香が手を伸ばそうとすると一睨みされて動けなくなる。四葉は推敲段階の沙耶香が心に浮かべて廃案にした考えを拾つて晒していく。

「気持ちを伝えることが怖い、ずっと想つていたけれど、私たち三人の関係を壊したくなくて」

「や、やめて、四葉ちゃん、それは、考へてる途中のものなの！」

「司くんが四葉ちゃんを好きなのも知つてた。今、こうなつて強制的に？　強制的にねえ」

「お願ひ…やめて…」

沙耶香が両手で耳を塞いだ。

「テツツーが大好き。この気持ちを、知るだけでいいから、知つてください。ううん、知るだけでは、やっぱり、淋しいけど、もう四葉ちゃんとテツツーは、…つて。わかつていて盗るつて、どういう気分なんか。うちのお姉ちゃんもやつたけど……ひどい話だよね」

「ううつうつ…」

四葉はラブレターの廃案分から謝罪の廃案分へと移る。

「私は四葉さんに、ひどいことをしました。でも、どうか信じてほしい、あれは誤解なの。…誤解つて便利な言葉ね」

「読まないで、お願ひ！」

「慰め合つていただけ。それを盗撮されて、あんな風に見せつけられて、どんなにか四葉ちゃんが傷ついたかと思う。ただ、盗もうなんて気持ちは少しも、…少しも？　少しもないのに、謝罪の手紙を書いてるの？」

「それはボツなの!!　違うの!!　読まないでよ!!」

「え？　なんで私、怒鳴られるの？　怒られてるの、どつち？」

「……お願いします、それは読まないでください」

「こつちの方が本音っぽいよね」

「違う！ そんなこと思つてないから！」

「思つてないこと、どうやつて書いたの？ 別人格？」

「…………」

沙耶香が黙り、四葉は破いてあつた手紙もつなぎ合わせて読む。  
「私は卑怯な女です。四葉さんの意識がない間に、あわよくば司くんと仲良く」

「つ?! それだけはやめて!!」

「いえ、もつと振り返ると、私たちのお姉ちゃんたちのこともあって、盗つたり盗られたりも男女の……男女の、何つて書くつもりだつたの、これ？ 盗つたり盗られたり、当たり前つてこと？」

「…………それは…………書き損じです」

沙耶香は国会で官僚が答弁するように答えて、目をそらしている。四葉は手紙の束で沙耶香の頬をパンパンと叩いた。

「これつて最低の責任転嫁じゃないの。ようするに、うちのお姉ちゃんが盗つたから、妹の私から盗つてもOKつてこと？」

「…………そんなこと思つていません」

「そうとしかとれない」

「…………誤解です」

もう沙耶香は心を閉ざしつつあり、官僚答弁を通していく。四葉はゆっくりと沙耶香のまわりを歩いて語る。

「私がいないところで姉のひどい悪口を言つてるのは知つてる。それは当然だと思う。けど、それと同じことを自分がするつて、どうなの？」

「…………同じ？ ゼンゼン違う!! お姉ちゃんは結婚してたのに盗られた!!」

「結婚していない私からは司を盗つてもいいってこと？」

「そんなこと言つてない!! ゼンゼン違うから取り消して!! お姉ちゃんが、どんな思いをしたか!! あんな盗撮写真の比じやないのに!!」

「…………。どうして、私が怒鳴られてるの？」

「ハア…ハア…取り消して、でないと許さない」

沙耶香が四葉を睨んで言う。その怒りは本物だったので四葉も自戒する。

「…………そう、じゃあ、取り消すわ。で、あなたの謝罪は？」

「…………あと、どうすれば許してくれるのよ?!」

「何その言い方」

「…………」

「朗読、再開して」

「ごめんなさい。意識がない四葉ちゃんのお見舞いに来ているうちに、司くんを好きって気持ちが抑えられなくて、もしも、四葉ちゃんの意識が戻らなかつたら、この先どうなるんだろう、つて考えたとき、私の中に悪い心が生まれました」

やや棒読みになつた沙耶香の朗読が再開され、すぐに謝罪の手紙が終わり、またラブレターになる。さらに謝罪の手紙になり、再びラブレターになり、その繰り返しが30分も続くと、沙耶香は心と喉が疲弊して崩れるように座り込んで泣く。

「もお…もおお…ゆるして…ちゆるしてええ…ふええええん！」

「…………」

「四葉、そろそろ許してやつてくれよ。もうサヤボボ、頭がおかしくなりそうな顔してるぞ」

「うーん……どうしようかな、もう少しイジメるつもりだつたけど」「ゆるしてえええうふえええ！」

「四葉、そろそろ夜が明けるしさ」

「わかつた。じゃ、司、こつちに来て」

「え、うん」

呼ばれて司も近づいた。

「サヤボボ、もう手紙は捨てていいから両手を頭の後ろで組んで」

「…………こう？ ぐすつ…ひつく…」

言われたとおりに沙耶香は後頭部で手を組む。沙耶香はキヤミソールを着ていたので両腋が露出された。

「お見舞いにキヤミソールで来るつて盗む気まんまだよね」「ぐすつ……もう許してよ。ごめん、四葉ちゃん」

ようやく許してくれそうな気配を感じて、少し沙耶香も落ち着いてきた。けれど、四葉は意地悪く微笑む。

「司、言つておいた、あれやるよ」

「あれ、か……」

司は気が進まなさそうに少し顔を赤くした。そして司と四葉が顔を近づけて沙耶香の両腋の匂いを嗅ぐ。

「ちよ…、ヤダ！ 何してるのよ?!」

「仕返し♪」

「うう…四葉ちゃんみたいに、いい匂い、しないもん」

「どんな匂いだつたか、司と耳元で囁いてあげる」

「絶対ヤダ!! お願ひだから、もう許して！」

「じゃあ、あとは宮水スペシャルいきます」

「うう…それも嫌な予感しかしないよお」

「予感や予知ができるようになつたら一人前だよ」

そう言いつつ四葉は夜食にと買われていたコンビニのオニギリを開けると、半分に割つた。

「はい、これを口に入れて、よく噛んで」

「……やらないとダメ？」

「ダメ♪」

「……」

諦めて沙耶香が口を開けると、オニギリの半分が挿入される。

「飲み込まないで、よく噛むんだよ」

「…うぐ…うぐ…」

「よく噛めたと思つたら、自分の両手に出してみて」

「…あ…」

でろり、と咀嚼物が沙耶香の両手に落ちる。白米と海苔、沙耶香の唾液が混じり、少し泡立つていて見た目にキレイとは言いにくい。

「じゃあ、私も」

今度は四葉が残りの半分を口に入れて噛む。

「んぐ♪」

ほどよく噛むと、自分の両手に吐き出していく。

すーーーつ…

咀嚼物はキレイに噛み込まれ、白米と海苔の混じり方もあざやかで、唾液は泡立たずに艶やかに光っている。

「おおつ……さすがプロ…」

司が感心している。二人の咀嚼物は、まるで寿司職人が握った物と、素人が初めて握った物が違うように雲泥の差があった。こんなことにも技術の洗練があるのかと、驚くほどの違いがある。

「こんなに差があるのか……」

「こんなことさせて、どうする気よ、これ」

沙耶香が困った顔で咀嚼物を手で包んでいる。かなり見られたくないさそうだった。

「司に食べてもらうの」

「ええ?」

「はい、どうぞ」

「司に食べてもらうの」

「はい、どうぞ」

「フフ、くすぐつたい」

「……」ちそうさま

「美味しかった?」

「……うん……けつこう…」

四葉が笑顔で差し出すと司は赤面しつつ、四葉の咀嚼物を四葉の手から食べる。

「フフ、くすぐつたい」

「美味しかった?」

「……うん……けつこう…」

実は子供の頃から食べてみたいと思っていたので、無表情を装おうとするものの顔が嬉しそうだつたし、ズボンの股間が勃起で膨らんでいる。

「はい、サヤボボの番」

「わ、私の……え、でも……こんな汚い…」

沙耶香が戸惑っている。

「司、さつきのラブレター、率直に、どうだつたの?」

「それは…………まあ…………嬉しかったというか…………女の子に好かれて、悪い気はしない、というか…………ありがとう、というか…………まあ…………そんな感じ」

「だつてさ」

「四葉ちゃん……」

「ほら、手を出して、司に食べさせて」

「…………汚いよ、こんなの…………それに…………間接キスに…………」

「食べるか、食べないかは司しだい。さ」

四葉が沙耶香の手首をもつて咀嚼物を司の方へ向けさせる。

「司、どうする？ 食べる、食べない？」

「…………じゃあ」

司は沙耶香の咀嚼物を沙耶香の手から食べた。

「…………テツツー…………」

恥ずかしいのに、ものすごく嬉しくて沙耶香が涙を浮かべた。

「司、感想は？」

「これも…………美味しかった」

赤面しながら司が飲み込む。やはり、やや勃起している。

「…………四葉ちゃん…………どういうつもりなの？」

「バックアップっていう考え方も、悪くないかなって」

「バックアップ？」

「もしもさ、私がお母さんみたいに早く死んじやつたら、残された司つて淋しいでしょ？ お父さんも東京でお金で済ませてるみたいだけど。いつそ他人より友達の方がいいかなって」

「…………女として、それでいいわけ？」

「たつた一つしかないパンをめぐつて殴り合うか、分け合うか。ほんの小さな島一つをめぐつて核戦争をするか話し合うか。かけがえのない男の子をめぐつて、かけがえのない友達をなくすか、仲良くするか。答えは、そう難しいことじゃないと思うよ」

「…………」

「こういうのも、あるしね」

四葉が司のポケットからコンドームを出して見せた。沙耶香が悩む。

「ううん…………少し考えさせて」

「何年でも、どうぞ」

朝日が昇つて病室に光りが入り、四葉に後光が差したように見え

た。

一ヶ月後、高校の五時間目に、きちんとツインテールに結い上げた四葉は窓際の席で授業を受けていたけれど、なにかが起こるような気がして窓から空を見上げた。

「…………入れ替わり？　じゃ…………ない…………何かな…………」

空は良く晴れていて平穏だつたし、再び誰かと入れ替わるような予感でもないのに、なんだか胸騒ぎがする。

「うくん…………」

頬杖をついて胸騒ぎの理由を考えてみる。その次の瞬間、胃袋が突き上げられるような強烈な吐き気が襲ってきた。

「うつ?!」

これは我慢できない、吐く、とわかるほど強烈だつたので四葉は立ち上がりつてトイレに走ろうとしたけれど、間に合わない。

「うつ……うええええげえええ！」

ぼたぼた…

さつき食べたばかりの昼食が嘔吐物になつてドロドロと四葉の両手に拵がる。机や教科書を汚さないようにと両手で受けている。

「ううつ……おええつ！　えぼつ！　うええええげええつ！」

ぼたぼた…ビチャビチャ…

小さな手では受け止めきれず、零れて制服の袖を汚し、机にもビチャビチャと嘔吐物が落ちる。クラスメート達が氣の毒そうに四葉を見ている。先月、入院していた話は全員が知つていてるので、まだ体調が回復しきっていないのに無理して登校していたのかな、と可愛らしい女子が嘔吐物で汚れていくのを生温かい目で見つつも、やつぱり何人かは宮水神社の祭りのこと思い出している。ユキちゃん先生と保健委員はバケツと雑巾を用意するために走り、沙耶香と司が心配そうに歩み寄る。

「おええつ……おええつ……うえええつ……」

もう胃が空っぽになつても四葉は吐いている。苦しくて涙がにじみ、咳き込んで鼻水も垂れる。

「ハアハア…おええつ…うつ…うええつ…ケホツケホ！」

「四葉」

「四葉ちゃん…」

司が心配して背中を撫で、沙耶香は誰にも聞こえないほどの小声で四葉に囁く。

「まさか…四葉ちゃん…」

「ハアーひつ…ハアーひつ…ぐすつ…ぐすつ…」

やつと嘔吐衝動がおさまってきた四葉が羞恥心にさいなまれて泣き出すかと周囲は思っていたのに、幸せそうに微笑んで嘔吐物にまみれた身体で自分の胸を抱き、下腹部を優しく撫でた。

「司、赤ちゃん、できたみたい」

汚れた顔なのに笑顔が誇らしくて輝いて見える。

「なつ…マジ、で…」

「あつ、あとね。言い忘れてたけど、お姉ちゃんが勅使河原姓になつたんだから、司は宮水姓でお願いね。どつちの家も絶えないようだよ」

「…………わかつたよ、もう、何もかも、四葉の言うとおりでいいよ」

「四葉ちゃん……私はお妾さん、つてことなのね…」

司と沙耶香は遠い目をして、飛騨山脈を見上げた。そして、全身嘔吐物まみれでプロポーズした女の子のことよりも、それを受諾した司のことが、ゲロ養子と言われて長く語り継がれた。

大晦日、ケンシロウは年越し派遣村に辿り着いていた。

「…み…水…」

水を求めて手を伸ばし、ガクッと崩れる。薄汚れた毛布のような物をマントのように身体に巻いて寒さをしのいでいる。

「よかつたら、どうぞ。公園のトイレの水道で汲んだものだけど」

まだ20代の青年が同じような境遇にいることで同情して声をかけてくれる。

「あ…ありがとう」

礼を言つたケンシロウは使い古されたペットボトルに入つた水を飲む。

「ありがとう……生き返ったよ……」

「いえ、別に……」

「自分は田中ケンシロウ。君の名は?」

「名……名前か……もう長いこと、バイト君とか、ハケンさんって呼ばれてさ。もう自分の名前なんて、意味ないのかなって」「こんな時代でも希望は捨ててはいけない」

「へつ、オッサンこそ、いい歳だろ……すんません。つい、心がすさんで。……勢いを増した向かい風の中を、進んでるような、時代に嫌気がして」

青年は配給された毛布を寒そうに掻き寄せた。ケンシロウが問う。

「君は、なぜ、ここに?」

「ティヤマト特需が終わって急に職が減ったのは、みんな知ってるでしょ。それですよ。まあ、生活保護って手もあるんでしようけど、オレ、オヤジが霞ヶ関とかに勤めてて、そんなん申請したら一発で連絡いくし。オヤジに、そんな目で見られるのイヤだし。今はマイナンバーなんとかで、離婚した相手にまで連絡いくし……そういうくらいなら死んだ方がマシですよ」

青年は痒そうに頭を搔いた。そこへ、大柄な男が駆けつけてくる。

「おい! 探したぞ、ケンシロウ!」

「ジャギ兄さん……」

「お前にいい仕事がある」

「格闘技とかは、もう……」

「安心しろ、そつち系じやない」

「組織で行動するのも苦手で……」

「ああ、そう言うだろうと思つてな。ごく普通の交通整理の仕事だ」

「運転免許も持つてないから、そういう仕事も……」

「大丈夫だつて! 片側通行にしてるとき、片方を止めて、もう片方を流す。で、しばらくしたら、反対を流す。それだけだ。今は不況だけどよ、ちょうど後援会に入ってくれてる建設会社の社長がよ、空きが

あるからって話でよ。やつてみろよ、な？」

「都会の喧噪も実は苦手で……車が多いのも落ち着かなくて……」

「すげえ山奥だ。ときどきしか車は通らねえ。それでも交通整理員はおかないとダメだつてルールがあつてよ。ま、いわゆる雇用対策だな。コンビニが一件しかないような山奥の町だ。お前が組織で生活するのが苦手だつていうから寮も個室があるところを探したんだ。やつてみろよ、な？ 山奥だけど、いいところだぞ。空気もキレイで水も美味しい！ オレも老後は、あそこで過ごしたいつてくらいに」「……やつてみようと思いますが……彼も、仕事がないようなのです」

ケンシロウが青年を指した。

「なんだよ、友達か。若いな」

「さつき、水をいただいて」

「お前、あいかわらず甘いな。それだけで恩に着やがつてよ。そこまで甘いと、こんな時代でも生きていけねえぞ。まあ、いい、あと一人ぐらい、なんとかなるだろ」

「ありがとう、ジャギ兄さん。君、いつしょに行こう」

「……オレっすか？」

「ああ」

「……嬉しいっすけど……」

「君の名は？」

「……立花瀧つす」

瀧が涙を滝のように流しながら微笑んだ。

二ヶ月後、放課後の高校の進路指導室でユキちゃん先生と四葉が向かい合っていた。

「宮水さん、言いにくいくことですかけれど、あなた、妊娠されていますよね」

「何も言いにくいくことはありませんし、妊娠しています。それが何か

？」

「…………まだ、高校生じゃないですか」

「この国の法律は16歳から結婚できるはずです」

四葉は身体を冷やさないようにストーブのそばへ、パイプ椅子を移動させてから、まだ教師は立っているのに先に座つた。

「それで、先生のお話っていうのは？」

「……今時期、三年生からの進路を決定していくのですが、宮水さんのご意向をうかがつておきたくて」

「つわりもおさまってきたから、出席日数が足りれば、この高校を予定通りに卒業して通信制の大学で歴史を学び、育児の段階を見て、神職の資格を取る大学を目指します」

「……おうちを継がれるのですね」

「ええ」

「た……ただ、ご出産が、……いつになりますか？　三年生のうちですよね」

「予定日は8月で、ちょうど夏休みなので麓の病院で出産します」「…………。…………い……言いにくいくことなんですが、妊娠中の安静を保つためにも、一度、ご家庭に入つて、それから通信制の高校などを卒業されるのは、どうでしょうか？」

「校長と教育委員会に自主退学してもらえて指導されたの？」

「…………」

生徒にウソはつきにくいのでユキちゃん先生は目をそらして沈黙し、大人らしく否定も肯定もせずに切り口を変える。

「つわり、まだ残つてますよね。ときどき教室で吐いたりして、恥ずかしいでしよう？　一部の心ない男子から汚いなんて言われてイヤな思いをしていませんか」

「放射性物質の汚さ、しまつの悪さに比べたら、嘔吐物なんて身体に塗つてもいいくらい、汚くも何ともないです。本当に汚いものは10万年も浄化にかかる。それに、先生の論法は一部の心ない男子が言い立てるので、私は登校しない方がいいという、むしろ彼らの理屈を受け入れるものです。恥ずかしい、恥ずかしくないという話でも、私は妊娠を誇らしく思っていますから、何一つ恥ずかしいと思つていません」

「…………。……お相手は、勅使河原くんでしたよね」

「ええ」

「校則では不純異性交遊は禁止されているんですよ」「純粹に子供がほしくて性交しました」

「つ、……せ……」

「何一つ不純なことはありませんが?」

「…………」

ユキちゃん先生は赤面して、また切り口を変える。

「体育も大変ですよね。三年生は体育祭で組み体操もあるし、マラソンも妊婦さんには危険じゃないかと……」

「ごく少数ですが、他県では妊娠した生徒に配慮して無理のない範囲で体育に参加させ、単位を認めて学業と妊娠を両立させて卒業させている例もあるそうです」

「…………うちの学校では前例がないので…………」

「私が最初の例になれば済むことです」

「…………、校長先生から、他の生徒に悪影響があるからって……言  
われて……るんですよ」

「私の存在は悪ですか?」

「…………そういうわけじや…………」

本人の説得が難しそうなので、また切り口を変えてみる。

「お父さんは何とおっしゃっていますか。ご懷妊のこと」

「お前の好きなようにしなさい、と。父のところにも校長と教育長がそろつて町長室に来て何か言つたらしいですね。お姉ちゃんから聞いています」

「…………」

この土地での最高権力者の娘に、どう言つて自主退学してもらうか、いい案が浮かばずに黙り込んでいると、四葉がまっすぐに瞳を向けて問う。

「どうして同じ女なのに、一度のおめでとうもなく追い出す話ばかりなんですか? まず一度、この子と私に、おめでとう、って言つてもらえますか?」

「……すみません。……おめでとうございます」

「じゃ、もういいですね」

四葉が勝手に話を終わらせて席を立つた。

「遅くなる前に帰ります」

「あ！ いえ！ でも、まだ！」

「まだ、何か？」

四葉が睨むと、ユキちゃん先生は萎縮してしまった。人としての格が違うと、本能で感じている。四葉が悲しそうに涙を零してみせた。

「先生、ご自分がさつきから、どれだけ嫌な大人を演じているか、自覚がありますか？ 子供が欲しくて妊娠した生徒を、なんとか自主退学させようと上司の言いなりになつて、本心ではしたくない指導をしている。先生は、どんな気持ちで先生になつたの？ その初心と今の言動は一致しますか？」

「つ……わ……私は……」

「今、ここが、あなたの人生の糸の分岐点です。ちゃんと高卒資格を産まれてくる子供のためにも取つておきたいという生徒へ協力してくれる教師になるか、職員室の空氣に流されて追い出そうとする官僚的な教師になるか、あなたが選べるし、あなたしか、あなたのことは選べない。さあ、どちらにしますか？」

「……わ、私が間違つっていました！ 許してください！」

神前に懺悔する信徒のようにユキちゃん先生は頭を下げて協力を約束した。

春の夕方、沙耶香は自宅で送つてもらつた画像を見て、温かい気持ちになつていた。

「赤ちゃん……もう頭とか手が、写るんだ…」

スマフォで見ていく画像は超音波エコーで撮影された胎児で、もう頭や手足の形がわかるようになつていて。不思議と嫉妬は感じない。むしろ、温かくて抱きしめたいという気持ちが芽生えている。

「きっと、かわいいよ、四葉ちゃんの子供だもん」

「それ赤ちゃんの写真?」

背後から姉の早耶香が声をかけてきた。コンビニの制服を着ている。

「うん。お姉ちゃん、これからバイト?」

「そうよ」

「お姉ちゃん、えらいよね。遊んで暮らせるくらい感謝料もらつたのに」

「それと、これとは別よ。人間、働かないと。っていうか、家にいると、いつまでもウジウジするし。いつてきます」

早耶香は自宅を出ると、コンビニの裏口から入り、一人の店員として働き始める。人口は少ないけれど、一件しかないコンビニなので夕方は、それなりに忙しい。その忙しさが落ち着いてくる頃、勅使河原建設が経費でまかっているレクサスのセダンが駐車場に駐まつた。ごく目立たない白色を選んでいるけれど、わかる人はわかる高級車だつた。降りてきたのは克彦と三葉で町役場での会議が終わつた後、少し買い物をして他の議員のところで呑みながら会談するために寄つた様子だつた。

「……」

三葉と克彦は来店すると、カウンターにいたのが早耶香だつたので会釈している。早耶香は大きな声で挨拶する。

「いらっしゃいませ。泥棒議員さん」

「…………本当に、ごめんなさい……サヤチン……」

三葉が居心地悪そうに謝りつつ、接待のために必要なおつまみや酒類を選んでいる。克彦も遠慮がちに頭を下げつつ、話題を変えようと、早耶香に話しかける。

「……で働いてるのか……、もつといい就職先……言つてくれたら紹介できるぞ」

「別に、あなたのお世話にならなくても、お父さんに頼めば、どこかのハコモノ法人に入れてもらえるけど、あえて、ここにしたの」ほんの一時期だけ夫だつた男に対して、早耶香はビールくらいに冷たい声で答える。

「だつて、ここに私がいると、そこの泥棒議員がコンビニを使いにくくて面白いでしょ」

「…………」

町に一件しかないので必要なときは避けることができない。今も、そうだった。お客様なのに申し訳なさそうに買い物している三葉がレジにいる早耶香へ向かおうとしたとき、別の客に先を越された。ずっと店の奥で立ち読みしていた瀧が、やつと30%オフになつた弁当を手にして早耶香の前に立ち、都会的な無関心さで無言のままだつたけれど、さすがに間近で見て、早耶香に気づいた。

「あ……」

「あ、お久しぶり。どうして、この町に……」

早耶香も瀧の顔は覚えている。そして、冷たくはない声で話しかけたのに瀧は目を伏せた。克彦も気づいた。

「お前、どうして、この町に……あ……」

問い合わせて克彦は瀧が着ている制服に気づいた。勅使河原建設の子会社、勅使河原派遣サービスの交通整理員が着る制服だった。  
「うちの子会社に入つて……」

勅使河原建設で働いてくれている社員は次の後継者として全員を把握しているけれど、子会社の出入りが激しい派遣サービスで働いている者のことは、ほとんど把握していかなかつた。瀧は都会的な無言で財布を出した。それで早耶香も、今さら会話をしたくないという気持ちを察して、店員としてレジをする。

「ありがとうございます。唐揚げ弁当、30%オフで406円になります」

「…………。あ、あれ……」

瀧は財布から小銭を出していくけれど、310円しか持ち合わせていなかつた。財布に紙幣は入つていない。

「じゃあ、カードで」

「はい、お預かりします。…………」

早耶香はカードを通したけれど、弾かれてしまつた。

「申し訳ありません、お客様。こちらのカードは、ちょっと…」

「あ、そつか。先月、止められて……じゃあ、このカードで」

もう一枚、瀧はカードを出したけれど、それも弾かれた。

「……なんで……クソ……」

「……。申し訳ありません、お客様……こちらのカードも、ちょっと

…

「……………」

黙っている瀧がプルプルと震え、耳が赤くなつていく。社の寮で朝夕の食事が出ると聞いていたのに、食堂で働くパートが病欠がちで今夜も出なかつたし、なぜか給料日も遅れていて、持ち合わせがない。そもそも寮費として給料の大半が引かれるので、自由になるお金は少なく、以前にリボ払いでも買った新婚生活のための家具などの支払いを滞らせたためにカードも、いつのまにか止められていて、今夜の夕食を買えない。

「…………う…………うぐつ…………」

せちがらい世の中と、自分の境遇、そしてタイミング悪く離婚した相手に、そんなミジメな姿を見られたことが恥ずかしくて死にたくなつてくる。背後から見ていて、だいたい状況がわかつた三葉が百円玉を、そつとレジに置いた。

「よかつたら、どうぞ」

「つ…………いらねえよ！」

男らしく瀧は百円玉を弾くと、自分の小銭だけ握つて店を飛び出していく。

「「…………」」

早耶香と三葉、克彦は言葉がないし、予定があるので三葉が買い物カゴを置くと、早耶香も店員として手早くレジを済ませた。

「ありがとうございました。つていうかさ、彼、テツシーンどこで働いてるのに、なんでお金ないの？」

「あ、いや、それは……」

克彦が言いにくそうに目を彷徨わせる。

「まさか、三葉ちゃんの元旦那だからって意地悪してるとか？ 小さい男ねえ」

「ち、違う！　さつきまで知らなかつたし！　あいつが、ここにいるのも！　うちの子会社にいるのも！　マジで！」

「じゃあ、何でお金に困つてる感じなの？　もしかして、三葉ちゃん、彼からは、すごい慰謝料を取つたの？」

自分が離婚された前後のショックで、三葉と瀧が、どんな条件で離婚したのかなど、今まで興味をもつていなかつた早耶香が問うと、三葉は首を横に振つた。

「ううん！　お金は無し！　あ、でも、賃貸したマンションとか、家具とか、そういうのはあつたから、それかも」

「にしても、勅使河原からの給料は？　やつぱりテッシーが意地悪して？」

「だから違うつて。……意地悪じやねえよ……社の方針というか……」

「どんな方針よ、それ」

「……こだけの話だぞ。絶対」

「で？」

「勅使河原派遣サービスは意図的に倒産させる予定なんだ」「なんで？」

「本社で使いにくい人材を、こつちに転籍させてあるからさ。あと、過去の労災とか、いろいろ面倒な関係のことを、全部つめこんであつて、そのまま来月には倒産させてチャラつてわけだ。倒産前だから給料の遅配もあるかもな。もう子会社といつても資本関係も切つてあるし」

「うわっ……汚つ……東京では、見かけたけど、この田舎で、そんなことするんだ？」

「田舎なりに色々あるんだつて。一応、配慮もあつて、使えそうな人材だけは、また拾う予定だから」

「あ、もう、こんな時間！　遅れちやうよ！　あの議員さん、時間にうるさいから！」

三葉が時計を見て慌てた。早耶香は冷たい目で見る。

「泥棒議員が密談に行くのね。腐敗の匂いがする」

「…………」

否定している時間もないで一人は会釈して店を出て行つた。人が去ると、早耶香は店員として働き続ける。閉店までに、ぼろぼろと来る客のうち、顔見知りの客は早耶香をねぎらってくれるし、ついでに勅使河原と宮水の悪口を言つていく。町民たちと談笑していると、傷ついていた早耶香の気持ちも日に日に晴れてきていたし、お客様の一部はレジを通した後のお菓子やジュース、ビールを早耶香にくれたりする。

「ありがとうございました。明日も、よろしくお願ひします」

都会のコンビニと違つて閉店がある。早耶香は、もらつたお菓子や飲料を袋に入れて店を出ると、なんとなく湖の方へ向かつた。すぐに家に帰らず、お菓子を食べながら町の夜景を見ている。

「毎日もらうと、また太っちゃうかも。痩せたのだけは、離婚された利点だったのに。あ、あの人があ……」

湖畔で瀧が今にも入水自殺しそうな顔で水面を見ている。今声をかけないと明日の朝、パトカーや救急車が集まつたりして、それを見て後悔するかもしれないと思った早耶香は瀧へ近づいた。

「これ、あげる」

早耶香はポテチとビールを瀧へ差し出した。

「…………施しかよ？」

「私が施されたんだよ。捨てられて可哀想な女ですからね。この町で同情ランキンぐやつたら第一位は私だよ、きっと。二位は、テツシ一の弟かなああ……」

「あいつに弟がいたんだ……」

「一応、結婚式には来てたよ。ま、覚えてないよね。合同結婚式なんてバカな企画の、自分の親戚になるわけじゃない参加者のことなんてさ」

「…………」

「食べなよ。お腹空いてるんでしょ」

「…………」

ポテチとビールを見せられて、瀧は無言だったけれど、お腹が返事

をした。

「ほら

「……ありがとう…」

「よしよし」

「……なんで、あいつの弟が二位なんだよ?」

美味しそうにビールを飲み、ポテチを食べながら瀧が訊いた。  
「早くも尻に敷かれてるからね。ゲロ養子つて、ひどいアダ名もある  
し。あの四葉ちゃんが奥さんで、婿入りだと……きつそう……下手し  
たら、お父さんみたいに宮水家を追い出されるかも……そう思うと、  
ひどい家系だよね、あそこ

「……もう……宮水のことは……考えたくないんだ……」

「……」

早耶香はジュースを飲んだ。すでに瀧はポテチを食べ終わっている。  
かなり空腹だった様子で、まだ胃が鳴っている。もう一袋、別の  
お菓子を渡しながら、早耶香は誘った。

「うちで夕飯、食べていく?」

「……」

「遠慮しなくていいよ」

「社の寮、門限があるんだ」

「……門限つて……」

「破ると、給料を減らされる。……ケンシロウさん、門限が性に合わない  
といって辞めたし……」

「ひどい会社……」

「……」

「……しかも来月の給料は……」

「ここだけの話、と克彦に念を押されているので当事者になる瀧に  
言つてはいけないことだと、わかついていても可哀想でたまらない。」

「君つてさ、就職運、悪いみたいだね」

「…………オレだつて…………頑張ったんだ……」

「…………。初任給、そんなに高くないし、昇給も、ちょっとだけど、町  
役場からの天下り団体だから絶対倒産はしないところなら、紹介でき

るかもしれないよ。うちのお父さんに頼めば

「…………どうせ、……非正規だろ。天下りの爺に使われるバイトくん……何回、言つてもオレの名なんて覚える気なくて、バイトくんつて呼べる職場……健康保険もなくて」

「応、直接雇いの正規職員で、社会保険もあるよ。公務員じやないから共済には入れないけど、よっぽどの横領か飲酒運転でもやらない限り、クビにならない」

「…………労災保険は？」

「当然、あるよ。っていうか、危険な仕事じやないかな。体育館の予約受付とか、プールの清掃とか、そんな感じ」

「…………」

「どう？」

「…………」

瀧が両目から涙を零した。

「ぜひ、お願いします！」

「よしよし、お父さんに頼んであげる」

立ち上がった二人は名取家へ向かつた。

同じ頃、四葉に誘われて沙耶香と司は宮水家で夕食を食べていた。一葉もいて四人での楽しい夕食だった。食べ終わって片付けを手伝うと、一息ついてから司と沙耶香を見送るために、みんなで外に出たときだつた。一葉が星空を指して言う。

「今夜は、あの星が見えるねえ」

「どの星のこと？」

四葉が問い合わせ、一葉は北斗七星の傍らに輝く星を指した。

「ほれ、あの7年前、町のみんなが見える見えないで話題になつた星よ」

「それって……」

「あの北斗七星の少し横に。今夜は、よう見えるよ。7年前にも見えた気がするような、見えんかったような、あの星が」

一葉が指している星は、ティヤマト彗星落下の年、町民の多くが見

ていたけれど、落下後には見えなくなつた星のことだつた。

「みんなで、見えるの、見えないの、言うた、あの星、今夜は、よう見えてるよ、四葉にも見えるかい？」

「……」

四葉は北斗七星を見て、まだ見えない星が祖母には見えているのだと知り、そつと抱きつくと下腹部を一葉の手に擦り寄せる。

「五葉、一葉お婆ちゃん：ひいお婆ちゃんの声、聞こえてる？」

「きつと聞いてくれてるよ。それにしても、今夜は星空がキレイで、まるで、ほしのこえが聞こえるようやね」

山奥の田舎なので星空は盛大だつた。四葉が涙を零さないように言う。

「死兆星……その、ほしのこえは、あと5年、ううん、せめて3年、聞かないでほしかつた」

そして四葉は90歳になつた祖母と自分の身体が冷えないうちに家に入つた。

副題「新世紀救世主伝説 北斗の拳四葉（ケンショウ）」完